

## *I LOVE YOU*

~ I LOVE YOU 何も知らない僕は幼すぎたのだろうか  
I LOVE YOU その言葉だけが僕の愛の全てだった  
悲しく過ぎていく時間の中で僕は夢を見、そして愛を求めた  
幸せに形が無いから僕はいつでも不安の中に居た  
．．．真実の愛．．．僕は見つける事が出来たのだろうか？  
偽りで塗り固められた現実の中で僕は辿り着けたのだろうか？  
僕はここに居る 例えこの現実の冷たい風が僕を包み込んでも  
僕は確かにここに居る  
何故なら僕は都会の片隅に咲く小さな花なんだ  
だってそれが僕がこの世の中に存在する確かな証なのだから．．．~

～プロローグ～

「コ・ヒ・豆か？」そして俺は「こっちさ」「疎いさ」いやおまえは、「イラクさ」テレビの中では訳の分からない言葉が処所に飛び交っていた。そしてそのテレビの上には、彼女宛に書いたファンレターという名のラブレターが置いてあった。

僕が彼女に初めて出逢ったのはブラウン管越しだった。

テレビを付ければ彼女はいつも僕のそばに居てくれた。僕が仕事で疲れて帰って来た時も、そして僕が涙でぼやけたブラウン管を覗いている時も、彼女はいつもと変わり無い笑顔で僕のそばに居てくれた。それは手を伸ばせば今にも手が届きそうなのにそれは限りなく近く、そしてそれは果てしなく遠い距離だった。

きっと今僕が彼女に触れる事が出来ないという事は、多分スタジオの前で彼女が出て来るのを一晩中待ち続けたとしても同じ事だろう。なのになぜ僕はあの時、彼女に恋なんかしてしまったんだ。恋なんかしなければこんなに切なくてやり場のない気持ちになんかならなかったはずなのに・・・。

僕は苦しくて苦しくて友達にも相談したよ。だけど答えは「誰だってそんな時期があるもんさ」「そりゃ恋じゃなくて、ただの憧れだよ」って。

本当にそれだけの事なんだろうか？ この純粹に彼女を愛しているという事が、そしてこの傷つく心は本当に、本当にそれだけの事なのか？

僕は暗い部屋の中、彼女の優しさに触れようと手を伸ばして見た。そしてブラウン管に僕の冷たい指が触れた瞬間、たまっていた静電気がパチンと音を立てて、僕の冷たい身を伝わって心の中に激痛を走らした。

・・・「ハジメカラワカッテイタノニ、ハジメカラ・・・」・・・

僕はただ彼女の優しさに触れたかっただけなんだ。そして彼女の為に何かしてあげたかっただけなんだ。ただそれだけで良かったんだ。

彼女がドラマの中で幸せを掴もうと頑張っている時は、僕は心から応援した。そして彼女を傷付けようとする奴がいる時は、そいつに対して本気で怒(いか)った。そして彼女が悲しい想いをしている時は、僕は彼女の為に泣いた。そして彼女が寂しい想いをしている時は、ほんの少し僕はテレビにいつもより近付いて寄り添ってあげた。そして彼女が寒い想いをしている時は、僕は自分が着ていた上着をテレビの上から掛けてあげた。きっとこんな馬鹿げた僕を彼女が見たらなんて思うだろう。多分嫌で嫌でしょうが無いだろう。本当に嫌で 嫌で 嫌で 嫌で 嫌で 嫌で・・・

ああ神様教えて下さい。僕のこの恋焦がれる気持ちはいけない事ですか？ それとも僕の愛した人がたまたまブラウン管の中に居ただけですか？ 僕の求めるこの愛と、あなたが求めるその愛は違うんですか？ どちらにしるその答えを僕はどうやって捜せばいいのですか？ 運命の悪戯(いたづら)だと思えば、僕は救われると言うのですか？ それとも・・・

そしてこんな僕の心の中には、彼女の優しさに触れようとした時のパチンという静電気の音と、激痛がいつまでもいつまでも悲しく鳴り響いていた。

～僕は泣いている少女の夢を見た。

夢の中の少女はとても小さく、それは触れてしまえば今にも壊れてしまいそうな程繊細で弱いものだった。そして僕はそんな彼女の横に並んで座った。

僕らはその間一言も喋らなかった。ただ僕は彼女の隣に座って僕の肩をほんの少し貸してあげただけだった。

ただそれだけの僕は少女の夢を見た。～

## 第 一 章

### 『愛の始まり』

「今日はこれであがらして下さい」と僕は時計の針が8時を指したのを確認してから社長に言った。

すると社長は「なんだもうあがっちゃうのか」とワープロを打っていた手を休めて言い返して来た。

「ええ今日は用事があるんで」と僕が言うと「ああそうか今日は、これの日か？」と社長が小指を立ててちょっといやみっぽく言ったので、僕は「ええまあそんなところです」と言いながら帰り支度を始めた。そして帰り支度が終わると僕は軽く会釈をしながら「それじゃ御先に失礼します」と言い、それからタイムカードを機械に差し込んだ。

機械はガチャガチャと今にも壊れそうな音を出してタイムカードに退社時間を刻んだ。そして僕のタイムカードには、毎週金曜日だけが8時退社と刻まれていた。

だいたい普段は9時、遅ければ10時か11時頃まで仕事をしていたが、毎週金曜日だけは何が何でも8時迄にはあがるようにしていた。さっき社長にも言われたけれど、会社の仲間も僕が女の子とデートをしていると思っているんだ。実際僕のシステム手帳にも、22時Dateと書き込んであったからそう思われても仕方無い事だろう。僕もそれに対して何故か嫌な気持ちにはならなかったし、その事もまんざら嘘とも言えなかったからだ。でも実際はデ-トなんかでも、人と逢う事なんかでも無かった。ただ僕には毎週金曜日に気になるドラマがあっただけの事だった。正確に言うと、気になる女の子が出ているドラマがあったんだ。そして僕はその女の子が出ているドラマを見る為だけに、毎週金曜日は早目に上がるようにしていた。そしてその日は僕にとって唯一その女の子とDateをしている気分になれる日でもあった。

その女の子に出会う前の僕の金曜日の過ごし方と言うと、だいたい9時に退社をしてから夜の街に繰り出すか、と言っても僕は全くと言っていいくらいアルコールが駄目な人なので、居酒屋、パブ、スナックと言うアルコールがらみの所には行けなかった。だから必然的に結局何処かで御飯を食べてからカラオケ屋にたどり着くパターンが多かった。本当はアルコールさえいける口だったらもっとバリエーションが広がっているのだけど、これだけはしょうがない。体質の問題なんだろう。だけど幸いな事に、よく僕と一緒に夜の街に繰り出す友達の博之と言う男も僕に劣らずアルコールが駄目な男だったので、夜の街では二人は最高に気が合った。そしてこの博之と言う男は僕が高校に入って最初に口を聞いた奴だった。

こんな事僕が言うのも変な話だけれど博之はなかなかの二枚目で、女の子にも結構もて

ていた。僕も自分で言うのもおかしな話しかれど結構もてていたんだ。でも博之には負けていた。それでも二人が気が合った理由は。外見は確かに二枚目だった博之も、中身は全くの三枚目だったからだ。僕はそんな博之と夜の街でちょっと酔っぱらいを演じて千鳥足で歩いたり騒いだりするのが最高に楽しかった。

それ以外に金曜日の過ごし方は、僕の愛車のソアラで夜中のドライブをするのが好きだった。真っ白なソアラをピッカピッカに磨いて夜の湾岸を走るんだ。勿論バックミュージックはBEACH BOYSのナンバ - さ。ヘルプ・ミ - ・ロンダで陽気にエンジンを掛けてアクセルを踏み込むと、僕の心は踊り出す。そしてサ - フィン・U . S . A . が掛かる頃には、僕の気持ちは最高に盛り上がるんだ。それから晴海埠頭で小休憩。曲は浜辺の乙女さ、そして背中に潮風を感じながら東京の夜景を眺めてク - ルに煙草を吸うと、本当に素敵な気分になれるんだ。それから30分位して体が冷めてきたら、僕はまたホットな気持ちを求めて走り出すんだ。後半はBe a t l e sのナンバーで僕の心を踊らせる。最初はやっぱりロックン・ロ - ル・ミュージック！ ジョンのギター - とポールのシャウトが僕を陽気に酔わしてくれる。それから僕の心が加速するんだ。何処までも何処までも・ ・ ・。そして幕張辺りで湾岸とさよならをするんだ。だけど僕のドライブはまだまだ終わらない。それから千葉の県道を東へ東へとひたすら走り続ける。その頃イン・マイ・ライフが僕のカーステレオから流れてくるんだ。そして僕はちょっとシックになりながら、さらに東を目指すんだ。それから2度目のレット・イト・ビ - が流れる頃に、やっと目的地の九十九里に辿り着くんだ。

誰も居ない真夜中の九十九里が僕は好きだった。みんなは湘南の方がいいよと言う。そりゃ僕も湘南は嫌いじゃ無かった。けれど僕にとって湘南は余りに近すぎたし、煌びやか過ぎた。週末の疲れきった僕の心と体をいやすには、それは少し物足りない距離で、にぎやか過ぎたんだ。だから僕はつついそよ風の誘惑に負けて、気が付くと九十九里まで来てしまっていた。そしてこの真夜中の九十九里には実は僕だけの小さなロマンが幾つもあったんだ。

まず第一のロマンはこの九十九里は太平洋に直接面しているという事。それがどういう意味かと言うと。太平洋に面していると言う事は、その先にはマリアナ諸島、ミッドウェー諸島、ハワイ島、クリスマス島、そしてもっと先にはアメリカ大陸があるんだ。そりゃ現実的には見えないかもしれない。いや絶対に見えないだろう。だけど僕には見える様な気がした。そして海の向こうから吹いてくる風は、ちょっとだけアメリカの匂いがする気がしていたんだ。そして僕はそう思うだけで凄くロマンティックになれた。この気持ちはきっと湘南では味わえないだろう。房総半島と伊豆半島に囲まれているからね。でも本当は気持ちの問題だけだと思うんだけど、やっぱり九十九里の方が僕をそういう気持ちにさせてくれた。

そして第二のロマンは月だった。これは運が良くないと見えないんだけど。満月が調度海の上に来た時、一瞬、時が止まるんだ。その光景はまるで月の砂漠が何処までも何処までも続いているかの様に・ ・ ・。

よく昔の人は月には神秘的な力があつたと言っていたと言う。実は僕もそう思うだ。何故なら月を見ていると何故か不思議な気持ちになれるからなんだ。きっと僕が自分自身を星で例えるとすればきっと月なんだろうと思うんだ。何故なら僕の性格がギリシャ神話に出てくる月の女神アルテミスに僕は本当によく似ているから。僕は悪い者に対してはとことん冷酷にもなれる。けれどその反面、正しき者にはとても暖かく、そしてとても優しくなれるんだ。だから僕が嫌な奴に見えたり恐く見える奴は、だいたい悪い事している奴なのだろう。少なくとも僕にはそう写っているんだね。けれどきっと本当は僕だけじゃなく人は誰もアルテミスでありながらそれでいて、良い事をし、そして悪い事もしてしまうんだ。それはこの僕とて同じ事。誰も正しい心を持っているのにもかかわらず、悪を許してしまうんだ。僕はそう言う風にはならないように生きてきたつもりだったけど。今まで何人もの人を傷付けて来たと言う事は、きっと僕もやっぱり弱い人間の一人だと言う事の何者でもないという事だろう。だから僕はここでこうして月を見ている事でなんだか、自分の犯した過ちが少しずつ消えていく様な、そんな不思議な気持ちになれたんだ。

それから第三のロマンは、これは相当運が良くないと見えないんだけど。ほらあの赤潮の原因になると言われている夜行虫さ。あいつが海に大量に発生すると、もうなんとも言えない光景が目の前に現れるんだ。そうだな例えるなら夜空の星が全て海に吸い込まれてしまったんじゃないかと言うか、もしくは海全体が自ら光を発しているんじゃないかと思うぐらい、とにかく物凄い光の輝きがとても優しく僕の事を包んでくれるんだ。そうすると僕は仕事場での疲れや嫌な事や悩み事や、そう時が流れている事すら忘れてしまえるんだ。そして時の流れを感じなくなった僕はいろんな事を思い出したり想像したり、風の歌を聞いたり海と話しをしたり、とにかくいろんな事が出来た。

あっそうだ、そうそう君は海と会話をする方法を知っているかい？ そんなに難しい事じゃなくて、もっと簡単な事なんだ。いいかい？ まず自分の履いている靴を脱ぎ捨ててはだしになるんだ。それからズボンの裾を膝まで託し上げればそれで準備はオッケイ。後は自分の足跡を砂浜に残しながら波打ち際を行ったり来たり、そうしている間に自然と海が話しかけてくれるんだ。

「キミハ、ドコカラキタンダイ？」

「横浜から来たんだ」

「ソウカ、ヨコハマカ。トコロデ、ヨコハマノウミハキレイカ？」

「あまり綺麗じゃない」

「ソッカキレイジャナイカ」

「しょうがないんだ。どうしても人が多いからね」

こんな風にして話が始まるんだ。そして僕はこの九十九里の海の事を[シーさん]と呼んでいた。僕はこのシーさんとは本当にいろんな話をした。この辺の海は夏になると沢山の人が海水浴に来る話や、月と潮の満ち引きの関係だとか、海流の話だとか。時には世界情勢の様な堅い話もした。勿論個人的な話もしたよ。僕に彼女が出来たときは一緒に喜んでくれたし、別れたときは僕の話だけを黙って聞いてくれた。僕が新しい車を買った時は一早くシ - さんに見せにきたし、相談事があればシ - さんに相談した。きっと僕にとってのシ - さんは時にはジャズバンドのバンマスの様でもあり、時にはバ - のマスタ - 的

存在でもあったのだろう。だから僕は何故か嬉しいことも悲しいこともシ - さんには素直に打ち明けられたし、話すことで気持ちも楽になれた。だから僕はいつも気が付くと九十九里まで来ていたんだろう。そして朝日が出る手前でシ - さんとはさよならするんだ。それから幾つかのロマンのお礼にゴミを3つ以上拾うのさ。ちなみに僕は偽善者じゃ無いから都会がゴミで汚れていくのに対してはどうでもいいと思っている。けれど都会の片隅にある公園や、そして自然が汚れていくのは嫌なんだ。何故か汚れていくことによって自分の居場所がだんだん無くなっていく様な気がするから。だから僕は九十九里に来た時は必ずゴミを拾って帰る事にしていた。そしてゴミを拾った後に僕はもう一度海を振り返ってみる。そうすると海はもうさっきの様な面影は無くなっていて、僕が九十九里にたどり着いた時の様に普通の海に戻っている。勿論シ - さんももういない。ただたどり着いた時と違う所は、ゴミが3つ以上無くなっていると言う事と、僕の足跡が砂浜に何処までも何処までも続いていると言う事だけだろう。それからもう一度シ - さんにさよならを言って僕は朝日を背中に受けながら帰路に着く。

これが大体僕の九十九里での幾つかの過ごし方であった。それから九十九里以外にドライブする所は山に走りに行ったり、都会を流したりとバラエティ - に富んでいた。あとそれ以外の金曜日の過ごし方は、特に金曜日に限られたと言う訳では無いが、部屋でギターを弾いたり、映画を見たり、本を読んだり、音楽を聞いたり誰にでもやりそうな事だった。それと今はもう別れてしまったけれど、恋人だった慶子と出かけていた事ぐらいだった。これが今までの僕の金曜日のライフスタイルだった。あの子にで会うまでは。

僕は会社を出て、もう寒くなり出した街の中を家を目指して歩いていた。横浜の夜の町は、会社帰りのサラリーマンや学生らしい若者達でごったがえしていた。

どの人達もこれから何かが始まるんじゃないか、もしくはこれから何か始めて欲しい様な期待の目で、異性が通り過ぎるとその異性に目を奪われていた。そんな人達の心の隙間を狙うように、キャバレ - やヘルスマッサージの呼び子達が、鼓膜が張り避けんばかりの大声で客引きをしていた。僕はこんな大声出さなくてもきっと彼等の心の隙間には響くんじゃないかと思いながら、この前僕をソープランドに誘おうとした取引先の人を思い出していた。その人は小松さんという名の人で、僕の取引先の中ではかなり親しい方だった。そして歳が僕より10歳も離れているのにもかかわらず、何処と無く幼さが見え隠れしていて僕はわりと好きだった。そんな小松さんが「この前、安くていいソープランド見つけたから、今度どう？」と僕に聞いてきた。

それに対して僕が「興味無いんで結構ですよ」と答えると、小松さんは驚いた様になんてなると聞き帰してきた。

「なんでって普通じゃないですかそんなこと」と僕が答えると。それを聞いて小松さんはさらに驚いた様な顔をしていた。それからしばらく黙っていたが、さらにまた聞き返してきた。

「だって坂井君位の歳の人にこの事を言うと、みんな本当ですか。是非連れて行って下さいよ。って口を揃えて言うのになんで？」と不思議そうな顔をして言った。

僕は仕方なく「嫌なんですよ。自分がされて嫌な事は、しない様にしているんですよ」と答えると。小松さんは、さらに訳が分からない様な顔をしていた。そして今度は僕が彼

に「小松さんこの前女の子が生まれたって言っていましたよね。もし、もしもですけど、小松さんの奥さんや子供がそういう所で働いていたり、働くと言い出したらどう思います」と聞き返した。小松さんはやっと僕の言っていた事が少し理解出来たみたいで、軽く2回位うなずいていた。僕は本当にそう思っていたんだ。もし自分の好きな人がそんな所で働くという事を想像しただけで凄く苦しくて頭がおかしくなりそうになるんだ。そしてそれは想像だけではなく、実際僕は過去に体験していた事でもあった。

そうあれはまだ僕が高校生だった頃、ある女の子と本当に短い恋をした。

その頃の僕は、授業中は空ばかり見ていて休み時間は休み時間で、寄ってきた友達とだけバイクの話や、女の子の話や、喧嘩の話して盛り上がるタイプで。それでいて彼女は彼女で、授業中はほとんど寝ていて、休み時間は一人でギターマガジンを読んで言うお互い近寄りにくいタイプ同志だった。そんな僕等がなぜ恋に落ちたのかと言うと。それは僕が席替えのくじ引きで廊下側の一番前の席を引いてしまった時の事だった。実は僕はこの席が一番嫌いだったんだ。理由はいたって簡単な事だ、外は見えないし廊下側からは冷たい風が吹き込んで来るので、いい事なんて一つもなかったから。だけど実は移って見て一つだけいい事があった。それは僕の後ろに彼女が居たと言う事だ。そしてその彼女が僕に突然話し掛けてきたんだ。「よろしくね」って。これが彼女との初めての会話だった。それからなぜか毎日彼女が僕に話し掛けてきた。

「坂井君好きな音楽はなに？」とか「坂井君て格好いいよね。女の子にもてるでしょ」とか今日は天気がどうだこうだといろんな事を僕に話してきたんだ。中でも彼女と気が合ったのは、パンクバンドのBULE HEARTSの事や、ロックバンドROLLING STONESの事、それから自分の考え方についての事が多かった。正直言ってもこの頃の僕は、周りの仲間と真面目な話を語り合うのに少しうんざりしていたんだ。確かに口では偉そうな事を言う奴は沢山いたよ。けれどそれに中身が伴っている奴は殆どいなかった。学校が嫌なら辞めればいいし、学校に自由を求めるなら学校に来て戦えばいい。なのに学校は嫌だけど辞めたくない。自由は欲しけれど戦うのは面倒臭い。だからサボる。正直言ってこう言う奴が殆どだったんだ。だから僕は何となくそう言う奴等と語り合う事に少し冷めてきていたんだろう。この頃は。けれど彼女はそういう奴等とは明らかに違った。考え方もしっかりしていたし、言う言葉にも重みがあった。時には僕よりも深い事を言うこともあり、それでいてその一つ一つは、何処かの哲学書や自叙伝から得た知識では無い事は聞いていた僕が一番わかった。要するに彼女は自分と言うものをしっかり持っていたんだ。この頃の僕が彼女と同じ位、自分と言うものを持っていたかはわからない。けれどこの時の僕らは、きっと二人の仲だけに存在した共通性を感じ合っていたんだろう。他の誰かでは感じる事が出来なかったものを。そしてそんな二人が恋に落ちたのは、二人だけで飲みに行った時のことだった。

その日彼女はいつもより暗く、何故か寂しそうにしていたので、僕の方から今日どっか行かないと誘ってみた。彼女は少し考えていたけど、結局行く事になって、それから彼女が良く行く呑み屋で待ち合わせる事にした。僕が着いた時には彼女はすでに来ていて、調度2杯目のサワーを呑んでいる所だった。彼女は僕が来た事に気付くと「アラアラ坂井君、来たのでちゅか～」と、とんでもない口調で僕に話し掛けてきた。僕は彼女に何杯呑

んだか聞くと、彼女は指をふたつ出して「まだ2杯ちか呑んでまぢえん」とまさに酔っぱらいそのもの彼女は答えたが、僕にはすぐに何かあった事が理解出来た。とりあえず僕はお酒が呑めないのウ - ロン茶を頼んで、彼女に何があったのか聞き出そうとしてみたが、周りの音楽のうるさい事と、彼女の酔いの凄さで全く聞きだせる状況では無いと思った僕は、彼女が3杯目のサワーを呑み終わるまで待って、それから彼女を静かな公園に連れ出した。

夜の公園はさっきまでの喧しい音楽とは打って変わって、とても静かな雰囲気を作り出してくれていた。僕は彼女を公園の片隅にあったベンチに座らせ、冷たい缶ジュースを2本買ってきて彼女にそれを渡した。最初彼女は黙って缶ジュースに口をやっていたが、突然その口を僕の口に当ててきた。僕はその時、彼女に何があったか全てわかった様な気がして、黙って彼女を抱き締めたが、実はこの時の僕のわかった事なんてとても些細な事だけだったんだ。それから彼女は僕に気を許したのか、瞳からこぼれ落ちる涙と同じ位喋り続けた。けれどその言葉のひとつひとつが僕の心を傷付けていった。

まず自分が最近彼氏と別れたこと。そして学校を辞めたいと思っていること。それから自分が今までしてきたことを呟く様に話した。

「私、中学2年で初めて女になって、それから立て続けに男と寝たの。売春もしたわ。自分のお父さんと同じ位のおやじや、それ以上のおやじと寝たの。そして自分の兄の友達とも。1回寝ると2~3万もらえるのよ。愛人になった時は、月20~30万はもらったわ。」

僕はそんな淡々と話す彼女の言葉を聞いているうちに頭がおかしくなりそうになった。何だか自分の描いた小さな幸せや、今まで信じてきたこと。そして自分が守ってきた大切なモノ。そんなモノすべてが余りにも脆く崩れていく気がしたんだ。僕は遠のく意識の中で彼女にもう一度だけ聞いてみた。

「まさか今でも、そんな馬鹿な事してんじゃないんだろうな？」

それは余りにも冷たいような言い方だったかもしれない。だけど僕にとっては、最後の望みでもあったんだ。けれど彼女が口にした事はそんな僕の心を裏切るように「昨日、知らないおやじと・・・」

そしてこの言葉が僕を一瞬にして後方もなく崩してしまった。

僕は正直言って今まで人に自慢出来るような事なんて無かった。それ所かきっといけない事も沢山してきたよ。人には言えない事も。だから僕なんて何も言う権利は無いのかもしれない、けれどそんな僕でも売春だけは嫌だったんだ。過去に僕の先輩で売春の様な事を斡旋している奴がいて、その事をどうやって知ったかはわからないけれど、僕の知り合いの女が「ねえ、坂井君の先輩、売春斡旋してんでしょ。あやし金無いから今度紹介してよ。あやしゴム付きだったら本番OKだからさ。紹介料1割出すから、ね」と僕に話し掛けてきた事があったんだ。その時僕はなぜだかわからないけれど、彼女をひっぱたいてしまった。そして大声で「もっと自分を大切にしろ。それにあんな奴、先輩でもなんでもねえ。2度と俺の前でそんな話すんじゃないねえ」と怒鳴ったんだ。僕はこの時初めて女の子に手を上げてしまった。今まで弱い者には手を上げ無い様にしてきていたし、勿論今だってそうしているけど、その時僕はその子の命が危ないと思ってしまったんだろう。助けようとしたんだよ僕なりに。それなのにその女に金魚の糞みたいに引っ付いていたふざけた



男達にその後ボコボコにされて、気が付いた時には道端で血だらけで倒れていた。悔しくて悔しくてアスファルト殴り付けたんだ。だけど良く考えた時、自分の顔から流れているものが血だけじゃ無い事が僕を唯一救ってくれたんだ。これで良かったんだ。これで一人でも救われるなら、例え誰にも理解されなくても僕は良かったと思える気がした。あの時はね。

だけど今僕の横に座っている彼女は、あの時とは違うんだ。もうすでに僕の手が届く未来形では無く、それは僕がどんなに手を伸ばしてみても、例えどんなに背伸びをしたとしても、触れる事の出来ない過去と言う空間に彼女はひとりぼっちで寂しく居たんだ。僕は待った。偽りでもいい、彼女が笑って嘘よ、嘘に決まってるじゃない、何そんな真剣な顔してって言うてくれる事を。とにかくこの場から僕と彼女を救ってくれるなら、例え偽りでもと。確かに過去は関係無い事だろう。誰しものが恋愛して行く時に過去なんか気にしていたら、きっと誰も愛せなくなっていくだろうし、自分だって少なくとも綺麗な過去なんて持っていない事も分かっている。分かってはいるんだ頭では。だけどなぜ過去と言う2文字が僕をこんなにも苦しめるんだ。それは耳を塞ぎたくなる様な過去だから？ それとも僕がまだまだ若過ぎるから？ いや違うんだ。本当の理由は、本当の理由は、何故僕はもっと早く彼女に逢えなかったのか。もっと早く彼女に逢って居たら、もっと早く彼女の事をほんの少しでも理解さえしてあげれば。彼女をこんなに悲しくて辛い想いにさせずに済んだらうにと言う、自分に対する愚かさがとても悔しくて悔しくて、これが僕を苦しめる本当の理由なんだ。けれどそれはある意味僕が彼女を真剣に愛していると言う証でもあったんだ。

僕は震える声で彼女に言った。

「過去なんて関係ねえよ。今まで苦しんだ分、これから幸せになればいいよ。俺が見守っていてやるからさ」

この言葉は自分に言い聞かせる様でもあった。

僕はきっとこの事をしっかり受け止めるまで凄く苦しむと思う。だけど僕は笑ってそれを選ぶんだ。何故ならこの事から逃げると言う事は、僕にとってその何倍も苦しい事だったから。

僕はその夜、彼女と寝た。勿論彼女を愛していると言う純粋な気持ちだけで。始め彼女は今まで僕が体験した事の無い様な色々な事をしてくれたが、そのひとつひとつが僕の心を鋭い刃物で突き刺す様に傷付けていた。だけどそれが僕の彼女を愛していると言う気持ちと戦い、そして混じり合っていくうちに、段々暖かくて優しいものになって行った事を僕は今でも覚えている。

そしてそれから僕らは何度かのデートと、何度かの優しさを重ね合ったが、あの時の事とは関係無い事で別れる事になった。その時僕は彼女と約束した事があったんだ。

「俺さ、今まででも女を金で買った事なんて無いけど、これからも絶対ソープランド行ったり女を金で買ったりしないから、だからさ、だからお前もこれから色々辛い事沢山あるけど、どんなに辛くても、例えどんなに金が欲しくなっても、そんなんで自分をごまかすなよ」って。そしたら彼女は泣きながら「うん、もう絶対しないから、今まで本当にありがとう。私頑張るから坂井君も頑張るってね」と言って微笑んでくれた。

本当はこの事も半分位はあったんだ。僕がソープランドに行かない理由の1つには、小松さんはあれから「確かに自分の奥さんや子供にはやらせたくない」とか「向こうだって金で割きってんだし」と相変わらず自分主義のオンパレードだった。極め付けは「社会勉強だよ。社会勉強の一つだと思ってさ1回ぐらいどう？」だってさ。

僕は正直この時ふざけんなよと思った。社会勉強？ そんな事がもし社会勉強だとしたら、僕が今まで必死にやってきた事は一体何だったんだ。今まで僕を苦しめてきた大人って一体なんだったんだ。そういう奴に限って家じゃ偉そうにしている自分の娘や奥さんにはそんな事は許さんなんて言ってるくせして、外では自分の娘ぐらいの女と寝る事が正当だなんて、そんなんで家族や自分の愛すべき者を守っていけるんかよ。そんな事で本当に……。

僕は思わずそんな事を小松さんに言い掛けたけど、きっとこの人にこれ以上言っても仕方が無いかと思って「社会人として落第した時お願いしますよ」と皮肉混じりの言葉で僕はこの話を終わらせた。

僕はこんな事を思い出しながら人の欲望が乱れかう街の中を、風のようにすり抜けて地下鉄の階段を駆け下り駅へ向かった。ホームに着くと、仕事帰りのOLやサラリーマンがホームからはみ出さんばかりにごった返していた。どの人達もこれから好きな人と逢うのだろうか。なんだか1週間の疲れよりも、これからの楽しい出来事に期待しているみたいに幸せそうな顔をしていた。今現在僕には恋人と呼べる人が居なかったが、不思議と周りを見ていると、うらやましいと言うより自分も楽しい気分になれたんだ。何故かと言うと、僕だって彼女が居た時はやっぱり楽しかったから、彼等の気持ちが手に取るようにわかったからだと思う。そして僕はそんな気持ちで駅の時計を眺めて見た。

時計の針は調度8時30分を指していて、それは電車が来る3分前と言う事でもあり、そして何より僕の気になっている彼女に逢えると言う実感が湧く時でもあった。

駅のアナウンスは機械的な言い方で「間もなく電車が参ります。危ないので白線の内側に下がってお待ち下さい」とスピーカーから流れると、今まで適当に散らばっていた人の波が、まるで小学校のとき練習した運動会の行進の様に1列になり始めるんだ。だけど僕はいつもその列にうまく入る事が出来なかった。いつも気が付くと取り残されているんだ。運動会の行進の時も、僕だけみんなと同じ事が出来なかったあの頃のように、大人になった今もそれは変わらなかった。そんな鈍臭い僕に追い討ちをかける様に電車がホームに入って来る。そして電車のドアが開くと中で缶詰め状態だった人達が、苦しさからやっと解放されたんだろう。物凄い勢いでホームに飛び出してくるんだ。僕はその人達の勢いがとても恐かった。と言うよりも群集そのものが恐かったんだとても。きっとみんなして僕の事が邪魔なんだろう。僕はただ電車に乗る為に並んでただけなのに、乗車目標と書いてあったからただそこにいただけなのに、群集の目が僕を問い積めるんだ。この前もそうだった。僕は上り口と書いてあった階段を登っていたのに、上の方から物凄い人の波が押し寄せてきたんだ。サラリーマン、学生、子供連れのおばさん、お年寄りまでいろいろな群集が僕の行く手を当り前の様にふさぐ。そして僕に平気な顔をしてぶつかって来た。僕はその度に「あっすいません」と謝っていたが、次から次へとぶつかって来る勢いに負け

で、思わず転んでしまったんだ。それなのに誰ひとり謝りはしない。しないどころか、僕が聞いた群集の声は「ボケーと歩いてんじゃねえよ」「なにこんな所ですっころんでんだよ」「まったく、邪魔よね」「ほらほら何とかちゃん足元気を付け無いと、あのお兄ちゃんみたいに転んじゃうわよ」「あはははは」「くすくすくす」という余りにも自分勝手な声だった。僕は悔しくて言ってやったよ「そんなに面白いですか。人の無様な格好が、そんなに邪魔ですか。元をただせば俺を転ばしたのは貴方達じゃないですか」ってね。そしてたらなんて言ってきたと思う？「あ～やだやだ。人に迷惑かけといて何だその態度は」だってさ。何も分かってないんだ彼等は、僕は余りにもひどいんで偉そうな事を言った奴の胸元を掴んで言ったよ「おめえ今なんて言ったんだ？ 人がおとなしくしてれば調子に乗りやがって。口で言ってわかんないなら拳で教えてやろうか」そして鋭い目付きで周りを見渡し、群集をにらみ付けた。だけどそこにあったのは、さっきまでの威勢のいい群集ではなく、怯え切った被害者の目だった。そして僕が胸元を掴んでいた男は怯えているのだろうか。僕の手先の先に震えが伝わってきたんだ。いつもそうなんだ、群集って言うのは何の罪も感じず弱い者を平気で叩くくせして。自分に火の粉が掛かりそうに成ると、自分はまるで罪の無い被害者だと言い張る。そして自分と違う事をしている者や、自分と違うと言う外見だけで悪と正義を決めるんだ。僕は確かに目付きは悪いよ、口も悪いかもしい。だけど僕は僕なりに真面目に生きているんだよ。そりゃ貴方達の様に要領良くは無いかもしい。そして考え方も違うかもしい。勿論こんなやり方だって間違ってるかもしいよ。だけど僕にはこんなやり方しか出来ないんだ。でも一つだけ分かって欲しい事がある。僕はこんな生き方しか出来ないけれど、決してみんなの事を憎んでいる訳じゃ無いんだ。本当はみんなに優しくしたいと思っているんだよ。そしてみんなと仲良くしたいと思っているんだよ。だからそんな怯えた目で僕を見ないでくれないか。僕は悪魔じゃないんだ。僕は貴方と何一つ変わらない同じ人間なんだから。貴方と同じ・・・。

だけど気が付けば結局いつも僕が弱いものいじめをしているという形に成ってしまう。けれど本当は違うんだ。本当は弱い者の集団の目が僕を苦しめていたんだ。だから僕は恐くてその場から逃げ出すんだけど。群集の目が何処までも何処までも追っかけて来て僕を叩く。そして僕は足がもつれて転んでしまうんだ。手を伸ばした事もあったよ。誰かにしがみ付きたくて。だけど僕が手にしたものは、誰かが吐き捨てた溜め息に似た優しさだった。そしてそれは僕をたまたま孤独にさせるには充分過ぎる程の優しさでもあった。

こんな事を繰り返しているうちに段々僕は、群集恐怖症になってしまったんだろう。今では誰も責めていないのに、なんだかいつも責められているみたいで心の置場に困ってしまうんだ。こんな気持ち分かるかい？ 僕はね、ただ普通にやっているだけなのに、本当にただ普通にやっていたのに・・・。

僕は電車から吐き出される薄汚れた空気と新たに吸い込む希望とが混じった後、勇氣と優しさを抱き締めながら車内に乗り込むんだ。勇氣は文字どりの勇氣。そして優しさは気になるあの子を強く思う事で得る事が出来た。

車内はうまくすれば本を読むぐらいのスペ - ス位は作る事が出来たが、それなり混んでもいた。僕は幸いな事に身長が178cmあったので、ラッシュアワーの車内でもあまり息苦しい思いをした事は無かったが。今僕の目の前に居る小さな女の子は息苦しいのだら

う。今にも押し潰されそうに僕の胸の辺りに顔を埋めて、時々上を向いて新鮮な空気を吸い込んでいた。いつも僕は電車の中では本を読む習慣があったんだけど、今日はその子が余りにもかわいそうだったので、僕はその女の子の為に僕の本を読むスペースを与えてあげたんだ。すると彼女は長い間潜っていた人が水面から顔を出した時にやる、スーと息を吸い込むやつに似た深呼吸をして、僕の方に顔を上げてありがとうの意味が込められていたんだろう。小さくうなずいていた。それから電車が何駅か通り過ぎる間に何度か彼女と目が合ったけれど、ただそれだけで、それ以上の事は特に何もなかった。そして電車が新横浜に着くと目の前の彼女、そして車内の半分もの人が一斉にホームに飛び出した。彼女は電車を降り際何度も僕の事を見ていたが、ドアが閉まり電車が走り出すとそんな彼女も人込みの中に消えて行った。そして僕は彼女の居なくなった車内を見渡してみた。

新横浜を過ぎると車内は知れたもんさ。あんなに居た人が殆ど居なくなって空席すら出初めていた。それから終点のあざみ野に着く頃には、座っている人の数よりも空席の数の方が多くなっているんだ。大体の人は港北ニュータウンと言う新しく出来た町で降りて行ってしまって、僕等の様な田園都市線に乗り替える人は、車内の3分の1位しか居なかった。僕は地下鉄があざみ野駅に着くと、田園都市線に乗り換える為に鬼の様に長い階段を一段飛ばして駆け上って行く。地下鉄の改札を駆け抜けて、それから田園都市線の改札を跳び越えてホームまで一気に駆け上がる。そして僕がホームに着くか着かないかのタイミングで田園都市線がホームに入ってきて、僕はその電車に滑り込むんだ。

別に特にこれに乗らなきゃ間に合わないとかそういった事は無かったけれど、毎週金曜日はなんだかこの電車に乗りたかった。ただそれだけの事だった。そして駅を1つ越えて市が尾で僕は降りる。それから僕は歩いて10分という時間を掛けて家に帰るんだけど、この日はコンビニに寄って、ポテトチップとミルクティーを買って帰った。

実は僕は普段あまりテレビを見ないんだ。いつも部屋に居る時にはテレビを付けてはいるんだけど、それはただ付けているというだけのモノであって、例えるなら一人で部屋に居る時、部屋の電気を付ける照明の様なモノだった。だから今日のように見たいテレビがあるというのはどうしても構えてしまうんだ。なんだか小さなイベントみたいだね。だから僕はジュースやお菓子を、ほら映画館で映画見る時ジュースやポップコーンを買って行くみたいな、そんな気持ちで僕も買ってしまうんだ。そしてドラマを見ながら僕はそれを食べる。そんな見方が僕流のドラマの見方だった。

僕はお菓子とジュースの入った袋を抱えて、残りの6分の距離を家に向かって歩いた。家に着くと調度時計が9時半を指すところだった。僕はとりあえずドラマが始まる迄30分あったので急いで服を着替えてから晩御飯を食べ、そして部屋にいる熱帯魚に餌を上げた。そしてそれが全て終わる頃、時計は10時を指し始めていた。僕は部屋のテレビのスイッチを入れてチャンネルを合わせて、そしてさっき買ってきたポテトチップとジュースを部屋の小さなテーブルの上に並べて、ドラマが始まるのを待った。それから僕がまばたきを10回程した頃だろうか、僕の部屋のただの照明だったテレビが画期的な色を持ち始めて僕だけの小さな映画館になったのは。そしてそのドラマは僕を少しずつブラウン管の中に引き込んでいった。

・・・ボクは天使を見たことがあるんだ。一人目の天使はバイト先の小さなコンビニにいました。二人目はボクの小さなブラウン管と言う二次元の世界にいました。ボクには何も

分かりません。ボクには何も見えません。ただそこに天使がいて、ただそこにボクがいた  
ただそれだけだったのです・・・

～夢の中の少女はその処所で僕の夢の中に現れた。

僕が寂しい思いをしている時は一晩中僕に寄り添ってくれた。

僕が悲しい思いをしている時や、悔し涙を堪えている時は僕の為に泣いてくれた。

僕が失敗をして落ち込んでいる時は頑張ると励ましてくれた。

そして夢の中の少女は全てを失いかけていた僕に

人を愛する大切さを教えてくれた・・・。

## 第二章

### 『ブラウン管の中の恋』

ドラマの内容は現実とは余りにも懸け離れ過ぎている世界の中で、必死に純粋な愛を信じる少女と、それを受け止めようとする男の恋愛の物語だった。そしてその結末は悲劇と言う名のHAPPY ENDと言う、終わった後に何か複雑な気持ちになってしまう終わり方だった。

一体いつ頃からなんだろうこんな終わり方が流行ったのは。村上春樹のノルウェーの森頃からなのだろうか。それともジェームズ・ディーン主演の理由なき反抗の頃だろうか。もしくはもっと昔のシェクスピアのロミオとジュリエットの時代なのだろうか。どちらにしる僕は本音を言うと純粋なHAPPY ENDが好きだった。それは良く人が言う「人の不幸は嫌いだな」と言う決まりきったカッコいいセリフじゃ無くて、もっと単純で限りなく複雑な理由がそこにはあった。そりゃ確かに僕だって人の不幸は好きじゃないよ。だけどそれは全てに当てはまる訳じゃ無かったし、例えばドラマの中でもあったけれど自分の好きな人には本気で幸せになって欲しいのに、何故か心のどこかでは周りの人達には好きな人の良さを分かってもらわなくても構わないと思ってしまう。僕も実を言うとそうだった。例え誰にも理解され無くて僕だけは理解していてあげたい。例え世界中の人を敵にまわしたとしても僕だけは信じてあげたいって。例えるのなら自分の好きな人が最初は可愛くて周りの人達にちやほやされていたとしよう。だけどその子が例えば体質の問題で太ってしまったり、年老いたりした時、きっとその子は傷付くと思う。そして周りの人達はモラルと言う名の同情をしながらも、少しずつその子から離れて行くかもしれない。けれどそんな時、そんな時だからこそ僕はきっといつもと代わり無い笑顔と、代わり無い優しさを彼女に与えてあげるんだ。僕だけはね。そしてその時その子に初めて僕の本当の気持ちを理解してもらいたいと思う。だから僕はきっと心の中の何処かでここまで無いにしろ、そうなって欲しいとすら思ってしまうだろう。きっと僕は好きな子の幸せを願っているんだけど、それは他の誰かとじゃ無くて僕自身の手で幸せにしてあげたいと思っただけなんだろう。本音はきっこう思っているんだと思うんだ。本音はね。だけど何故か今までの僕は、もし本当にその子が幸せになるんなら僕じゃなくてもいいんだ。幸せになってさえくれるなら。僕は本当に好きな子にはそう思ってきてしまったんだ。勿論今になってそれが良かったかどうかはまだわからない。けれどきっといつの日か後悔の後で、泣きながらこれで良かったんだと思える日が来るだろうと思うから。そしてそんな事が今まで僕を複雑な気持ちにさせていた。

だけど何故かこのドラマを見ているとそんな複雑だった僕の気持ちの答えが、少しずつではあったが、単純に見えてくる様な気がした。

一体何故なんだろう。脚本が良かったからか？ 確かに脚本はかなりいい物だと思う。複雑な人間の心模様や突然の出来事の連続、これだけの発想が出来るだけでも凄いと言うのに、それを見事に調和の取れたしっかりした脚本に描いているのには正直言って感動すら覚えた。それでももし僕に何か云える事が出来るのなら、ちょっとくど過ぎる気もした。余りにも非現実過ぎる、いや現実には有り得る事なのかも知れないが、その事が余りにも短時間で繰り広げられる事でどこか現実ばなれしていそうにも思われてしまう。例えるならプールの中でもがいている様な、はたまた夢の中で必死に走っている様なやり場のない気持ちになってしまうんだ。きっと本当はもっと気楽でいいと思うんだ。もっと自由でいいと思うし、もっともっと幸せでいいと思うんだ。きっとドラマだからこそ出来る幸せってあると思うんだ。確かにこの厳しい現実では正直者や努力家が必ずしも幸せに成れるとは限らないし、いくら手を伸ばしてみても手の届かない夢もある。けれどドラマの中では主人公はどんなに挫折や失望を繰り返したとしても、夢や愛を信じてさえいれば必ず幸せを手にいられる。それに奇跡を起こす事だって出来れば、スーパーマンにだって成れるはずなんだ。だから僕はせめてドラマの中だけでは、愛や夢の大切さや生きる喜びを、世界で一番素敵に描いて欲しかった。だって僕らは知っているのだから。その素晴らしい世界はテレビのスイッチを押せば消えて無くなってしまう事を。だから人はきっとドラマや小説や映画の中に、その自分の見い出せなかったものを見い出そうとするのだろう。少なくとも今までのドラマはそうだったし、そういうドラマを僕らは見て育てて来た。今までは。

けれどこのドラマはそんな今までのアットホーム的ドラマとは明らかに違うモノだった。どちらかと言うと人が今まで隠そうとしていたモノを表に出したり、人の弱さや歪んだ愛や現実をリアルに表現していたのだ。まるで今までのドラマの中だけに存在した性善説を覆すかの様に。だけどそれは決してマイナス志向ではなかった。この歪んだ世界では奇麗事だけでは通せない事もある。だけどその信じる愛が純粹であるのなら、きっとその先には形はどうであれ幸せがあるんだと僕らに言い掛けてくれている様でもあった。だから僕はやはり何だかんだ言ってもこの脚本は好きな物語の一つだった。そして他に良かったと思う事は、やはりキャストイングが良かったと思う。相手の男役をしているトレンドー俳優の武田正樹が素晴らしい演技力でこのドラマを見やすい物に変えてくれ、そしてそれを取り巻く実力派の役者達がそれをさらに盛り上げて行ってくれていた。このキャストイングは僕が過去に見たドラマの中でもかなりいいキャストイングだと思う。この内容にこのキャストイング。僕を虜にするには十分過ぎるだろう。だけど正直言ってこれだけではきっと僕の心をここまで純粹に変える事は出来なかったと思う。そりゃ感動はしたと思うよ。だけどそれは昔スク・ルウォ・ズと言うドラマを見た時の感動と同じモノで終わってしまっただろう。こんなにも喜んだりこんなにも苦しんだり返はきっとしなかったはずだった。なら何故僕はこの作品にこんなにもめり込んでいったのだろうか。実を言うとその答えはとても単純な事だった。今現在僕がハッキリ言える事は、このドラマに出て一人の少女に僕は恋をしてしまったという事だ。それが僕の今言えるこのドラマに僕がめり込んだ本当の理由だった。

その少女の名は松井夏子と言う名前だった。彼女の事は正直言ってこの時の僕には、ま

だそれぐらいの事しか分からなかった。では何故そんな僕がそんな何も知らない彼女に恋をしてしまったらう。その理由は調度僕が前に付き合っていた彼女と別れた時の事だった。

その日は僕は会社が早く終わったので久しぶりに家でゆっくりしていたんだ。正直言ってこの時の僕には安息の場所が無かった様な気がしていた。いや正確に言うと僕じゃなくて僕達の方が適切だったのだろう。そしてそれはただ疲れていただけの事じゃなくて、僕の今まで見てきたモノや信じてきたモノの価値観が180度変わってしまうぐらいの世界で、僕が今までと代わり無く生きていかなければならないぐらい辛い事だったんだ。

一体何でこう成ってしまったのか今考えると大した事は無かった。始めから価値観や求めているモノや見ている夢が全く違っていたんだらう。そんな若い二人が外見や雰囲気だけで付き合ったのだから日が経ってお互いを理解して行けば行く程、相手の事が分からなくなってしまうんだ。よくある事さ。そりゃ確かに全く同じ事を思っている人なんかいないだろうし、例えもし居たとしても僕はきっとそんな人を好きには成らないと思う。だけど本当の愛は、きっと同じ道を歩いて行ける同じ価値観を持った人と一緒に作って行くモノなんじゃ無いのかと思う。二人で手と手を取り合って育んで行く事が大切だと思うんだ。どちらかだけじゃなくて二人で少しずつゆっくと時間を掛けてその小さな花を育てる様に。こんな事を僕は真剣に考えていたんだ。だから僕はあの疲れて部屋に居た時、彼女からの久々の電話で聞いた「好きな人が出来たの。ごめんなさい」という言葉に同様にしないで「今までありがとうな」と言えたのだろう。僕はきつこう成る事を心の何処かで分かっていたのだろう。今となってはね。だけどあの時の僕は違っていた。そう僕のクールな理性が崩れたのは彼女との別れの電話が終わってから数分でやってきた。

初めは極端な解放感、それとほとんど同時ぐらいに何とも言えない脱力感に襲われた。まるで体の養分を全て吸い取られてしまったかの様に、僕の体はだるさと激しい震えにみまわれてしまった。何故なんだ。一体何でこう成ってしまったんだ。確かに全てが楽しかったわけじゃ無かったかもしれない。お互いの思いがすれ違ってイライラしてしまった時もあったかもしれない。だけど僕は少なくとも彼女の事だけをいつも見続けていたはずなのに。例えどんな素敵な人が僕に声を掛けて来ても、僕には好きな人が居るからと言って断ってきたのに。それなのに・・・。

僕は溢れ出てくる涙を止める事も出来ずに、涙が流れ落ちて行く奈落の底へと、涙と一緒に落ちて行った。

それから一体どれくらい時が流れたらう。気が付くと暗い部屋の中で唯一光りと呼べるものと言ったら、目の前にあるぼやけた14インチの小さなブラウン管だけの凄く寒い所に居た。耳から入って来るモノは、心臓の鼓動と60年代風のマイナー調の寂しそうな音楽だけだった。僕は一体何処にきたのか始めのうちはよく分からなく、もしかしたら天国、はたまた地獄かとすら思っていた位だった。それから僕が現実に戻ったのは、ぼやけたブラウン管から純粋な少女の声で「シンジテアゲル」とかすかに聞こえた頃だった。

僕は心の中で「えっ」と聞き替えしてしまった。だってそれは僕にとっては余りにも非現実過ぎる台詞であるのと同時に今にもその言葉にすがりたい様な台詞だったから。だから僕は目の中にたまった涙を指でこすりながらブラウン管を覗いて見た。そこには不思議



な事に僕が夢の中でよく出会う少女が居たんだ。僕は一瞬自分の目を疑った。だって夢の中で僕が追い続けていた少女が、今こうして僕の手の届きそうな場所に居たんだから驚かない方がおかしいぐらいさ。正確に言えば夢と同じ位遠い距離だったかも知れない。けれどその時の僕には夢より遥かに近く感じていた。そしてその彼女はブラウン管越しの全てを失い掛けていた僕にいつまでもいつまでも優しく微笑んでくれていた。

僕は正直言ってこの時やっと心の何処かに安らぎを覚えた気がしたんだ。そう、それは今までの僕の人生は一体何だったのかと言う否定形じゃなくて。これからの人生を大切に生きていきたいと思わせてくれる程の前向きな力強さが備わっていた。そして彼女の微笑みは僕のそれまでの人生を大きく変えていく事になった。

まず彼女が僕に与えてくれたものは、彼女を見るまでモノクロだった僕の部屋と僕の心に、彼女は優しい色を与えてくれた。その色は僕が今までみたどんな空よりも青く、そして僕が今まで見たどんな水よりも透き通っていた。とても暖かかった。そしてとても楽しかった。その一時間は僕は子供の頃、誰の声も聞こえずに必死に遊んでいた頃のように夢中になれた。何年ぶりだろうかこんな時を過ごしたのは。きっと楽しかった事はそれなりにあったのだろう。だけどその時の僕には本当に何年ぶり、いやもしかしたら何十年ぶりに出合った幸せに感じていた。この気持ちはドラマが終わって違う番組が幾つか僕の目の前を通り過ぎ、そしてやがて砂嵐がやって来ても終わることはなかった。

そして次の日の朝は失恋の痛みが有るのにもかかわらず、割とスッキリと言う始まり方だった。その訳は僕が一番良く分かっていたが、またそんな自分が僕は一番分からなかった。ただハッキリ分かる事は、昨日まで有ったモノが今は無く、昨日には無かったモノが今は有るという事だけだった。

この日の衝撃は今でも昨日の出来事のように僕の心の中でまるで一枚の写真の様に焼きついていて。そして僕はいつでも心の一番奥のポケットにその写真を大切に入れていた。これが僕の恋の始まりだった。そして連続ドラマが終わってしまった次の日から僕の生活は変わった。

まず僕がやった事は彼女が一体誰なのかという事を知ろうとした事だった。しかしこれがまた一苦労だったんだ。何しろ今まで僕はアイドルや女優には全くと言って興味が無かったから。そりゃピンクレディ - やおにゃんこクラブなどのアイドルは知っていたよ。だけど知っていたと言うだけで、会員番号の何番が誰でなんて事までは良く分からなかったし、それに皆みたいにファンクラブなんかにも入った事もなければ、入る気もなかったから。そもそもオタクと呼ばれている人達の事を軽蔑すらしていたこの僕が、そう簡単に色々わかるはずがない。だから僕はとりあえずテレビガイドを買って家で読んでみる事にした。

僕は期待を胸にそのページを一枚一枚めくってみた。けれど彼女の事に付いてはたったの1ページしか載っていなかった。それも端っこの方に小さな白黒の写真と、役柄について書かれた数行だけの、まるで都会の片隅に咲く一輪のシロバナロウバイの様にとっても寂しくてなんだか悲しくなるような情報だったが、とりあえず僕はそのモノクロの写真をはさみで綺麗に切って、財布の中の昔撮った仲間たちの写真と昔飼っていた犬の写真の横に入れた。良く自分の奥さんや子供の写真をサイフに入れている人を見るとダサイとか変だとか言う人がいるけれど、僕に言わせれば何が変なのかなって思うんだ。だってその人が

もし一番大切に思っているのならそういう事してもいいと思うし、それに僕が将来家庭を持つ事になったらきっと僕は自分の奥さんや子供の写真を持っていたと思うから。ただ今の僕には奥さんもいなければ勿論子供もいない。だからそんな写真も当然無い。けれどその代わりと言う訳じゃないけれど今現在大切にしたいモノを入れて置きたかったんだ。正直言ってまだこの時の僕の気持ちは愛だ恋だという具体的なモノでは無かったけれど、そのモノクロの写真がそばにあると思うだけで幸せに成れる気がした。そして一番したかった事はこの写真を持って、いろんな所に行っているいろんなモノを見せてあげたかったんだ。写真の中の大切な君に。そして僕は普段よりほんの1g重くなったサイフを持って街に車で出て行った。

街は土曜日と言う事もあって人がごった返していた。この頃の僕の車は今の真っ白なソアラではなくて、真っ黒なボディ - に真っ赤なホイルのAE86と言うハデな車に乗っていたので、通り行く人達は何だあの車は、もしくは速そうな車だなどとも言いたそうな顔付きで僕の車を眺めていた。そんな人達の波を横目に特に行く宛の無い僕は、ほんの少し長くなった春先の夕日を背に受けながら、写真の中の彼女を連れ出して夜のとぼりに向かって走っていった。そして僕の車は都心の幾つかの夜景の綺麗な所に止まり、それと同じ数だけ写真の中の彼女も顔を覗かせた。そして気が付いた時にはもう都心から少し離れた所にある、とあるスタジオの前に車を停めていたんだ。そうここは何を隠そう今まで彼女が出ていたドラマを放映していたテレビ局のスタジオなんだ。幸いな事に僕の家も同じ区内に有ったので、このスタジオの事は昔から良く知っていた。今ではもう無くなってしまったけれど、この頃はこのスタジオのすぐ裏が調度いいS字カーブが幾つかつながった道に成っていて、良く車の走り屋と呼ばれている奴等が集まってレースまがいな事をしていたので、土曜の夜は僕も時には走りを見に来たり、時には走りにも良く来ていたんだ。そしてこの日も土曜の夜という事もあって、深夜にもかかわらず車がコーナーを曲がるキーキ - という音がこだましていた。

けれど一体何故僕はこんな所に来てしまったのだろう。勿論ドラマも終わってしまっていたから彼女が居ない事は分かっていた。けどなんて言うのかな。そんな事はどうでもいい事なのかもしれない。僕にとって今大事な事は、居るかもしれない、居たかもしれないと言う架空の出来事より、この見上げる星空は確かに今僕の上であり、そして彼女の上にもあると言う事。そして今僕の目の前にあるスタジオには数週間前まで彼女が確かに居たという凄くアバウトだけれど、この手に触れられる現実の方が何倍も何十倍も意味があるように思えたから。だから僕は今は居るはずもないこのスタジオの前に来たんだ。ドラマと彼女の台詞を一つ一つ思い出すように。そしてその末に僕が辿り着いたのがスタジオだった。スタジオは深夜だと言う事もあるのだろう。まるで中には誰もいないんじゃないかと思わせるほど静まり返っていた。けれど僕は何故こんなにまで彼女が気になるのだろう。失恋した夜にたまたま君に出合ったから？　そしてその君が夢の中で追いかけていた少女だったから？　けれどそれと今僕がこのスタジオの前にいる事とどうつながると言うのか？　前にも言ったけれど今までの僕はブラウン管の中の人ハッキリ言って別の世界の人だと思っていたんだ。たとえ好みの可愛い子が出ていたとしても、僕の気持ちはテレビを消せば画面と一緒に消えてしまう位のモノだったし、ましてやここに行けば必ず逢えるという場所があったとしても、行こうなんて思いもしなかった。そもそも逢えた

としてもそれだけの事さ、その先には何もないんだ。それに日本の芸能界なんて例えば歌が上手くもないのに歌手になっていたり、台詞も棒読みなのに役者になっていたり、勿論それが全てでは無いけれど、ただ美人と言うだけで芸能人になっている人が多いのに、本当に才能がある人や本当に努力している人が認められない事が多い気がしていた。僕は正直言って芸能界というものを冷めて見ていたんだ。あの時まではね。けれどそんな僕でも過去に一度だけ芸能界と言うものを身近に感じた事があった。そうそれは調度僕が高校2年生の春の頃だった。

その頃僕は知恵美と言う一つ年下のちょっと変わった子と付き合っていたんだ。その子がどういう風になっていたのかと言うと。見た目は可愛いのみだけれど、何処かこう人と違って完璧を求めていると言うか、例えば歩き方一つとっても自分の好きな人の好みに完璧に合わせようとしたり、ひどい時はコーヒーカップの持ち方までその人の好みに合わせようとしたり、それは多分好きな人がもっと鼻が高い方がいいと言ったら整形手術さえもやり兼ねないぐらいの完璧主義だった。僕はそんな彼女のいったい何処が気にしていたのか今思うと、きっと彼女の完璧さなんかじゃなくて、完璧を求める不完全な彼女だったんじゃないかと思う。僕はもし自分に完璧に合わせてもらったとしたら、きっと付き合っていく事なんてなんの意味も持たなくなってしまうと思うんだ。もし僕が何処かの誰かと付き合うとするよ。そしてその何処かの誰かは歩くのがとっても遅いでしょう。すると普通の男はきっとその子の早さに合わせるかもしれない。そりゃ僕だってぴったり合わせる事は出来るだろう。けど僕は違うんだ。きっと僕は今よりほんの少し歩くスピードを落とすけれど、完全にその子には合わせないんだ。その子よりほんの少し早く歩いて、そしてその子は僕に合わせようとほんの少しだけ早く歩く、そして時々休んだり道草をしたり時には強引に手を引いたり手を引いてもらったり。きっと誰か一人だけに完璧に合わせるという事は愛を育てていく事とは違うんだと思うんだ。きっと愛を育てていくという事は、お互いのいい所をお互いが理解しあいながら、そしてそのいい所にお互いがほんの少しづつ近付こうと思えるのが本当の愛のような気がするから。お互いがね。

だからもし彼女が完璧だったとしたらきっと僕は付き合わなかつただろう。けれどそんな完璧を求める不完全な知恵美と僕は付き合った。そしてそんな彼女と芸能界が一带どんな繋がりがあるのかと言うと。

調度僕らが付き合い始めた頃、彼女が僕に「私。芸能プロダクションに通ってるの」と突然言った事があった。

その時の僕はそんな事を突然言われても、一体それが何を意味するのか分からなかった。彼女の話をよく聞くと、それは彼女がまだ中学三年生の頃。何かのオーディションを、おもしろ半分を受けたそうなんだ。そしたら二次予選まで受かったのだけれど結局最終審査は受験が近かった事もあって受けなかった。けどそれからしばらくしてその関連している、とあるプロダクションの社長から、直接電話があって芸能人になる気はないかって言われたと言う。そしてそれ以来彼女は週1回レッスンに通っているという内容だった。初めのうちは正直言って僕は信じていなかった。だってそんなこと急に言われてもピンと来なかったし、それにそんな事がまさか自分のすぐそばに起こるなんて思ってもいなかったから。きっと女子高校生に良くある小さい話を大げさに言っているだけの事だと思っていたんだ。

始めはね。けれど僕らが付き合っていたほんの数ヶ月の間に起こった出来事が僕のそんな疑いを消していったんだ。

まず彼女の家の前に現れた一人の男。

そうこれは、僕らが付き合って1ヶ月位経った頃だろうか。ある晴れた日曜の午前中の事だった。僕は友達から借りたバイクでドライブがてら彼女の家の近くまで走っていった。勿論彼女との約束なんて無かったけれど、すごく天気が良かったので彼女をバイクの後ろに乗せて遠くまで走りたい、そんな気分になった僕は、気が付くと彼女のマンションの前で彼女に電話をかけていた。

「あっ もしもし 俺だけど、今調度家の近くまで来たからどっか遊びにいかないか？」  
そんな僕の突然の誘いに「ごめん。今日は、あの日だから今から出掛けなきゃならないの」と彼女は言った。この時僕は彼女が毎週日曜日がレッスン日だと言っていた事を急に思い出した。

「あっそうか。今日はレッスンだかなんだかの日だったよね。だったらいいんだ。友達でも誘って遊びに行くから」

「本当にごめんね。また今度誘ってね」

「ああ わかったまた今度誘うから、じゃな」

「じゃね」

そして僕らの会話は十円分も話さずに終わった。正直言って僕は彼女が気になった。レッスンって一体どんな事をするのか？ いや違う。彼女が僕に嘘をついているかもしれないという事が、いやそれも違う。芸能界って一体なんなのか？ いやこれも違う。どれもこれも違うけれど、きっとそんな事の全てが無性に気になっていたんだろう。僕は彼女には友達を誘ってどっか行くよと言ったけれど、結局ひける心を押さえて彼女のマンションの入口の近くに行った。幸いな事に僕はフルフェイスのヘルメットをかぶっていたので顔は見られずにすんだ。とりあえず僕はヘルメットを脱いで煙草に火を付けて一服する事にした。見上げると空は透き通る程の青空で、僕の吸った煙草の煙はそんな青空の中へ消えて行く、そしてその青空をスーと降りてくると、僕の彼女のマンションが天にも届きそうな位高くそびえ建っていた。そして彼女の部屋はその天にも届きそうな超高層マンションの上から2番目の階にあった。僕は一服し終えると彼女の家の玄関が見えそうな所に車を止めて、彼女の玄関辺りを見ていた。それから10分位たったのだろうか。彼女のマンションの入口に一台の黒い車が止まった。当時の僕は余り車に興味が無かったのでその車が外車なのか日本車なのかも分からなかったけれど、何となく高級車だという事だけはわかった。そしてその車には運転手らしき男と後ろの席にはシャキっとしたスーツ姿の男が乗っていた。

それからそのスーツ姿の男は運転手に何やらいい残して一人でマンションの中に消えていった。そしてその男が次に僕の目に入ったのは、なんと彼女の家のインターホンを押そうとしている所だった。一体誰なんだろう？ 彼女のお父さん？ いやそんなはずはない。彼女のお父さんを見たことは無かったが、お父さんという雰囲気ではない。だったらお客さん？ 普通に考えるとその線が一番濃いだろう。けどその線だけで固めるのも危険な気がする。僕がそんなまるで探偵にでもなったかの様な推理を立てているうちにスーツ姿の

男は、僕の目の中に衝撃的な3度目の登場をしてきた。次の瞬間僕は驚いた。なんとそのスーツ姿の男の後ろにはなんと彼女が、まるで警察に連行されて行く少女の様にうつむきかげんで着いてきたと言うよりも連れられてきた。僕はもしかすると本当に警察なのではないかと思えたので、もう一度スーツ姿の男が乗ってきた車を見た。僕はその頃何度か些細な事で覆面パトカーに乗った事があったので覆面パトカーならすぐ分かった。けれどその車には覆面パトカー独特のアンテナも無ければ、パトランプも備わってはいなかった。正真正銘の一般車だった。僕はほっとした。それと同時に疑ったりした自分が恥ずかしく思えたが、それは言い換えれば彼女を心配している事でもあった。

それからスーツ姿の男は車のドアを開けて彼女を先に乗せようとした。その時彼女は一瞬微笑んだ様に見えたが、良く確認出来ずまま車の中に消えて行った。その後スーツ姿の男が乗り込むと、その覆面ではない一般的？ 高級車は音も出さずに走り出した。僕もすぐに単車のキーを回してエンジンをかけたが、またすぐにエンジンを切った。イッタイ ナンニナルンダヨ。僕が追いかけたとしても。心配と疑いは違うんだよな、きっと。本当はこの時の僕には、すでに彼女の行き先なんて知っていたんだと思う。そうそれは具体的に何とか事務所という事ではなく。もっともっと僕なんかがいくら背を伸ばしても手の届かないくらい遠い所だという事に。実際、今現在の僕が手の届かないように。だけどその時僕が出来ることは彼女を信じる事だけだったのだろう。それからあのスーツ姿の男の正体を彼女の口から聞いたのは、僕が3回眠れない夜を越えた日の学校の帰り道だった。

その日の彼女はいつもと代わりない笑顔で僕の横を歩いていた。そしていつもと違うことは、僕がこの三日間彼女の顔をまともに見れなかったくらいだった。

「ねえ。何かあったの？」と彼女はそんなうつむきかげんの僕の顔をのぞみこみながら言ってきた。

僕はそんな無邪気な彼女に「別に」と答えてはみたものの、明らかに別にではなかった。そしてやはりと言うか当然と言うか、彼女はそんな僕に「嘘だ」と言ってきた。それから僕の瞳の奥を覗き込みながら「もしかしてこの前の日曜日の事？」とも言った。僕は一瞬びっくりした。彼女の感が余りにも鋭い事に。まるで僕の心の中なんて、手に取ってわかっているんじゃないかと思えてしまう程僕を驚かせた。そしてそんな僕の心の変化にも敏感に気が付いたのだろう。「やっぱり、そうなんだ」と彼女は言った。

「ち・ちがうよ」と僕は、すぐに隠そうとしたが、ハッキリ言って何の意味もなかった。

「違うくないでしょ。だって顔に書いてあるもん」

「えっ」

「さっきからちゃんと顔に出てたよ」と彼女はまるで小さな子供の嘘を見破る様に言った。

どうも昔から僕は苦手みたいなんだ。嘘だとか隠し事が。例えば嘘を付く時は口元がにやけてしまったり、目がおもいきり泳いでいたりとか。心配事があると目の下にくまなんか作っちゃって、おもいきり眠れません！！なんて自分からアピールしちゃうんだ。勿論わざとしている訳ではないんだけど、心を許せる人の前では何故か、表情や態度に出てしまうんだ。でもこういう自分と言うのはある意味心を許している自分だけで。心を許してない時は完璧に僕の表情はポーカフェイスにもなれる。A B型だからね。自分の中に極端に違う自分が二人居るだけなんだ。けれどこの時彼女の目の前に居たのは、心を許している自分だった。その後僕の心に安らぎが戻るまでに幾つかの言葉が僕と彼女の

間を飛び交った。

結局あのスーツの姿の男の正体は、彼女の通う事務所の社長だったか専務だったか良く覚えてはいなかったが、とにかくお偉いさんという事だった。そして彼女の行った先は、僕の知らない世界にある事務所だった。

それからしばらく毎週日曜日は、僕は僕の為に、そして彼女は彼女の為に、お互い違う場所で違う事をして過ごした。彼女があんな事を口にするまでは。

そうあの時は彼女が二、三日何か悩んでいる様だったので、僕の方から問い掛けてみた。「どうしたんだ？ 最近元気無いみたいだけど、何か悩み事でもあるの？」ってね。そしてこの二人の小さな幸せを壊してしまう言葉は、彼女の触れば今にも消えて無くなってしまふ程透き通った、その小さなくちびるから飛び出した。

「真面目に聞いて欲しいの。もしこのまま続けて行くと学校を辞めなければいけないかもしれないんです」って。そこまで言われた時に僕は彼女が何を言いたいのか分かってしまった。もしかすると初めて彼女の口から芸能界って言う言葉を聞いた時。そしてあのスーツ姿の男を目撃した時から僕の心の中の何処かには、きっと彼女がいつかそんな言葉を口にするんじゃないかという不安がずうっとあった様な気がする。けれど今まで僕はそんな不安を隠していたんだ。そんな事はない、ソナコトハ・・・ってね。だって彼女はいつだって僕の目の前にいるんだぜ。ほら今だって手を伸ばせば彼女の可愛い顔にだって触れる事だって出来るんだ。そしてお互い寂しい時や不安な時は抱き締め合うことだって。だからその先は言わなくていいんだよ。君が一人で悩んで苦しんだ分、僕が一人で悩んで苦しんだ分、お互いこの短かい間に色々な事があり過ぎるほどあったよね。

だから少し休まないかい？ あの木陰で。僕はそう思っていた。けれどいくら休んだとしても現実という時は流れていくんだ。いつも僕らの知らない所で・・・。

そして彼女の唇からは、「そして何より、坂井先輩と付き合っていけなくなるかもしれないの」そしてそれは、だったらそんなのやめろ！！ って言ってと言う様にも聞こえた。一体芸能界って何なんだろう。そりゃごく普通の子がごく普通の高校を出て、ごく普通の恋をして、そしてごく普通の結婚をする事と、ごく普通だった子が、ある日突然芸能界に入って、アイドルだとかスターと呼ばれる様になって、夢の様な生活になる事（勿論それだけでは無いけれど）とは比べられない位大きな違いがあるよ。それに今君の目の前にいる僕だって、君があんなに好きだって言ってくれた僕だって、いつか君の心の中の記憶から消えてしまうぐらい、素敵な男性に巡り会える事だってあるかもしれないよ、その芸能界って言う名の世界では。

けれどそんな彼女が見ている夢の先にあるものが一体何なのかは、手を伸ばしている彼女にも、ましてや夢なんて一度も叶えた事の無かった僕なんかには分かるはずも無かった。

今思えば、この頃初めて僕は芸能界と言うもの少し真剣に考え出したのかもかもしれない。それまでは別世界で、自分には一生縁の無いものと思っていたけれど、この時と、そして今現在と2回も僕の人生の中で、それも普通の人とはまったく別の形で現れるとは思ってもいなかった。もし今また同じ状況に立てたとしたなら、僕は何の迷いも無くきつこう言っただろうよ。

「何も迷う事なんてないさ。お互いが出来る事をすればいいんだ。出来るかどうかは関係

ないんだ。大切な事は俺が俺の出来る限りの事を精一杯やる，そして君が君の出来る限りの事を精一杯やる，ただそれだけなんだ。そうすればきっといい結果が出ると思うから。だからがんばろうぜ」ってね。

けれどあの頃の僕が死ぬ程必死に悩んだ末に出た言葉は「俺の事なんてどうでもいいからお前はがんばれよ」と言うあきらめに似た言葉だった。けれど僕は決して全てがあきらめで言ったんでは無かったんだ。そう僕にとって夢と言うものはとても大切なものだったんだ。だから彼女にも僕を大切にしてくれた様に，夢も大切にしたい欲しかったんだ。本当は。けれど僕らが自分の中に答えを出すにはまだ若すぎたんだろうか？ それとも二人は弱すぎたから？ それともお互い寂しすぎたから？

結局彼女は学校をやめたよ。そして芸能界と言う名の風は，僕らの心の隙間を通りすぎていった。それは僕らにとって暖かい風でもあり，悲し過ぎる程冷たい風でもあった。そして何より小さな二人の愛を壊すには十分すぎる風でもあった。

僕は車のフロントガラスに写っているあの頃の思い出と，そしてその先に写っているスタジオの小さな明かりと言う現実を，空が明るくなるまで眺めていた。

・・・これから，きっと色々な事が僕の心の中に起こるだろう。けれど僕はその色々な事を，あるがままに受け止めて行こう。今まで色々な事を捨ててきた分・・・

そして僕はふっと溜め息を付いて前髪をかき上げ，車のフロントガラスに付いた曇りを，思い出と一緒に手で吹き取った。

よしこれで現実が良く見えるようになった。僕はさっきよりほんの少し良く見えるようになった現実に向かってアクセルを踏み込んだ。フロントガラスの向こうの現実には，調度朝日が昇り初めようとしていて，その光が希望の光となって僕の新しい第一歩をいつまでもいつまでもやさしく包んでくれていた。

・・・優しさは一体何処から来るの？ 優しさの意味すら知らない僕等はずいぶん手にも触れられる温もりだけを信じていたね。君は幸せかい？ この凍てついた風の中で僕等は寄り添い、そして支え合って居たね。君は幸せかい？ ひとりぼっちの君の瞳の中に写っている僕は笑って居るかい？ 君は本当に幸せかい？ 僕の優しさは風のように過ぎていってしまったね。ほんの少し開いてしまった僕と君との、ほんの少しの隙間の間を・・・

～夢の中の少女は何かに迷っている様だった。

それは彼女の口から言葉と言うモ - ルス信号が出なくても僕にはわかった。たいがいの場合、言葉なんてなんの意味も持たないように。

「ねえ、君はひょっとして何かに迷っているんじゃないのかい？」と僕は聞いてみた。

そして夢の中の少女はそんな僕の問い掛けにただ黙ってうなずいた。

「だったらそんなに悩む事はないよ。そう言うものはあるがままに受け止めればいい。そんなに焦って考えなくても、その時が来ればきっといい答えが出せると思うから」

僕の言葉は確かに的を得ていた。けれどその的がこの世の中の一体何処にあるのかは分からなかった。そして夢の中の少女は「優しいね」と言った。

「僕が？ そんな事は無いよ。僕なんていつも悪の代名詞みたいに言われてるんだ」  
けれど彼女は首を振った。

「そんな事ないよ。悪の代名詞なんかじゃ無いよ。あなたはとても優しいの、ただいつも誤解されているだけなの」

今思えばそうなのかもしれない。僕はいつからか誤解されていたのかもしれない。

「誤解されて寂しくない？ 私は寂しいの。そしてそれによって何かを失う事が恐いの。恐くて恐くてしょうが無いの。あなたは何かを失う事が恐くないの？」と彼女は言った。そして僕がその答えを出せないまま夢は覚めた。

僕の心に

[あなたは何かを失う事が恐くないの？] という問い掛けだけを残したまま・・・。

### 第三章

#### 『不思議の国の恋の物語』

「ま・ま・ま・松井夏子。あっ あった！！」

僕は横浜にある。とある小さなレコード屋に居た。

そして僕がレコード屋を何件も何件も捜し回った末にやっと見つけたこのCDは、今にもニューミュージックと言う名の時代の波に飲み込まれてしまいそうな。そう、それは注意して見ていて上げないとその存在すら消えて無くなってしまいそうな、そして消えて無くなってしまっても誰ひとり気が付かない位、少し埃かかった寂しい所にあった。けれど僕にとっては違った。そう、それはやっと見つけた宝箱の様に・・・。

何しろ僕は、ここ1～2週間と言う歳月は彼女のCDの為にあったんだから。でも何故彼女の事なんて何一つ分からなかった僕が、今ここに彼女のCDを求めて辿り着けたかと言うと。実は親友の助けがあったからなんだ。

前にも言ったけれど、僕には夜の町に繰り出す時に博之と言う仲のいい友達が居た。そしてその博之とはただ夜の街に繰り出すと言う事だけでは無くて、時には気楽な二人旅をするという仲でもあったんだ。僕は何かこの博之といると気楽になれるんだ。何故かって？ 具体的にこうだと言うのは分からないけれど、多分博之は僕にあまり難しい事を聞いてこなかったからだと思う。どういう事かと言うと、僕は自分の私生活の事だとか自分の悩み事なんかを、人にあまり上手に話す事が苦手だったんだ。良く人に相談事を受ける時がある。けど何故かそういう時は、自分でも驚く程いいアドバイスをしあげられるんだ。だけど自分の事になると人に相談出来なくなってしまう。例えどんなに苦しくても、



どんなに辛くても。何故なんだろう？ 別にかっこつけている訳でも、友達を信じていない訳でもないのに。ただどう切り出していいか分からないだけなんだ。小さい時から何かからかまわず自分一人で背負って来過ぎたせいなのだろうか？ 例えるなら積木なのかもしれない。そう普通の人とは土台をしっかりと建ててから少しずつ、そう少し積んだらまた上から叩いて、そしてまた少しと言う具合で積み建てるものだけど。僕の場合はとにかく高く高く、形は不安定だけどとにかく高くって。だから今となっては、もう何処をどうゆう風に人に見せればいいのか分からない。とにかくどれか一つを取って人に見せようとするれば、きっと全てが物凄い音とともに崩れてしまいそうに成ってしまう。だから僕はいつも自分の悩み事（弱み）を人に話す事が出来なかった。だけど僕にとってその事はそんなに辛い事なんかではなかった。なんせ二十年近く付き合ってきたから事だったから。じゃあ一体何が僕を辛くするかって言うと。そうそれは「お前は強くって何もかも一人で背負って行けるかも知れないけど、俺たちにも時には相談してくれよ。俺たちいつもお前に頼りっぱなしだから、時には俺たちにもお前の為に何かさせて欲しいから」って言う親友たちの本物の友情のこもった暖かい言葉だった。

それは凄く嬉しい事であるのに、それに応えられない自分がそこには居て。それでいて友達には辛い思いをさせたくない自分も居ると言う複雑な思いだった。

話がそれってしまったけれど、要するにそう言う自分を偽る部分が無かったんだ。博之に対してはね。それは別に嫌な意味では無くて。どちらかと言うとお互い色々あるけれど、お互いが会っているその時を大切にしているのだろう。だから僕は正直言って博之の親友だけど、博之の私生活の事は全くと言って知らなかった。極端に言うと、博之に彼女が居るかどうかだってわからない。だからこそ気楽に楽しめた。たとえ僕が失恋をした夜であっても、何事も無かった様に馬鹿騒ぎが出来るんだ。何事も無かった様に。そして今僕がこうして松井夏子のCDに出会ったのも、気楽に楽しめる博之のおかげだった。

そうあれは調度二人で伊豆半島に車で旅行に行った時、星降る夜空の下で車を停めて、シートを倒して二人で色々語り合っていた時だった。その時ひょんな事から彼女のドラマの話題に成ったんだ。僕は正直言って驚いた。話を聞けば博之も彼女のファンの一人だと言うではないか。その時の僕の気持ちができるかい？ 長い旅の途中で同志にでも逢ったとでも言うべきか、それとも暗い暗い洞窟の中でやっと出口の光を見つけたとでも言った方がいいのか、とにかくやっと出会えたんだ。分かり合える奴に。それもこんな身近にね。僕は自分の気持ちを素直に全部言ったよ。僕が彼女に初めて出会った時の事。彼女に出合って変わり始めた僕の生活。彼女が僕に与えてくれた全て。そして何より僕が彼女に恋をしてしまった事を……。僕は彼女に対する気持ちの全てを正直に話した。それは全ての星座達が北極星を中心に3分の2回転周り、地球の大地に吸い込まれて消えてなくなり、夜空が明るくなるまで続いた。まるでそれは終わる事のない永遠のせせらぎの様に、それは永遠に終わる事のない僕と博之の友情の様にいつまでもいつまでも続いた。だけど今思うと何故僕はその時、何もかもを話す事が出来たのだろうか？ 先も言ったけれど僕は自分の事を話すのが苦手だった。ましてはこんな事なんてなおさら言いにくい事だった。確かに僕と博之の間には絶対に裏切りなんて無い程の信頼が有ったさ。けれど内容が内容だけに、誤解だって有るだろう。例えばオタクだと思われたり、もしくは今流行りのストーカーだと思われる事だって有っただろう。けれど僕はありのままを話した。僕が彼女を思う

気持ちはファンの域を超えている事。そしてそれは決して不純なモノや汚れているモノでは無くて、とても純粹モノであり、とても清らかなモノである事。そしてそれは小さな恋であり、優しく包んでいないと今にも壊れてしまいそうな程か弱い物だと言う事を。僕はそんな自分が思っていた事を乱雑ではあったが、精一杯整理して説明した。そして博之はそんな僕の不安で今にも壊れそうな本音に、優しく頷いてくれていたんだ。それはストーカーなんかじゃ無い、それはオタクなんかでも無い、それはきっとお前の純粹な気持ちなんだと思うよってね。僕はこの時、ありのままの真実を本当に博之に話して良かったと思った。それは今まで僕がかたくなに背負って来た重荷が、ほんの少しだけれど軽くなった様な気がしたし、そして何よりそれは、これから先の僕の歩くべき道に勇氣と言う名の希望の光を与えてくれた。そしてこの時僕よりほんの少し芸能界に詳しい博之は、彼女がCDや写真集を過去に出している事を僕に教えてくれたんだ。そしてそれが僕が松井夏子のCDに出会う始めの第一歩だった。

僕は松井夏子のCDをその埃かかった棚から取り出して見た。タイトルは*memoria*と言うどこにでも有りそうな物ではあったが、ジャケットはなんだか寂しそうに遠くを見つめている彼女が写っている、なんだか切なくなる様なジャケットだった。

僕はCDに付いていた埃を手で優しく払い落としてレジに向かった。レジには子ギャル風の女の子が二人べちゃくちゃ話しをしていたが、僕がCDを持って行くと急に態度が変わった様に、いらっしゃいませと、その二人の女の子は店員に成り変わった。僕は松井夏子のCDをレジの上に置いて5千円札を出して2千円のお釣りとムーンミュージックと書かれた包装紙に包まれた彼女のCDを受け取った。その間二人の女の子はCDと僕の顔を照らし合わせている様な気がしたが、きっとそれは僕の気のせいなのだろう。僕はCDを受け取ってその店を出た。

店の外はもう夕暮れに近いせいもあって、人の波が出来始めていた。そしてその人の波の中で僕はとりあえずこれからどうするかを考えてみた。僕は今夜8時に友達と会う約束をしていた。けれど僕の腕時計はまだ短い針が数字の5の所をほんの少し回っただけだった。まだ約束の時間までは3時間はある。しかし一度家に帰って今買ったばかりのCDを聴くにはその3時間は決して長くはなかった。かと言ってその3時間の間そのCDを眺めている訳にもいかない。なんと言ったってCDは聴くものであって見るものではないのだから。勿論CDを聴く為にはCDプレーヤーが無ければ聴けない事だって良くわかっていた。しかしこの場にはCDプレーヤーなんか有るわけではない。けれど正直、僕は聴きたかった。彼女が一体どんな歌を歌っているのか、彼女の歌声はどんなに綺麗な歌声なのか、そして一体彼女が歌う歌がどんな風に僕の心に響いて来るのか、僕は出来る事ならこの夕日が沈んで終う前に、この街がすさみきって終う前に、この街が欲望の渦に飲み込まれて終う前に聴いてみたかった。彼女の歌を。けれどどうあがいたってCDプレーヤーが無い事にはどうする事も出来やしないんだ。CDプレーヤーが無い事にはね。仕方がないのでとりあえず僕は歌の歌詞でも読んでみる事に決め、近くの喫茶店に入った。僕は窓際の席に付き、タ - キッシュコ - ヒ - を頼んでからムーンミュージックの袋を開け彼女のCDを取り出して歌詞を読み始めた。

曲数は全部で10曲有り、その中で英語のタイトルの曲が2曲、そして後の曲は日本語のタイトルだった。僕はざっとその歌詞の一つ一つを読みあさってみた。どの歌詞も大体

16.7の女の子の恋愛をテーマにしてあるもので、その殆どが失恋や片思い等の胸が切なくなる様なモノではなく、どちらかと言うと明るく前向きな恋愛の物語だった。そして僕はその中の一つ、信じてあげる、と言う歌詞に心を奪われた。それは何処かで聞いた事があった様な言葉であった。僕はこの信じてあげると言う言葉を、一体何処で聞いた事があったのだろう。この疑問が解けたのは、僕がターキッシュコーヒーを3分の2程飲み掛けた時だった。あっそうか！ この言葉はそう僕が彼女に初めて出会ったあの夜に、全てを失い掛けていた僕がハッキリ聞いた彼女の台詞だったんだ。そしてその曲の歌詞は何処と無くBeatlesのイン・マイ・ライフに似ていて、僕をセンチメンタルな気持ちにさせた。

～ 遠い昔の記憶の中にあなたは居ないの。私が送った中学校、初めて恋した高校時代。そして私の通った帰り道。私が生まれて今日まで歩いたこの道に、楽しかった思い出にあなたが居ないのは、きっとあなたが必要無かったんじゃないくて、今日私の思い出をゆっくりあなたに教えてあげる為なのね。私が初めて書いたラブレターの事、私が初めてふられて泣いた日の事、そして私を慰めてくれた友達の事を。だけどそんな思い出の全ては私にとってのはただの思い出。今の私にとって大切な事は、今まで歩いてきたこの道じゃなくて、これから二人で歩いて行くこの道なの。だから私が信じてあげる。

だって私が信じて欲しいのもあなただから。～

そしてセンチメンタルな気持ちになった僕は、やはりどうしても彼女の歌が聞きたくなった。その気持ちは僕がまだ小さかった頃、デパートの屋上で買い物をした人だけに配っていた赤い風船に似ていた。

僕はその頃両親が共働きをしていたので夏休みなんかは、母親が働いていた会社の近くのデパートの屋上で一人で遊んでいた。勿論お金なんかは持っていなかったんで、みんなが楽しそうに乗っていたロボットの乗り物や、大きなパンダの乗り物には乗る事は出来なかった。もっぱら僕がしていた事は、動物ふれあい広場でちっちゃいパンダウサギに餌をあげたり、動かなくなったロボットの操縦席に座ってパイロット気分になったり、屋上の柵越しで遠くの街を眺める事だった。

当時僕はまだ小学校の低学年、男の子と言ったってひとりぼっちで見知らぬ街のデパートの屋上で遊ぶのは寂しいものだ。周りを見渡してもみんな母親と一緒にキャッキヤ、キャッキヤ、はしゃいでいるし、もし仮に一人で遊んでいる子が居たとしても一時間もすれば買い物袋を両手に抱えた母親が迎えに来てくれていた。今の時代は一人ぼっちなんて当り前の時代かも知れない、こんな事言うと今時の子供に笑われてしまうかも知れないけれど、僕はその頃は顔にさえ見せなかったがやっぱり寂しかった。そしてそんな寂しい日々を送っていた僕の心の隙間に、ある時ふうっと一つの赤い風船が飛び来んで来たんだ。それはOOデパートと書かれたどこにでもある普通の風船ではあったが、その時の僕には自分をどこか遠くの夢の国に運んでくれる気球の様に見えた。

・・・「ネエお母さん、僕あの風船ほしいよ」「まあまあ俊昭ちゃんたら、しょうがない子ね」・・・「ねえねえママ、わたしもあの風船もらいたいな」「じゃあママがもらっただけだから何色がいいの？」・・・「なあ母ちゃん、俺もあの風船ほしい」「じゃあもら

って来てあげるから、あんたお母さんの言う事ちゃんと聞くんだよ。わかった？」「うん、わかったからもらってきて」・・・

周りでは子供たちが母親に風船をねだる声がしていた。そしてその先には赤い風船や青い風船、黄色い風船や緑の風船、色とりどりのまるで大きな花束の様な風船を両手いっぱい抱えた二人のお姉さん達が子供たち一人一人に何かの券と引換に配っていた。そしてその宙に浮いている色とりどりの風船に心を奪われた僕は、みんなが手に持っている何かの券の事など気にもせずみんなが並んでいる列の後ろに並んだ。

順番が少しずつ僕に近付くにつれて僕の心の鼓動が激しく鳴り響く、そしてその鼓動が頂点に達しようとした頃やっと僕の番がやてきた。そして僕は少し震える声で言った。「すみませんが、僕にもその赤い風船を一つくれませんか？」

始め一人の女の人が「僕ねえ、この風船はね、ここで買物をした人しかあげられないの」と言いかけたが、すぐにもう一人の女の人が「本当は買った人だけだけど、僕には特別あげるから、ちゃんと大切にね」と言って赤い風船を差し出してくれた。僕は「うん、僕大切にすよ、ありがとう」そう言ってその赤い風船を受け取った。

それから何日間は、僕はその風船と過ごした。ある時はその風船は僕の友達だった。ある時はその風船は僕に優しさを教えてくれた。またある時はその風船は僕に元気を与えてくれた。僕は一人ぼっちじゃ無かった。例え親が働きに出ていても、本当の友達に会えない時も。その風船を見ていると僕は何故か元気や勇気が湧いてきたんだ。あの頃は。

そしてその風船は子供だった僕の小さな手からある日飛び立って行ってしまったんだ、僕だけを置き去りにして。しかし今ほんの少し大きく成った僕の手の中には、松井夏子のCDがあった。同じなんだ。僕があ頃手にしていた赤い風船と。そのCDは僕にあ頃と同じ様に、元気や勇気を与えてくれていた。そしてそんな僕が歌詞を読みながら思い出と照らし合わせていると、かすかに僕の耳にズンチャンズンチャンと湧いたリズムが、店の中で流れているアメリカングラフティーを思い出すDANNY & THE JUNIORSのアット・ザ・ホップの曲に混じりながら聞こえてきた。

僕は始めその不快な音が一体何だったのか気付かなかったが、コーヒーを取ろうと手を伸ばした時に、ちらっとそのリズムのする方に目をやった。僕が目をやった先には今風と言えはいいのだろうか、ショートパンツにDKNYのTシャツ、背中には何を入れているのだろうかと思わせるDayバッグを背負い、グラサンを掛けたヒップホップ系の少年が何かのリズムに身を任しているのだろう、身体を上下左右に振っていた。そしてその湧いたリズムは、その少年のイヤホンからもれていたのだった。

僕はハッとした。そうかこの手があったんだ。僕はそう思いやいなや財布の中身を覗いて見た。財布の中には1万円札が3枚とさっき買ったCDのお釣りの千円札が2枚あった。安いポータブルCDなら買える。もともとそのうちポータブルCDを買うつもりだった僕は、なんの迷いもなく一気に残りのコーヒーを飲み干し店を出た。店の外は店に入った時よりもだいぶ暗く成りかけていて、さっきまでまばらだった人も今は人波が出来始めていた。時計を見るともうすぐ6時に成ろうとしている。まだ店は開いている時間だ。僕はデパートのある繁華街の方に人波をうざったく感じながら走り出した。

僕がデパートで目的の物を買って出て来た頃には辺りは暗闇を作り出していた。そして僕はその目的の物を持って近くの公園に向かった。僕が公園のベンチに座る時には、僕の

財布の中の2万円はKENWOODのポータブルCDと単3のアルカリ乾電池2本に変わっていた。そして僕はさっそく買ったのポータブルCDを箱から取り出し乾電池と松井夏子のCDを入れてPLAYボタンを押した。

初めて聞く彼女のCD。そして彼女の歌声。僕の疲れかけた心を癒すには十分すぎるだろう。案の定、今まで殺風景だった夜の静かな公園がまるで遊園地にでもなったんじゃないかと思うほどきらびやかに感じた。

彼女の歌声はとても美しく、そしてとても暖かかった。こんな言葉で言うとお世辞に聞こえてしまうかもしれないけれど、とにかくこの時の若すぎて、そして寒すぎた僕には、こんな言葉が僕の全てだった。僕は芸術家や音楽家じゃないから、人が言う美的感覚は無いかもしれない。しかし僕にとっての美はいつも目には見えない所にあったし、暖かさは体でなくて心で感じていた。だから僕にとっては彼女の歌声は美だった。そしてそれはとても暖かい物だったんだ。僕にとってはね。

僕はどれくらいその場に居たんだろう。気が付くと辺りはカップルがちらほら現れ出していた。きっと彼等にしてみれば夜の公園で一人、ポータブルCDを片手にベンチに座って物想いにふけている僕なんて滑稽に思えただろう。しかしどのカップルも僕の存在なんて気にもしていない様に、あるカップルは寒く成った心と体を暖め合う様に体を寄せ合い今日一日の出来事でも話合っているのだろうか、女の子の話に男の方がうなずいていた。またあるカップルは、お互いの存在や気持ちを確かめ合う様に抱き締め合っていた。僕には今彼女と言う手に触れられる存在は無い。そしてどれだけ手を伸ばしてもその先に感じる温もりも感じる事は出来やしない。しかし今松井夏子の歌声を聞きながら、愛を確かめ合うカップルを見ていると僕は、ほんの少し幸せの意味がわかった様な気がしたんだ。それは具体的にどうと言う事ではなく、漠然としてはいたけれど確かなモノだった。

そしてそれから僕は時計を見て時間を確かめると、その場を座りたそうなカップルに開け渡して友達の待つ待ち合わせ場所へ向かった。そしてこの日から僕の生活にポータブルCDが加わったんだ。僕は何処かに行く時は大概一冊の小説とポータブルCDを持ち歩いた。それはある時は会社の鞆の中であり、またある時はセカンドバッグやDayバッグの中にあった。そしてそれに付随してCDソフトも持ち歩いた。レパトリーは気分や陽気によって様々であった。それは時にはエルトン・ジョンであり、ビートルズであり、カーペンターズであり、ロッド・スチュワートであり、エリック・クラプトンでもあった。けれどそんな気分や陽気にかかわらず僕がいつも手にしていたものはやっぱり松井夏子のCDだった。しかし不思議なもんさ。たかだか12cmの銀の円盤の様なモノが、僕の心をこんなにも勇気づけてくれるんだから。そんな事を考えると僕は昔読んだ本の事を思い出した。それは貧しい絵書きの話で、その絵書きにはあと一人分の食べ物を買える位のお金しか残っていなかった。そしてその絵書きは、そのお金を自分の恋人にこれで君の今夜の食べ物を買えばいいと手渡したんだ。自分の分までね。しかし彼女はそのお金で自分の食べ物は買わなかった。彼女はそのお金で自分の食べ物の代わりに一輪のバラの花を買ったのさ、一輪のバラの花をね。二人はおなががすいているんだ。お金ももう無いんだ。きっと二人を照らす灯りも無いのだろう。そして二人を暖める暖かいスープも暖炉も無いのだろう。けれど二人は寂しく無かった。寒くも無かった。その一輪のバラの花が二人を幸せにしてくれたんだ。明日の風の行方すら二人にはわからないはずなのに。結果を言ってし

まあ、結局この一輪のバラの花を見た絵書きは、その気持ちを一枚の絵に表現したんだ。そしてそれは背景も無い一輪のバラの絵であり、それはそれ以上でも無ければそれ以下でも無い何処にでもありそうな、お世辞でも綺麗とは呼べない地味な色のただの一輪のバラの花の絵だったんだ。何処にでもありそうなね。だけどその絵には何処にでも無い物があった。その絵には背景の代わりに思いやりがあった。そして明るいパステルカラーの代わりに、生きる希望があった。そして何よりゴ・ジャスサの代わりに、その一枚の絵にはあふれる程の愛が沢山あった。そしてその絵は偶然と言うより、当然一人の目利きの目に止まり高い値段で買い取られた。そして貧しい絵書きとその彼女はお金に困ること無く幸せに成った。確かそんな話だった。それは確かに出来過ぎている話だ。そしてこの話が現実には有った話か、それともただの作り話か僕にはわからない。けれど僕は純粋にこの話が好きだった。この二人にとって幸せの鍵は、500円も有れば誰にでも手に入れる事の出来る一輪のバラの花である事と、しかしそれは例え1億円出しても買えない人には買う事の出来ない一輪のバラの花(幸せ)でもある事なんだ。たった一輪のバラの花。正直言って今僕の手の中に有る1枚のCDとこのバラの花は違う。ある意味人を幸せな気持ちにさせると言う意味では同じかもしれないけれど。僕の手の中に有るこのCDは3000円さえ出せば誰にでも買う事が出来るモノだった。もし僕にも絵の才能が有るならばこのCDを聴いたこの気持ちを絵で表現出来るだろう。たとえ絵じゃなくても音でも詩でもいい、僕に才能さえ有ったのならきっと彼女の歌の美しさや優しさ、そしてそれが僕をどれだけ勇気づけてくれているか、目利きに高い評価を受けないにしても、みんなに何か形で教えてあげる事が出来るのに、この歌はこんなに素晴らしいんだと。だけど僕は絵書きでもなければ、ミュ・ジシャンでも詩人でも無かった。世間で言う普通の人なんだ。あまり自分を否定的に考えるのは好きでは無いけれど、それは事実であり仕方のない事なんだ。僕は世間が言うただの凡人なんだ。しかし正直言って僕にとって天才だろうが凡人だろうかどうかでも良かった。僕にはとりあえず今夜の食べ物を心配しなくていい位のお金は有ったし、明るいかはわからないにしろ今日とさほど変わらない明日を迎える整理券を貰う権利は有るはずだし、何しろ凡人にも結構楽しい事は幾らでも有り、凡人もそれ程悪く無いと思っていたから。少なくともこの時の僕には本当にそう思えたんだ。長い旅の途中のオアシス。普通、平凡、そして平和。全て松井夏子が思い出させてくれた安らぎだった。しかし本当は知っていたんだ。平和な明日を迎えられる整理券なんて無い事を。そして冷たい風が僕に吹き付けようとしている事や、そしてその事に僕は、逃げずに体を張って立ち向かわなければならぬ事を。

この頃から僕の生活はその先が何処に辿り着くのかわからないまま、また少しずつ変わり初めていた。

松井夏子の事は相変わらずわからない事が多かった。なんせアイドルや女優に憧れた事なんて無かったから、どう言う雑誌を見ればいいのかもわからないし。今までアイドルの話で盛り上がっている友達に、俺はそんなの興味ねえから、なんて言っていた手前、今更詳しくそんな友達に聞く訳にもいかない。正直言ってお手上げ状態だった。僕は別に彼女の何もかもを知りたい訳じゃないんだ。僕が知りたい事はただ彼女の趣味は何だろうとか、どう言うモノに感動するのだろうかとか、どう言う場所が好きなんだろうと言った類の些細な事なんだ。多分オタクと呼ばれている奴は人が知らない事まで知っているだろう。

例えば何処に住んでいて電話番号がいくつととか、いつ何処々に来るからそこに行けば会えるんだとか。なんせこんなに情報が溢れている世の中なのだから。しかしこれじゃプライバシーもへったくりもあつたもんじゃない。僕は芸能人じゃないから精々何かの勧誘位しか困った事は無いけれど、芸能人の話を聞くと悪戯電話や嫌がらせの贈り物が沢山あつて大変だつて言っていた。僕は確かに松井夏子に恋心を抱いているかもしれない。けれどだからと言って、いやだからこそプライバシーを覗く様な事はしたくは無かつた。正直言って彼女と僕は生きている場所が違う。場所と言っても具体的なモノじゃなく、要するに生きている世界が違うんだ。だけど僕は彼女と自然に接したかつたんだ。例えばどこかのスタジオの前で待ち伏せしてプレゼントを渡す事なんかはしたく無かつたし、突然住んでいる所に押しかけて花束を渡す様な事もしたく無かつた。確かに僕の中の彼女はいつだつて輝いていたよ。けれどそれは僕の中だけであり、完全な一方的なモノなんだ。ブラウン管はブラウン管であり、虫眼鏡や窓ガラスではない。こちらから向こうは良く見えるけれど、向こうからこちらは何も見えやしないのだ。だから例えブラウン管の前で彼女の為に何かをしてあげたとしても、例え頑張れつて応援してあげたとしてもそれはそれだけのモノであり、ブラウン管の向こうの彼女には何も見えていないし、何も知らない。ましてや僕がこの世の中に存在している事すらもね。それは僕が一番理解している事だつた。そして確かに僕の好きになつたのは、女優松井夏子だつたが、好きになつたきっかけはどうであれ、松井夏子がたまたま女優だつただけで、僕は女優を好きになつた訳では無いとそう思いつたかつたし、そう信じていた。きっとそれは例えば街の何処かで僕らがすれ違つただけだとしても、例えば同じクラスで一番遠い席に座つただけだとしても、僕はきっと彼女に恋をしていたらう。ただそれがたまたまブラウン管越しだつただけの事で、ただそれだけの事なんだと。だから僕は自然に接したかつたんだ。出来る事なら彼女を遊園地に誘つて色々な話をしたり、時には海辺を歩きながら僕の冗談で彼女をおもいっきり笑わせたり、そして時には僕の部屋で一晩中彼女の悩みを聞いてあげたかつた。そうやつて少しずつ少しずつお互いのペースで僕は彼女を理解したかつた。そうして僕の事も理解してもらいたかつた。出来る事なら。けれどさっきも言つた様に、今僕と彼女は生きている世界が違う。僕がどんなに奇麗事を言つた所で、僕が彼女を理解するという事は、僕だけの一方的な詮索になってしまうんだ。そしてそれは少なからず僕を傷付けていた。だから僕は出来るだけメジャーな雑誌から彼女を捜すようにしていた。例えばコンビニエンスストアなんかで良く目にしそうな雑誌をね。それが僕の心の傷を少しでも癒すかどうかはわからない。しかしそれが僕の彼女との接し方で、それが僕のせめてもの彼女に対する礼儀の様なモノだつた。

きっとこんなやり方じゃ一生かかつても彼女の好きな人のタイプを聞き出す事なんて出来やしないだらう。けれどそれならそれでも良かつた。だつて人生は永いものだから焦る事は無いし、僕は僕のペースで歩けばいい事なんだ。そのうち彼女は僕の知らない人と、永遠の愛を交わし、そして僕は彼女の事は忘れて違ふ人と恋に落ちるかもしれないし、もしかすると本当に80歳になつて、やつと彼女の好み男性のタイプがわかつて喜んでいるかもしれない。ある意味それはそれでかっこいい生き方かもしれない。坂井和幸。一生涯、方想いの一人の女性を愛し続けた男つてね。そしたら自分の為に自叙伝でも書いて、未だまで言い伝えるんだ。勿論題名は恋愛馬鹿一代つてね。そして先祖の和幸殿は、永遠の愛

を全(まっとう)された凄い御方だったってね。けれど良く考えれば、これは無理な話なんだ。なんせ一生方想いの人が一体どうやって子供を作れると言うんだ。そりゃ21世紀にでもなれば、結婚しなくても子供を生める様になるかもしれないよ。けれどもし世の中がそんな事になったとしても、僕はきっとそんな作り方はしないだろうしね。まあ何はともあれ人生は永いんだ、一生掛けて彼女を少しずつ理解したって構わない。とにかく今僕にわかっている事は、誰もが幸せな未来を手にしたがっている事。そしてその誰もがその幸せな未来の手の入れ方がわからずに、不安になったり、ドキドキしたり、苛立ったりしているだけなんだ。誰も不幸になりたい人はいないんだ。だから誰もが必死になって、自分のやり方で幸せを手に入れようとしている。中には強引なやり方をする者もいるだろう、そしてただひたすら待ち続ける者もいるだろう。それぞれみんなやり方は違うにしろ、目指す所は一つなのさ、きっと。そしてそれは僕とて例外では無い。ただ僕は強引なやり方も、何もしないで待ち続ける事も出来ない。僕には僕のやり方があり、僕の彼女に対しての接し方がある。それが僕の言う自然体だ。一言で言えば~LET IT BE~なすがままに。格好付ける事もない。着飾る必要もない。つっぱる必要だってない。僕が僕でいられる事が大切であり。そして僕が僕であり続けていけば、きっと何かは変わるだろう。僕はドラマの主人公では無いから、素敵なハッピーエンドは迎えられないかもしれない。けれど答えは出せる。そして何かは変わる。だから僕は後悔する様な事はしなくなかった。僕が嫌だと思ふ事は彼女にもしたくなかった。何処までが良くて何処までが駄目なのかは良くわからなかったが、何が嫌なのかはわかる。だから僕は何もかも知りたいとは思わない。僕が知りたかったのは彼女が自分の意思で言った言葉だけ。それは良く雑誌なんかに掲載しているインタビューであり、フォーカスや噂ではない。メジャーな雑誌に掲載している事が本当の真実かどうかはわからない。けれどワイドショーまがいの下らない週刊誌や、下らないスポーツ新聞よりはましの様な気がした。そして僕がもっぱら読んでいたのは幾つかのテレビガイドだった。少なくともこの手の雑誌は余り人の悪口や過大評価をしない様に見えた。実際書いてある内容も、テレビ欄や俳優のインタビューやドラマの内容位で、誰と誰が交際しているとか、どのカップルが破局したとか、誰が借金したとかと言うどうでもいい記事はなかった。そして僕が彼女を雑誌で探す様になって幾つかわかった事があった。まず一つはこんなに世の中には雑誌があるのかと言う事だった。元々余り雑誌を読む事が無かった僕は、精々10冊か20冊位のもんだろうと思って、ちょっと大きめの本屋に寄ってみたんだ。そして雑誌コーナーの前に立った僕はあぜんとした。そこにあるのは10や20どころではなく、まるで現代の情報化社会やマルチメディア時代を象徴するかの様に、ありとあらゆる種類の雑誌が辺り一面を覆いつくしていた。その数はざっと100はあるだろう、アンアン、ノンノ、ジュノン、ポパイ、ホットドッグを始め、ぴあ、HANAKO、TOKYOWALKER、MONTHLYWALKER、MEN'S WALKERは勿論。明星、セブンティーン、FMステーション、平凡パンチ、そしてザ・テレビジョン、TVガイド、TVピブル、テレビキッズ、TVLIFE、・・・etc。一体いつからこんなに雑誌が増えたんだろう。少なくとも僕が中学校に通っていた頃には、こんなに雑誌は無かったような気がする。それとも僕がただ知らなかっただけなのだろうか。そもそも僕が雑誌を手にする事なんて、美容院や定食屋やで待っている間や、好きな音楽や映画や車の雑誌を時々買って読むぐらいのものなのだから知らなかったのも



当然なのかもしれない。しかしその雑誌の山は僕が知らなかったと言うだけで、確かにそこには存在していた。そしてその殆どの雑誌の表紙には、僕の知らない可愛らしい女の子や、僕の知らない二枚目の男が、まるでマニュアルから切り取った様な個性の無い作り笑いをして写っていた。正直言ってその雑誌の山を初めて見た時は一体何処をどう読めばわからなかった。勿論全部なんて読めやしないし、読む気も起こらなかった。そしてこれだけの雑誌の山が在るにもかかわらず、松井夏子が表紙に写っている物がたったの一つも無かった。僕が彼女を雑誌で探す様になってわかったもう一つの事はこれだった。とにかくどの雑誌を開いても松井夏子のインタビューは載ってはいない。それ所か記事すら載ってはいなかった。何故なんだろう。確かに彼女は主演じゃなかったよ、けれど彼女の役はそれに匹敵するくらい重要な役だったし、それにドラマだって視聴率20%を超える大成功に終わったはずじゃないか。僕はそもそも視聴率の事は良くわからなかったけれど、20%を超える事は凄い事だって何かの雑誌に書いてあったし、他の俳優は堂々と表紙を飾ったり、テレビ番組のゲストに呼ばれたりしていたのに、何故か彼女の事は殆ど載っていなかった。正直言って僕にはわからなかった。何故彼女がドラマ以外の雑誌やテレビ番組に出ないのか。だって今の日本の芸能人の殆どはマルチタレントと呼ばれていて、一方でドラマに出ているかと思えば、次の日には違うテレビ番組の司会をしていたり、歌手として売り出していたかと思ったら、気が付けばコントが何かに出ていたりとか、一人で二役三役こなすのがなんだか当り前の様な気がしていたから。けれど彼女は違った。その理由が彼女がマルチタレントじゃ無く、彼女自信が仕事を選んでいるという事なのか、それともそれはただ余り他のテレビ番組が彼女を必要としていないだけなのかどうか僕にはわからなかった。けれど僕は前者の、彼女がマルチタレントじゃ無い事を信じたかった。何故って？それは何故なら僕は正直言って余りマルチタレントと言う者が好きではなかったから。そりゃ確かに何でもうまくこなすタレントもいるよ、けれどそれはほんの一握りの人間であって、それ以外の殆どはなんだか自分の安売りと言うか、余り方向性が無いと言うか、とにかく何となく中途半端の様に僕には見えたんだ。もし自分ならきっと俳優なら俳優だけで本当に辿り着く所まで行って、人の心に残る演技をして見たいと思うだろうし、歌なら歌のその本当の意味を見つけて人の心に響く歌を歌いたいと思うだろうと思っていたから。勿論それはただ僕がそう思っただけの事で、ただたんに僕が不器用だから何もかも器用にこなす事が出来ないだけの事かもしれない。そしてそのマルチタレントの本当の目標は良き俳優や歌手ではなく、良きエンターティナーもしくは素晴らしいマルチタレントなのかもしれない。けれどやはり役者一本で演技している人や歌一本で歌っている人の方が僕の心には何かを感じる事が出来たし、考え方にも共感出来た。勿論僕は俳優でも歌手でもないから役作りや歌作りの事はわからない。けれどその何かに打ち込む姿勢や生き方や価値観に本当に共感出来たんだ。きつこう言う考え方の人なら僕の事も理解出来るだろうし分かり合えるだろうって。正直言って松井夏子が何を見てどの様に感じてどう言う風な価値観を持っているのか僕にはわからないし、果たして僕は本当に彼女を理解出来るのか、そして僕の価値観が彼女の価値観と同じなのかどうか、今の僕にはわかる術が無かった。ただ今僕にハッキリわかる事は、彼女は今風のアイドルとは違うと言う事と、そして僕はそんな彼女が気になっていると言う事だけだった。そしてそんな気になる彼女に対する僕の接し方は、そんな気が遠くなるような接し方だった。けれど本当に少しではあった

にしる、彼女はその所々に僕の前に現れた。

彼女の趣味は音楽観賞と映画鑑賞だった。僕もそれには同意できた。けれどそれは多分誰もが同意出来る事で、僕だけが同意出来るものじゃなかった。あんまり音楽が嫌いだとか映画を見るのも嫌と言う人を聞いた事が無いからね。けれど僕は人並みに音楽や映画が好きだった。そして彼女はある雑誌でこんな事も言っていた。ミッキーマウスが大好きだと。

ミッキーマウスか。僕は正直この事に同意できるか分からなかった。僕は確かにルイス・キャロルの作品や、マーク・トウェインの作品なんかは割と好きだった。それに東京ディズニーランドにも10回以上行ったこともあるし、これからも行きたいと思っただけ。けれどお前はミッキーが好きか？と聞かれると、俺はミッキーが大好きだ！とは言えないような気がした。確かにミッキーマウスやドナルドダックなんかは好きだけれど、そんなに意識したこともあまりない。部屋にだって幾つかのミッキーやドナルドのキャラクターが入ったグッズはあったが、そんなに目立ってもしなかった。僕は正直わからなかった。好きだと言われれば好きのような気もするし、そんなに好きじゃないだろうと言われればそんな気もする。ただハッキリわかっていることは。僕は今まで小さな子供や女の子にプレゼントするときには、ディズニーの縫い包み関係が多かったという事だけだった。そして僕は高校三年生のクリスマスイブに、ある女の子にいそがしウサギの縫い包みをプレゼントした事を思い出した。

その子の名は村上あずさと言い、高校一年生の時からの知り合いだった。あずさは見た目はフランス人形の様で、いそがしウサギを送ったからと言う訳じゃ無いけれど、不思議の国のアリスに良く似ていた。けれど僕は高校三年のある時期まで全くと言いつつ、その子に恋心なんか抱いてはいなかったんだ。なのに何故僕がその子にそんなものを送ったのかというと、始まりは今でも良く分からないんだけど、あるとき冗談で「やっぱりお前にしか俺を幸せにする事は出来ないね。きっとお前と俺は付き合うのが一番いいんだなあ」なんて事を言った事があったんだ。勿論冗談でね。もともと僕とあずさはいろいろ冗談なんかを言い合える仲だったし、その事で特にこれだと言う事もなく。「そうね、それが一番ね」と呆れて言っていた。初めは全て冗談から始まった事だった。けれどそんな事を繰り返しているうちにいつしか僕は、その気の知れた関係に安らぎ見出していたのかもしれない。その何の気兼ねもない二人の関係に、たまたま幸せが見えただけなのかもしれない。今となってはそれが何だったのか分からない。けれど僕は気が付いた時にはその冗談から始まった恋に落ちていた。

僕は何度かその事をさりげなくあずさに伝えようとしてみた。けれど何度その事を伝えようとしても、彼女にはいつもの冗談にしか受け止めてもらえなかった。それは仕方ない事なのかもしれない。友達の期間が長すぎたせいもあるし、冗談を言い過ぎたせいもある。僕も今更あんまり真面目に言う事も出来なかったし、ひょっとしてそれ本気？と聞かれれば、んなわけないじゃんと言ってしまおう。結局僕は本当の事を言えずに冬休みを迎えてしまったんだ。その時の僕には分かっていた。多分相手の顔を見ると気心が知れているぶん冗談にしてしまう事を。けれどそんな事をいつまでも続ける訳には行かない。僕はきちんと自分の気持ちを伝えなければいけなかった。そして僕が思い付いたのは、12月24

日に彼女にプレゼントと一緒に真面目に告白する事だった。けれど実はそれを思い付いたのは12月23日の夜の事。もう日がない。とりあえず彼女が欲しいと前に聞いた事があったのは、いそがしウサギの大きな縫い包みだった。僕はその日はとにかく自分の言いたい事を整理する事にした。勿論僕の伝えたい事はたった一つだった。そして当日僕はバイトで貯めたお金を全部握り締め、色々なデパートを歩き回った。

その日は朝からの雨が降っていて、久しぶりのホワイトクリスマスに成るかも知れないと天気予報も言っていた。僕としてもこれだけ御膳が揃えばあとは僕をアリスの所まで連れていってくれる、いそがしウサギが居れば言う事は無かった。けれどいそがしウサギはマイナーなのだろうか、どのデパート、どのデパートも有るのはミッキーやミニーマウスの縫い包みばかりで、いそがしウサギのいの字も見当らなかつた。店員に聞いても、いそがしウサギですか？ それはすみませんうちには置いてないんですよ、と何処でも決まり切ったマニュアルの様な台詞が返ってきた。僕は時計の針を見た。もう時計の針は4時を大きく回っていた。僕は仕方なく何人かの女友達の所に電話して、いそがしウサギを売っている店を聞いてみた。

「えっなに。いそがしウサギ？ どこかって言われてもね。あんまり見掛けないからね。まあ絶対に有るとしたらディズニーランドじゃない」

結局何人かに電話して分かった事は、みんなあまりいそがしウサギの縫い包みをこの辺で見たことが無い事と、ディズニーランドになら確実に有ると言う事だった。僕はまた時計を見た。もう時計の針は5時を回っていた。迷っている暇は無い。僕は気が付くとディズニーランドに向かう電車に乗っていた。そして僕がディズニーランドに付いた時には時計はもう7時半に成っていた。ディズニーランドは久しぶりのホワイトクリスマスに成るかもしれない事もあり、物凄い人の数だった。たぶんその99.9%はカップルだろう。そして残りの0.1%が男一人で来ている僕なのかもしれない。とにかく何処をどう見てもカップルしか見えなかつた。僕はとりあえず入口付近にあるお土産屋さんを見た。とにかく僕の今日の目的はディズニーランドに来る事ではなく、もっと先にあったから早くいそがしウサギを買って帰るつもりだった。けれど入口付近のお土産屋にはデパート同様、いそがしウサギのいの字も無かつた。やはり中に入るしか無い。僕はそう思うや否や入場券を一枚買った。

受付の女性はしつこい位に、本当に入場券だけでいいのかと聞いてきた。それはそうだろう。だって幾らも足さないで一日パスポートが買えるんだから。けれどさっきも言った様に、僕の目的は乗り物に乗りに来たわけじゃなくて、いそがしウサギだけを買いにきたのだ。そして本当の目的は、もっともっと先の方にあつたのだから。結局受付の女性も僕のいや本当にそれだけでいいんです。と言う言葉を聞いて納得して奥の方から、きっと僕の様な奇つな男が居なかつたら、一生日の目を見る事は無かつたかもしれない券を僕に渡してくれた。そして僕はきつと残りの0.1%の僕の為だけに存在している、今の僕と同じくらい孤独なただの入場券を握り締めゲートを潜り抜けた。

ディズニーランドの中はクリスマスイブという事もあつて、すごい盛り上がりだつた。様々なイルミネーションに飾られた建物や街路樹。そこには僕の知っている全ての光や色を集めたんじゃないかと思わせる位の、きらびやかな世界が広がっていた。

良く見るとそこは僕にとって本当に不思議の国だつた。そしてそこには本当に喋る動物た

ちや歌を歌う花たちが居た。僕はこの不思議な国に一体何をしに来たのだろう。そうだ、僕はいそがしウサギを捜しに来たんだ。僕はいそがしウサギを捜す為にこの不思議の国まで来たんだ。そして僕は辺りを見渡してみた。

そこは池の辺〔ほとり〕で、僕はその辺〔ほとり〕にある一本の木の横に立っていた。そしてその目の前に広がる池には、1匹の（一人と言った方がいいのかもしれない）大きな声で笑っているアヒルが居た。僕はとりあえずその笑うアヒルに聞いてみた。

「ねえ、ねえ、アヒルさん。君はこの辺でいそがしウサギを見た事はないかい？」

そして僕のその問いに、笑うアヒルは言った。

「アハハハ、イソガシウサギ？」

「そう、いそがしウサギ。ほら丸い眼鏡を掛けて、大きな懐中時計を持っているウサギ」僕は出来るだけ分かりやすく説明した。けれど「アハハハ、ソナノシラネエヨ。アハハハ」とアヒルは笑いながら言った。一体このアヒルは何がそんなに楽しいのだろう。けれどこの世界ではそれが当たり前で、僕のように何かをする時に理由を求める方が異常なのかもしれない。

「なら何処かに知ってそんな人は居ないかな？」

「アハハハ、オメエハバカナノカ？ ウサギノコトナラ、モリニイケバイイジャネエカ。オメエハソナノコトモワカンネエノカ？ アハハハ」

良く笑う口の悪いアヒルは森に行けばいいと言った。正直普通の僕ならこんな言い方をされればむっと来るだろう。けれどここは僕の世界では無い。ここは不思議の国であって、良く笑うアヒルの世界なのだ。きっとこの世界ではアヒルは良く笑って口が悪いのが当り前の事なんだ。僕はアヒルに森への行き方を聞いて別れた。アヒルは相変わらず口が悪かったが、この世界ではそんなアヒルも可愛らしく見えた。

森は思ったより近かった。けれどそれは僕が森に近付いていったのか、それとも森が僕に近付いて来たのかは分からなかった。けれど気が付いた時には僕は森に居た。森の中はさっきまでのメルヘンチックな雰囲気は無く、大きな木が大きな口と大きな目で僕をにらみ付けていた。そこには歌う花たちも居なければ、良く笑うアヒルも居ない。そこにあるのは大きな木と大きな口と大きな目だけだった。僕は少し心細く成りながらその森の中の一本道を歩いた。振り替えるとそこにはすでに帰り道など存在しなかった。そこにはただ暗闇だけが存在していた。もはや僕は前に進むことしか残されていなかった。けれどそれは今始まった事じゃないし、これで終わると言うものでも無かった。とにかく前に進むしかない。今までがそうであった様に。

僕はとにかく歩いた。それは前に進む事しか残されていなかったからじゃ無く、僕の目的はまだ先にあったから。

それからどれくらい歩いたのだろう。僕はふとした時ある事に気が付いた。それは僕はさっきから同じ所を歩いているんじゃないかと言う事だった。それは具体的に何を見てそう思ったのか分からない。けれどその恐そうな木は、良く見ると一歩一本違っていた。けれど僕はさっきから全く同じ木を、同じ間隔で何度も見ていたんだ。その木は出来損いなのかもしれない。他の怖い木と違って少し目尻が下がっていたんだ。それにその木はどちらかと言うと怒っていると言うより、困っていると言う方が似合っていた。だからこん

な場所ではその木は必要以上に目立っていたんだ。僕は念のため今度は歩数を数えながら歩く事にした。・・・342・343・344・345。調度345歩目で僕はまた目尻の下がった木の所に出た。そして僕はまた1から数えて歩き出した。1・2・3・4・・・・342・343・344・345。やっぱりそうだった。やはり僕は調度345歩目で目尻の下がった木の所に辿り着いた。勿論この不思議な国ではこんな数字が果たして意味を持つのかは分からない。そもそもこの国では数字なんてモノは無いのかもしれない。けれど確かにいそがしウサギは時計を持っていた。という事はやはり数字や時間というモノはあるのだろう。僕は腕時計に目をやった。けれど僕の腕時計はあのゲートを潜った8時前で止まっていた。僕は仕方なく腕時計を腕から外してポケットにしまった。もしかしたら僕はあの良く笑うアヒルにまんまと騙されたのかも知れない。今頃僕の事を想像してあの大きな声で、大笑いをしているのかも知れない。けれど僕としてはもはやどうする事も出来ない。僕は仕方なくその恐そうな木々に話しかけた。勿論目尻の下がった木にね。

「すみません。ここは一体何処なんですか？」

「・・・」

返事は無かった。もしかしたらそれは生きていないのかも知れない。はたまたただ眠っているだけなのかもしれない。正直僕には分からなかった。けれど僕は眠っているだけなんだと自分に言い聞かせ、さらに大きな声で言った。

「あの～ すみません！ここは何処ですか？」

さすがに大きな声だったのだろう。しばらくするとだるそうな声で「ダレダ。オレサマノネムリヲサマタゲルヤツハ」と言い、その大きな枝を天高く振り上げ大きな伸びをした。僕は選択を誤ったのかもしれない。困った顔をしていたなんて名ばかりで、その太くて大きな声、そしてその大きな体。僕を恐がらせるには十分過ぎた。けれど起こしてしまったものはしょうがない、僕はすぐ謝って事情を説明した。

「トイウコトハ、オマエハソノイソガシウサギヲサガシテ、コノマヨイノモリマデキタトイウノカ？」

「どうもそうみたいです」

少なくとも僕にはそう答えるしか無かった。

「オマエハコノマヨイノモリガ、ドンナトコロカシッテイルノカ？」

僕は知らなかった。迷いの森が一体どんな所なのかも知らなければ、そんな森が存在していたことも。

「いや、知らない。知らないしそもそも僕はさっきも言った様に、ただいそがしウサギを捜しに来ただけで、迷いの森に来たかった訳じゃない。出来れば僕としては早くこの森を抜けて、いそがしウサギを見つけて帰りたいくらいなんだ」

けれど僕のそんな気持ちはどうやらこの森では関係無い事の様だった。

「オマエガカエリタイキモチハワカル。ケレドコノマヨイノモリニハイッタイジョウ、カンタンニダスワケニハイカナイ」

なら一体僕はどうすればこの森から出る事が出来るのだろう。

「なら教えてくれないか。どうすればこの森から出れるかを」

僕はどうすればいいか聞いてみた。

「ヨシ，ナラオシエテヤロウ。イイカ，チャンスハイッカイダケダ。ジブンノナカノマヨイヲ，スベテナクシテコノクチノナカニトビコムダ。イイカ，チャンスハイッカイダケダゾ。モシソレニシッパイシタラ，モウニドトコノバショカラデラレナクナル。イイカ，ワカッタカ。チャンスハイッカイダ」と目尻の下がった（今はもうそんな面影は残ってはいなかったけれど）木は言った。迷いを全て捨てる。そしてチャンスはたった一回だと。果たして僕に迷いなんかあるのだろうか？ もしかしたらあるのかもしれない。けれど要するに迷いを捨てて飛び込めばいいだけなんだ。やり方は簡単な事さ。僕は何も迷わない。何も迷う事は無い。僕は何も迷ってはいない。そう自分に言い聞かせ，その真っ暗な大きな口の中に飛び込んだ。今思えばこの頃の僕は迷いだけだったのかもしれない。迷っていなかった事なんて何一つ無かったのかもしれない。けれど迷いの森の木が言った様にチャンスはたった一回しか無い。その時に本当に何の迷いも無く自分の気持ちが言えるかどうかで，きっと全てはかかっているのかもしれない。この時僕は結局そのたった一度しか無いチャンスをもものには出来なかったのだろう。それはたった一つの迷いによって。

そしてその迷いの森の木の大きな口を潜り抜けた僕に，いそがしウサギは「キミカ，サッキカラワシヨサガシテイタノハ」と言った。そこはもう迷いの森ではなかった。「そうなんだ。僕が君をずっと捜していたんだ」と昔絵本で見た時と何一つ変わりの無いいそがしウサギに僕は言った。

「ソレデ，ワシニナンノヨウジャ。トニカクワシハイソガシインジャ。ヨウケンハミジカク，ヨウリョウヨクハナシテクレナイカ」

いそがしウサギはやっぱりこの世界でもいそがしそうにしていた。僕は短く，要領良く言った。「君を連れて帰りたいんだ」と。

いそがしウサギはそんな僕の突拍子もない言葉に驚いていた。

「ワシヨカ？ ソレハムリジャ。ワシハイソガシクテソナヒマハナインジャ。コレカライカナクテハイケナイトコロモアルカラノウ」

そう言っていそがしウサギは懐中時計を見た。

「オヤ，モウコンナジカンカ。コリヤタイヘンダ。ソレジャワシハイクゾ，モウジカンガナインジャ。ア～アイソガシ，イソガシ」

僕は行こうとするいそがしウサギに「それじゃ，僕を連れて行って欲しいんだ。アリスの所に」と言い掛けたが，けれどいそがしウサギはそんな僕の言い掛けた言葉なんて聞かずに，その大きな懐中時計を見ながら走り出していた。けれど僕としてもここで取り残される訳にはいかない。僕はその忙しそうに走って行くいそがしウサギの後を追いかけた。いそがしウサギは柵の隙間を抜けて，屏の下を潜り，テーブルの足の間を器用に抜けて行った。僕は体が大きかったのでその数々の難関を乗り越えるのは大変だった。けれどこんな所に残される訳には行かない。とにかく見失わない様に必死についていった。そしていそがしウサギはある壁の下に開いた，大きな穴の中に入っていった。その穴は大きいと言っても，それは身長30cm位のいそがしウサギにとっての事であって，身長178cmの僕にとってでは無い。けれど僕はその大きな体を出るだけ小さくしてその穴の中に潜り込んだ。その先に何があるかわからないままに・・・。

僕がケーキといそがしウサギの縫い包みをバイクの後ろに乗せて，彼女の家の前に着い

たのは、時計の針がもう12時に限りなく近くなった頃だった。僕はあらかじめ11時過に電話を掛けるから受話機の前に居てくれと言っておいた。そして僕は近くの公衆電話から彼女の家に電話を掛けた。呼び出し音は1コールも鳴らないうちにその役目を静かに終えた。

「はい村上です」その声は当然あずさの声だった。

「もしも俺だけど、寝てた？」

「何言ってるの。起きてたに決まってるじゃない。和幸が電話するから起きててくれよって言ったんじゃないの」

確かにあずさの言う通りだった。そして「いや、実は渡したいものがあったって今家の前まで来たんだけど、出れる？」と言う僕の問いに「ちょっとだったら出れるけれど、もう家の人寝てるからあんまり大きな声では話せないからね」と言ってあずさは電話を切った。そしてそれから5分後に、あずさはカーディガンを羽織って寒そうに出てきながら「なんだこの雨、雪に変わんなかったのね」とちょっぴり残念そうに言った。確かに雨は雨のまま雪に変わってはいなかった。けれど今の僕にとってはもう雪の演出は必要無かった。だって全ては揃っていたんだ。前の日に徹夜で書いたシナリオ。そして女役のあずさと男役の僕。大きなバラの花束の代わりに、いそがしウサギの縫い包みだってあった。何もかもが僕が描いた通りだった。後は僕の名俳優ばりの演技力があればそれで良かった。そうすれば18の僕が必死に描いた幸せと言うハッピーエンドがそこにはあるはずだった。

「う～寒い。こんな日にオートバイなんて乗って寒くないの？」と少し震えながらあずさは言った。きっとそこに友達と言う枠が無ければ、僕はその震える小さな体を暖めてあげる事も出来たのかもしれない。けれどその二人の間に存在していた枠は、僕が思っていた以上に頑丈な枠だった。

「それで何なのその渡したいものって？」

「実は、ジャ～ン。いそがしウサギの縫い包みとケーキ」

僕はそう言って、背中からはみ出して顔を覗かしていた大きないそがしウサギの縫い包みとケーキを差し出した。

「えっ。なに。これを私に」とあずさは突然のサンタクロースの訪問に、驚いた顔で言った。

「ああ。お前まえにいそがしウサギの縫い包み欲しいって言ってたじゃん。だからプレゼントしてやるよ」

「えっ、本当に。ありがとう。でもビックリしちゃったよ。急にプレゼントなんてされて。でもどうしちゃったの急に？」

彼女は本当に驚いていた。けれどそれはそうだろ。今日来る事も勿論、ましてやプレゼントされるなんて想像すら出来やしなかったはずだ。

「いやあ、どうせ空しいクリスマスでも過ごしてんじゃ無いかと思って、たまにはサンタクロースにでも成ってやろうかと思ってさ」と僕は言った。

まあ実際彼女が空しいと言う事は、彼女を好きな僕にとってもそっくりそのまま言える事だった。そして彼女もそんな僕の空しさを指摘して来た。

「すみませんねえ。どうせ私は空しいクリスマス送りましたよ。けどそう言う和幸だってこんな所に居るって事は、随分空しいクリスマスだったんじゃないの？」

「ば、ばか。俺は違うよ。俺はもう最高のクリスマスだったよ。今さっきだって、帰らないでって言う女の子を置いて泣く泣く来たんだぜ」

「へえ、そうなんだ。じゃあその子と居てあげれば良かったじゃん。わざわざ空しい私の所なんて来なくて」

「そりゃあ、そうかもしれないけれど、それじゃ不公平じゃん。俺だけ楽しくてお前だけ空しいんじゃない」

「いつもいつもすみませんね。気使ってもらっちゃって」

「本当そうだよ。早く一人前に成ってもらわなきゃ、こっちの身がもたないよ」

勿論僕の言った事は冗談だった。それは彼女も分かっている。そしてそんな僕の冗談に彼女も冗談を投げ返してきただけなんだ。そしてそれは普段と何一つ変わらない僕らのやりとりだった。けれどそれが普段と何一つ変わらなければ変わらない程、僕はその先にある真実にまた冗談を重ねようとしてしまう。けれど今日は違うはずだった。僕にはどんな 트렌ディードラマにも匹敵する位のシナリオがある。そして素晴らしいハッピーエンドが僕らを待っているはずなんだ。きっと。

けれど現実と言う筋書きの無いドラマは、いつも僕らが夢見る 트렌ディードラマの様にいつだって上手く行くとは限らないものだった。それは笑うシーンに笑顔が上手く作れない事もあれば、泣くシーンに涙が流れない事もある。ましてや友達としての思い出が多すぎた僕らには、ラブシーンに告白出来ない事だって限りなくあった。

僕らはとても短すぎて、そして果てしなく長く感じた数分間を、いつもと代わり無い冗談で埋めていった。その中にある真実を切り出せないままに。

結局僕はある迷いの森の目尻が下がった木が言っていた、たった一回のチャンスをものには出来なかった。それは今思えば失敗するのが恐かったのかもしれない。そしてそれによって僕らが築き上げた友達という関係が崩れることが恐かったのかもしれない。きっと人と言うのは何かを手に入れる為には、何かを失う覚悟をしなければいけないのかもしれない。それはとても厳しい選択なのかもしれないね。けれど人はその両方を手には出来ないんだ。こっちが駄目ならそっちと言うわけには。きっとこの時の僕は迷っていたのだろう。もし駄目だったらどうしようって。勿論それはそこに迷いが無ければ上手く行くと言う保証は無い。だから人は迷う。けれど一つだけハッキリ言える事は、何かを手に入れる為には、何かを失う覚悟しなければいけない事があると言う事なんだ。それはすごく勇気のいる事だと思うよ。誰だって失うのは怖いから。だけどきっとそれを乗り越えて手に出来た幸せだけが本物に成るんだと思う。けれどこの頃の傷付きやすい十代の僕には、そんな勇気がこの世の中に存在していた事すら気付く事は無かった。

結局いそがしウサギは僕をアリスの所には連れて行ってはくれなかったよ。けれどそれは僕がある迷いの森を抜けた時から決まっていたのかもしれない。はたまたもっと昔の、僕とあずさが友情と言う言葉を口にした時から決まっていたのかもしれない。

今となってはそれはわからない。けれど今言える事は、僕はこの時何も失わなかった代わりにその先にも進む事は出来なかったと言う事だ。確かにその先が僕らが描いている様な幸せがあるかは分からなし、手に入れるモノより失うモノの方が多いかもしれない。けれどその先に進まなければ何も変わらないし、成長できないんだろう。きっと人は何かを失わない様にかたくなに守って行く事も必要だと思う。けれどそんな時だって上を向いて



いなければ、気が付かないうちに少しずつ何かを無くしている様な気がするんだ。だから僕らは上を向いて歩いて行かなければならい。きっと僕はこの先何かに迷う事もあるかもしれない。そして何かを失う事もあるかもしれない。けれど僕は上を向いて歩くよ。だって僕が欲しい幸せは、きっとずっと上の方にあるのだから。

・・・ねえ、ミッキ - マウス。君は昔ファンタジアと言う世界の中で、愛と正義と勇気が奏でる魔法と言う名の奇跡を僕らに見せてくれたね。それを見た僕は凄く暖かい気持ちに成った事を覚えています。

ねえミッキ - 。君は知ってたかい？ 君の事が好きだって言う女の子がいるんだよ。

僕はその女の子がいつまでもずっと君の事を好きでいてくれればいいなあと思うんだ。そして僕もそんな彼女を、いつまでもずっと好きでいられたらいいなあと思うんだ。本当だよ。

本当に心からそう思うんだ・・・

～夢の中での僕達はお互いとても寂しい存在だった。

例えば彼女がどんなに寂しい想いをしていたとしても、時がくれば僕はそんな彼女を一人置き去りにして目が覚めてしまう。そしてそれは二人がとても楽しい気持ちでいたとしてもやはり時がくれば僕は何か憂鬱さの残る朝を迎えてしまうモノだった。

そしてある時彼女はうつむきながら呟いた。

「きっと世の中は不平等なんだね」と。

僕は彼女が呟いたその言葉の意味を理解してあげることが出来た。けれどそんな彼女に対して僕は何も答えてあげられる事が出来なかった。気の利いたセリフすら。

そんな彼女に僕がしてあげられた事は、精一杯の気持ちを込めて

いつまでも二人が離ればなれにならない様に小さな彼女の震える肩を抱いてあげてあげる事。  
ただそれだけだった・・・～

#### 第四章

##### 『過ぎ去った愛』

僕が初めて彼女と出会ってからかれこれ3年と言う月日が経った。そしてその間に変わったことは、夢見がちな少年だった僕にどこかの誰かが大人と言う意味のない肩書きを手渡したことと、彼女の呼び名が松井夏子からナッキーに変わったことだった。

ナッキーと言うのは僕と博之にしかわからない共通の彼女のあだ名だった。でも一体なぜこんな呼び名が付いたのかと言うと、いつまでも松井夏子じゃ呼びにくかったし、なんとなく仰々しい様な気がしていたんだ。けれどだからと言って夏子じゃ馴れ馴れしいし恥ずかしくすぎる。そこで僕と博之との間で思いついたのがナッキーと言うあだ名だった。夏子でナッキー。それは余りにも単純すぎるあだ名なのだろう。なんせ何のひねりも入っていないのだから。けれどそれはすごく当たり前のように僕らの中に飛び込んできたんだ。まるで始めからその言葉がこの世に存在していて、それがたまたま僕と博之の間で目を覚ましただけの様な。そしてそのナッキーと言うあだ名は僕にとって、松井夏子と言う一人の大女優をほん少し身近な、普通の女の子に変えてくれた。

僕にとってこの3年間はあつと言うまでもあり、とても長いものでもあった。

さっきも言ったように、僕にとっては傷つきやすい十代から大人になると言う、人生の中で一番大きな転換期を迎えたことになる。けれど本音を言えばそれは僕にとってそれ程大きな事ではなかったんだ。何故なら僕はどちらかと言えば、きっと人より早く自分と言うものを見付けてきたような気がしていたからだ。それはどう言う事かと言うと、例えば僕は責任や自覚を十代の時から自分で持ち続けていたんだ。勿論それは何か大きな事があったとしたら親のせいになってしまうかもしれない、けれどそれは下らない社会がそうしているだけで、僕個人としては物を盗んだり、人を傷つけたとしたならば裁かれるのは他の誰かではなく僕自身だけだと思っていたし、例えばニュースになる様な事をしたならば少年Sでは無く坂井和幸であるべきだと思っていたんだ。正直言って僕の十代は人に自慢の出来るようなモノでは無かったかもしれない。そこには意味の無い反抗もあれば、快楽に溺れた日々もあったかもしれない。けれど僕はその全てを自分の体で正面から受け止め、そしてその全てに僕は僕が出来る精一杯の誠意を込めて償いをしてきたつもりだった。僕はいつだって逃げ隠れもしたくなかったし、ましてや言い訳や他人や環境のせいにもしたくなかった。何故ならそれは全ては僕がした事であり、僕が弱すぎたせいなのだから。き

っと人と言うのは生まれながらにして弱い生き物だから、時には素直になれずに逆らい誰かを傷つけてしまう事もあると思う。そして時には過ちを犯してしまうこともあるだろう。けれど僕は本当にその人の強さや勇気はきっとその後だと思う。自分がした事にどうやって立ち向かえるかだと思うんだ。きっとそれは難しい事だと思うよ。黙っていたり、逃げ回ってればいつかは時が解決してくれるかもしれない。けれどきっとそれは答えではなく逃れだと思う。少なくとも僕はそう思ってきた。僕は高校生の頃学校が嫌いだった。分かり合えない教師達はいつだって停学、退学と言う権力の名の下で僕らの自由を奪い続けていたし、真剣に夢を見続けたとしても誰もが気が付かない所でその夢はすり替えられてしまう。例え真剣に何かを求めたとしても・・・。僕は高校生であるのならやるべき事はやったつもりだ。勉強や部活動もしたし学級委員長もした。掃除だってしたし学校の行事だって積極的に参加した。ただ僕はそれ以上に遣りたいことが多かっただけなんだ。そして僕はただ、たった一握りの自由が欲しかっただけなんだ。それは例え叶わなくてもいい、けれど精一杯夢を追いかけてみたかった。ただそれだけの事なのに、それすら学校と言う所は許さないこともある。一体学校そして校則って何だったのだろう。それは確かに生きていく為には何から何まで自由って訳には行かないし規則やルールはあるよ。けれどそれは、誰かが誰かを縛り付けるモノや自分が自分らしく生きられない事、そして夢や自由を奪うモノではない。けれど学校の中では十五、六歳の僕らはただ無力な存在で自分を主張する権利も無く、アルバイトで稼ぐ事も、異性と愛し合う事すら許されていない。ただ許されていることは、忠実、従順と言う言葉と、くだらない教科書の中身を押し込まれるだけの事で、気が付いたときには限りなくあった可能性は海の藻屑となって消えてしまう。これじゃ校則じゃなくて拘束じゃないか。僕は生きていく為のルールは当然守る。過ちを犯せば自分で償いも出来る歳だった。それなのに学校と言う名の場所の中ではいつだって僕らは無力な存在だったんだ。そしてただそれだけの場所。学校が僕は好きではなかった。けれど僕にとってもっと嫌な事は、その学校や権力から逃げる事だったんだ。だから僕はそんなイヤな高校でも三年間無遅刻、無欠席で学校に行き続けた。それは正直言って楽しい日々ばかりじゃなかった。僕は決まったルールを歩くことが上手く出来なかったから、分かり合えない教師との衝突も多かったし、その中には殴られた事もあれば、全校生徒の前で劣等生のレッテルを貼られたこともある。時には授業中に教師に今度やったら殺すと脅されたこともあったし、うんざりした日々もあれば、悲しくて涙がでそうな日々もあった。けれどそれでも僕は学校に行き続けた。そして胸を張り続けた。何も変わらなかつたかもしれないし、誰もわかってくれなかつたかもしれない。手に入れられるモノより失うモノの方が多かったかもしれないし、誰一人幸せに出来なかつたかもしれない。だけど僕は意味のない校則に逆らい続けた。そして暴力や退学を武器に権力を振り回す教師と戦い続けた。そしてそれは逆らうことや戦う事に意味があるのでは無く、自分が自分らしくいられる事に意味があることを僕は知っていた。だから僕は自分が悪ければ素直に謝る事もしたし、友達をかばって黙ってただ殴られた事もあった。勿論自分が悪くなければ謝らずに牙を向け続けた事もあった。要するに僕はこの頃にはわかっていたんだ、校則や法律には意味が無い事に。人が人として生きていく為には自分で理解していかなければいけないんだ。例えば今までもこの先も僕は自分の大切な人やモノを守る為には、法律を破る事もあるだろうし、例え法律で許されていることだとしてもそれが自分でいけないと思う事な

らば、僕はそれをする事は無いと思うし、もししてしまったのなら誰に言われなくてもきっと僕は謝るなり罪を償うだろう。正直言って僕のこの考え方はあの夢見がちで傷つきやすい十五、六歳の頃から変わっていないんだ。それに僕はきっと二十歳になっても三十になってもその頃の傷つく心を持ち続けて行くだろうし、夢も持ち続けるだろうから。だから今僕を大人と呼ぶのなら、きっと僕は社会が決めた年とは違うある時期に大人に成り、そして大人と呼ばれるように成った今、僕は少年でありつづけているのだろう。だから正直言って二十歳に成った誕生日、そして成人式と言うモノは僕にとっては特別な日ではなく、いつもと同じであり、何の変わりもないとある一日であった。そしてこの三年間の中で僕が変わったモノはもっと違った場所にあった。

まずそれはまだ恋とは呼べない憧れだった気持ちが、僕の中で確実に恋の一ページとして刻まれた事だった。正直言って三年前それは恋だったのだろうか。もしかするとそれは恋だったのかも知れない。けれど今思えば僕はそれを、どこことなく否定していたような気がしていた。要するに引け目を感じていたんだろう。これは普通じゃない、きっと自分は間違っているんじゃないかって。勿論その答えは三年と言う月日が経った今でも分からない。それはきっと一生わからないかもしれない。けれどその答えが正しいか間違っているかは別として、三年経った今はっきり言える事は、僕は彼女の事が好きだって事だった。

きっとおかしな事だろう。指さして笑い飛ばす人もいるのだろうし、もしかすると変態扱いされるかもしれないかもしれない。けれどそう思われても僕は誰も責める事は出来ない。何故なら始めは僕だってそう思っていたからだ。これじゃまるでアニメの主人公が好きなアニメオタクや、芸能人をねらうストーカーと一緒にないかってね。勿論それと僕の気持ちとは明らかに違う。けれど僕にはそれを証明できる術が無かった。だから僕はきっと自分を否定したり、自分をごまかそうとしたのだろう。僕は違う、これは違う、こんなじゃないってね。けれどこの三年間、本当に色々あり、そしてその中で僕はあることに気が付いたんだ。僕が僕である上で一番大切な事は何かって事にね。僕にとって彼女は全てでは無い、寝ても覚めても彼女の事が頭から離れられないわけでも無い。彼女が居なければ僕は生きて行けないと言う訳でもない。もし現実に彼女が僕の前に現れて「あなたの事、嫌いよ」と言われれば、僕は彼女の為に諦めることも出来るだろうよ。だけど僕は知っている。本当に辛い時に心を支えてくれるモノは、本当に自分が好きな人だって事を、そして今僕の心の奥にある一番大切なモノは彼女であり、そしてそれ自体は誤りでも過ちでも無く、胸を張れると言う事を。そしていつか過去を振り返った時に、今まで僕が恋した人達のように、彼女にもまた好きだった事に誇りを持てるだろう事に。そしてその事に気付かせてくれたのは、今まで僕が恋した人達であり、そしてこの三年間の間に僕の事を好きに成ってくれた人達だった。

僕は正直この三年間に色々な人達に声を掛けられた。時にはそれは「何で彼女つくらないの？」と言う疑問的な声であり、時にはそれは「良い人居ないんなら紹介してあげようか？」と言う心配的な声だった。僕は正直言っていつもこう言う事を言われると困ってしまっていた。一体なんて答えればいいんだ。「好きな人が居るんだ」とでも答えればきっと「誰、誰、誰？」のオンパレードが待っているだけの事だろう。勿論そこで僕が「僕の

好きな人は松井夏子」と答えたとしたらその「誰、誰、誰？」の観衆はまるで声を無くした雀の様に、僕の周りから一斉に飛び立って行ってしまおう。僕だけを置き去りにして。

でも一体何でなんだろう？ 僕らの友情はきっと偽り何かでも上辺だけなんかでもないはずなのに。けれどそれはどうしようも無い事なんだろう。もし仮に僕が友達に同じ事を相談されたとしたら、僕は果たして本当に心から素直に頑張れよって応援出来るのだろうか？ 正直言って僕にはわからない。今僕は同じ状況に立たされて居るから頑張れの一言ぐらいは掛けてやれるだろう。けれどそれは僕が同じ状況に居るからであり、もし違う立場なら僕は軽蔑まではしないにしろ、まともに話を聞いてあげられるかどうかは正直言ってわからない。けれどこれはどうしようも無いことであり、そしてそれは僕が彼女を好きに成り始めてから始まり、好きであり続けて行く限り永遠に続く問題でもあった。だから僕はそれはそれでしかたない事だと思っていた。それに人はどんな形であるにしろ夢や愛を追い求めて行く上で孤独を感じるモノなのだから。だから僕は友達に対しては「まあ色々だね」だとか「なかなかいい人居なくて」だとか「今はやりたい事が多くて恋愛どころじゃ無いよ」なんて少し憂鬱を感じながらもごまかして来たんだ。けれど友達に対してはそれでも良かった。信頼関係はあるにしろ僕が誰を好きになり僕がどんな恋愛をしようとも、それで誰かを傷つける事も無ければ誰も悲しむ事も無いのだから。だから友達に対してはそれでも良かった。友達に対してはね。けれど僕のことを心から好きだと言ってくれる人たちに僕は偽りを通したり、軽くあしらったりするわけには行かなかった。何故なら彼女たちは告白と言う、いわば心の中の一番大切なそして一番勇気のいる扉を僕の為に開いてくれたのだから。だから僕はそんな彼女たちに偽る訳にはいかない。軽くあしらってはいけない。僕も彼女たちが勇気を出して告白した様に、僕も勇気を持って告白しなければいけないんだ。僕には心から大切に思っている人がいるんだ。けれどその人は僕にとってとても遠い存在であり、今の僕なんか幾ら背伸びをしたところで手の届く人じゃないんだ。そしてその人の名は、そう松井夏子って言うのさってね。

けれど結局のところ僕は、僕の事を好きだって入ってくれた四人の中の三人まではそこまで本当の事が言えなかった。理由付けすればそこまで言う必要が無かったからなんて事も言えるだろう。結果「ごめん、好きな人がいるから」で済んだのだから。けれど本当は違ったんだ。本当はただ僕に勇気が無かっただけなんだ。幾ら偉そうな事を言ったとしても、幾ら強がっていたとしても、結局のところ僕は恐かったんだろう。こんなに僕の事を好きだって言ってくれた人達の、その素敵な瞳で僕を見つめてくれた目が、僕の口にするたった一言でまるで変態でも見る目に変わってしまう事が。だから僕はそれ以上の事が言えなかったんだ。勿論たいがい聞かれたよ。

「一体どんな人なの？ 坂井君の好きな人って」

だから僕は答えるんだ。

「すごく心が暖かくていつも僕に勇気をくれる、まるで天使の様な人なんだ」

「へえ、それじゃ私の入る隙間なんて無いね」

「ごめん・・・」

それはまるでラブ・コメの一場面の様に、まるで筋書きが始めから決まっていたかの様なセリフだった。そしてそれ以上聞かれた時は、僕は何となく罪悪感を感じながら「君の

知らない人なんだ」と言って、今にも涙が溢れ出しそうな女の子の肩に手を当てて「きつと俺なんかよりもっと君の事大切に思ってくれる人が現れると思うから」と言って慰めていた。

それはある意味では嘘では無いのかもしれない。そしてそれは僕にとっても彼女たちにとってもきつと一番いい選択だったのかもしれない。それでも、それなのにいつも僕の内の中には二つの罪悪感があった。

一つは勇気を出して告白してくれた彼女たちに対しての物であり、もう一つは松井夏子が好きだと言う事に胸を張れない自分の弱さに対する物だった。けれど何はともあれ、この三人に対してはそれで全てが終わった。中には未だに友達として付き合い合っている人もいれば、その日以来一度も会っていない人もいる。正直言ってあの時僕がこの三人に対して全てを話せば良かったのかどうかは未だにわからない。けれど今別々の道を前向きに歩いて行こうとしている彼女たちを見ていると、何となくこれで良かった様な気がした。少なくともこの三人に対しては。けれどさっきも言ったように僕にはこの三人以外にもう一人告白に応えられなかった人が居た。その子の名前は飯田理香と言い、中学校の時の同級生だった。そして彼女は唯一僕が本当の事を話した、たった一人の女の子でもあった。

今思えば何故僕は彼女だけに本当のことを話したのだろうか。四人の中で四番目だったからか。僕の中で松井夏子を純粋に好きだという気持ちが、何故引け目を感じなくてはいけないのだろうか、何故人を好きになって胸が張れないのだろうか、と言う気持ちが四人目にしてやっと答えを出せただけなのかもしれない。ある意味それも理由の一つだろう。けれどそれだけではきつと真実を口にする事は出来なかった。では僕は何故真実を口にしたのかと言うと、その答えはきつと四人目が飯田理香が、里香自身だったからだった。

彼女とは先にも言った様に僕がまだ中学生の時に初めて出会った。その頃の僕はなんに対しても必死にやってはいたものの、善と悪の区別も、自由とわがままの区別も、ましてや愛と欲望の区別も分からずに、何をやっても上手く行かない、そんな不器用な中学生だった。それに比べて彼女はどちらかという、真面目で勉強も出来てスポーツだって万能の、みんなから好かれる模範的優等生だった。もし僕が暗闇の中で必死に光を探すタイプなら、彼女はきつと明るいお日様の下で木陰を探すタイプだったのだろう。その頃の僕等はほとんどと言って共通の無いそんな二人だった。

今思えばこの頃の僕は自分とは正反対のそんな純粋で、なんでも器用にこなす彼女のことが、愛とか恋とかそんなモノでは無いけれど好きだったのかもしれない。そしてそんな彼女と僕はよく部活の帰りに一緒に成った。

僕等の通う中学は大してスポーツが強く無いにもかかわらず、部活だけはみんな遅くまでやっていたんだ。だから割と夜暗くなってから下校する事はざらだった。そして彼女は中学からこっち（割と僕の家近く）に引っ越して来たので、帰りは同じ部の中に同じ方角の友達居ない事もあり、僕らはよく一緒に帰った。と言うより理香に頼まれて帰ってあげていた。

今の子供達が聞いたら笑い飛ばすかもしれないけれど、その頃夜七時以降に女の子が一人で三十分以上も歩いて帰るのは、危険とされていたようなんだ。まあ確かにうちの方は今は色々建物も建ってにぎやかに成ったけれど、当時は畑やらたんぼやらばかりで、川沿

いのサイクリングロードは冬場の十九時頃なんて言ったら真っ暗だったし、時々変質者が現れたのも事実だった。だから僕らはいつも一緒に帰った。正確に言うともまだ十二、三の僕にとって、女の子と二人っきりで一緒に帰ると言うのはかなり抵抗のいる事だったんだ。だから僕らはいつも暗くなる道の手前の自動販売機の所で待ち合わせることにしていた。そこまで来ると僕もいつも一緒に帰る男友達もみんな別々の方角に別れた後だったので、誰にもヤジを飛ばされる事もうらやましがられる事も無かった。だから僕達はいつもその自動販売機の所で待ち合わせをしていた。

そしてその川沿いの暗闇のサイクリングロードでの彼女は昼間の器用さとは裏腹に、僕の洋服の端をしっかりとつかんで、僕の後ろに隠れる様に付いてくると言う恐がり屋だった。

正直言ってまだ十二、三の僕も恐くなかったと言えば嘘に成るだろう。けれどそれは僕のこと。こんなものちっとも恐くなるとねえ、なんて強がっていつも恐がる彼女を引っ張って行った。僕の中学一年生の一年間は、ほとんどこうして理香と一緒に帰った。その日々の中には、ヘトヘトに疲れた僕の背中を彼女が押して帰った時もある、彼女が練習で足をくじいた時は、僕は彼女を背負って帰った事もあった。そして彼女がレギュラーに成れた時は二人ではしゃぎながら帰ったし、試合で負けた時は落ち込む彼女を励ましながら帰った。そして僕が悪くて友達と喧嘩をした時は、あれは坂井君の方が悪いんだからちゃんと謝るんだよって叱ってくれたし、もし僕が悪くない時は、クラスみんなや先生は坂井が悪いと言っても、彼女だけはあれは坂井君の方が正しいんだから絶対謝る必要なんて無いよって、僕の事を信じて味方に成ってくれた。本当にその一年間僕らは色々な話をし、そして色々な思い出を作った。泣いたり笑ったり、注意しあったり励ましあったり。今思えばまだ愛の意味を知らない僕らが、お互い手探りで少しずつその本当の意味を探そうとしていたのかもしれない。しかしそれはやはり手探りは手探りであって、まだ幼すぎた僕達は暗闇の中で何かに手が触れ合えば、驚いて手を引っ込めてしまうほど臆病な二人でもあった。

そしてそんな僕らの手の先に何かが触れ合ったのは、彼女と一緒に帰りだして丁度一年が経とうとしたある春の日の事だった。

その日は僕の方が一年生最後の選抜会に近いせいもあり、彼女より少し遅い時間に待ち合わせの自動販売機の所に到着した。そしていつもは彼女が一人、自動販売機にもたれ掛かって僕の来るのを待っているんだけど、その日はその自動販売機の前には三人組の高校生が彼女を取り巻くように立っていて、必死に抵抗する彼女の鞆を無理矢理引っ張ってその場から彼女を連れ出そうとしていた。僕はその険悪な状況を見てすぐさま彼女の危機を感じる事が出来た。なんか大変な事に成っているんだって。そして次の瞬間には僕は彼女を助ける為に走り出していた。勿論僕にはわかっていたさ、この勝負に勝ち目は無い事に。なんせ相手は三人、それもまともじゃない高校生だ。けれどそんな事はその時の僕にはどうだっていい事だった。それまでの僕の人生を振り返っても勝ち目のあった事なんて何一つ無かったし、これからの人生だってきっとそうだろう。はじめから答えのわかるモノなんて何一つ無いんだ。だから僕は多くの失敗をするだろう、そして僕は多くの後悔も残してしまうのだろう。けれど僕はきっと諦めずに信じていれば、いつの日かその多くの失敗や後悔を乗り越えて成功する事だって出来るんだ。そう諦めずに信じてさえいけばきっと。そしてその事を気付かせてくれたのは、何を隠そう今僕の目の前で必死に抵抗

している理香、彼女だった。僕をいつも励まして頑張れって言ってくれた理香だったんだ。

僕は手に持っていた鞆を、その高校生の中の一人の後頭部めがけて殴りかかっていった。殴られた高校生は不意を付かれたのだろう。何がなんだか分からないまま、よろけて彼女の鞆から手を離れた。そして僕はそのすきに彼女の前にはだかり、鳩が豆鉄砲を食らった様な顔をした奴等の鼻っ面めがけて殴りかかった。とにかく必死だった。下手をすれば僕は殺されてしまうかもしれない。勝つことなんてどうでも良かった。とにかく彼女だけは救わなければ、僕が思っていたのはただそれだけだった。

始めの二、三発は相手の不意を付いた事もありうまくヒットしたが、やはり相手も状況を理解するとすぐさま反撃をしてきた。

「なんなんだ、このくそガキ！」と言う高校生の声と同時に僕は胸ぐらを捕まれた。

「離せ！！ この腐れポンチ！ いい年して中学生イジメてんじゃねえよ！！」

「おい、このガキやっちまおうぜ」

僕は三人組の反撃を食らう前に理香に逃げろと言った。始めは理香もためらっている様だったが、僕が殴られながらも必死に「早く逃げろ！！」と怒鳴っているのを聞いて明るい方に走り出した。そして一人取り残された僕は当然どこかの青春ドラマの様には行かず、無惨にもボコボコに殴られ続けた。そして僕は遠く理香の後ろ姿と意識の中で理香との思い出の様なモノを思い出していた。

「なあ理香、俺はもうダメかもしれない限界だよ」

僕はボロボロの体で言った。

「何言ってるの坂井君。諦めちゃダメだよ、せっかくここまで頑張ってきたんだから。絶対諦めちゃだめだよ」

「けど理香だって今まで諦めたこと一つ位あんだろ？」

「私は無いよ」

理香はキッパリと言う。

「ぜってえ嘘だよ。無いわけ無いじゃん」

「無いもんは無いもん」

「本当？」

「うん。だからもうちょっと頑張りましょ」

「ちえ、しょうがねえな。じゃああとちょっとだけだぞ。それ以上は誰がなんと言おうが絶対ダメだぞ」

「はいはい」

そして二人は笑い合っていた。それが愛だと言うことも知らないまま。けれど現実の僕には頑張るなんて言葉はなんの意味も持たないのだろう。そこには歴然とした力の差があり、厳しすぎる現実があった。ナアリカ、オレハモウダメカモシレナイ、ゲンカイダヨ。もう一度僕は問い掛けて見た。けれどももう思い出の理香は返事をしなかった。ごめんな、もう俺には頑張る事が出来ないよ。お前があんなに励ましてくれたのに。僕はもう諦めていた。この時の僕にはこの諦めが僕を大きく代える事に成るとは知らずに。

結局、理香がどこかから大人の人を連れて来てくれたおかげで、僕は大きく大きな怪我



まではいかず顔を二、三発と体にケリを四、五発もらった位で済んだ。ただそうは言っても鼻血は出るは、口の中は切るは、背中と腰は痛いわけで、最初の勢いとは裏腹にまるで傷だらけの負け犬の様だった。そしてそんな僕の姿を見て、理香がつれて来てくれた大人の人が「君、大丈夫か？」って聞いてきた。僕が起き上がり「ええ何とか」と答えると「そっか、ならいいけど。けれど気を付けた方がいい。最近この辺で変な奴等がたむろっているみたいだから」と親切に忠告して去っていった。僕らは大人が去った後、改めて周りの暗さを実感した。

暗闇の中にポツンと立っている自動販売機。そしてその明かりの前に、まだ幼すぎた二人が佇んでいた。今まで僕らが唯一素直に成れたこの暗闇も、今の僕らにとってその場所は、とても世界の真ん中には思えなくて、なんだか自分の弱さや無様さが、やけにリアルに感じられる、まるで世の中で二人だけがこの場所に取り残されてしまった様な場所だった。そしてその自動販売機の光は震えている僕と彼女の陰を作るには充分過ぎる程に明る過ぎる光だった。

「ごめんね」

始めに口を開いたのは今にも泣き出しそうな彼女だった。

「何でお前が謝るんだよ」

「だって私の為に・・・けどすごく・・・すごく恐かった」

「・・・」

私の為に・・・。彼女が口にしたこの言葉は僕の心の中に、今までに感じた事の無い何かをもたらした。もし助けを求めているのが彼女じゃ無かったとしたら僕は一体どうしていたのだろう。それでもやっぱり僕は命がけで助けようとしたらだろうか。正直言って僕だって恐かった。負ける事もそうだし、殴られる事に対してもそうだ。僕は多少ヤンチャな所があったから、人並み以上に喧嘩や、争い事を経験してはいた。けれど僕は人間だ。サイボーグでも無ければ、スーパーマンでも無い。強がる事は出来ても、強くはない。だからきっと僕はそこに居たのが理香だったから、そしてそれが僕の一番大切な人だったから、だから僕は恐さも命にもなんのためらいもなく勝利無き戦いに挑めたんだろう。そこに居たのが理香、彼女だったから。

正直言って僕はその時思った。今日の前で傷ついた僕の体に顔を埋めて泣いている彼女をずっと守り続けたいと。そしてその為には僕はもっと全てに対して強く成らなければいけないと。

きっと人は強ければ強い程、人に優しく成れるんじゃないかと僕は思う。勿論強さの使い道を謝っている人もいる。けれどそういう人はきっと心の何処かが人より弱いんじゃないかと思う。だから自分が傷つかないように誰かを傷つける。僕もこの先誰かを傷つける事があるかもしれない。そしてその強さの使い道を謝ることもあるかもしれない。けれど少なくとも僕は教わった、本当の強さの意味を。そして本当の優しさの意味を。

僕はまるで子猫の様に震えている彼女の小さな肩を、精一杯心を込めて優しく抱きしめた。少しでも彼女の恐怖心や悲しみが消えて無くなる様にと。そして僕らを包むこの暗闇が晴れて一筋の光が彼女を照らすようにと。

それから僕らはどれくらいその場に佇んでいたのだろう。気が付くと彼女の怯えも収まり、少しながら安らぎすら感じる様になっていた。

「もう大丈夫か」

今度は僕が先に切り出した。そして彼女は僕のその問い掛けに小さく頷いた。

「だったらそろそろ帰ろう、きっと家の人心配していると思うし」

僕はそおっと彼女を引き離し、いつもの様に彼女の先に立って歩き出した。そして僕等は安全性を考えいつも通る暗い道を避けて、かなり遠回りに成るけれど明るい道から帰ることにした。

僕が彼女を家の前まで送る間、殆ど僕達は言葉を交わさなかった。いつもなら気の利いた冗談でも言って彼女を笑わせたりしたけれど、さすがにこの日ばかりはそんな冗談も言えなかったし、頭にも浮かばなかった。ただ僕が前を歩き、そして彼女がいつもの様に僕の洋服の後ろをつかんで歩く。ただそれだけだった。もしもいつもと違うことがあるとしたならば、歩く時の彼女の体と僕の体との距離がいつもよりほんの少し近かった事だろう。けれどそれは彼女が僕に近づいたのか、僕が彼女に近づいたのか分からなかった。ましてやまだ恋や愛の意味を知らない僕等にとって、それが二人が同じだけお互いに近づいた事に気付く訳も無かった。

僕は彼女を家の前まで送り、帰り際に言った。

「俺、明日も明後日も遅くなるから、お前はもう俺のこと待ってないで、少し遠いかもしれないけれど今日帰ってきた道で先に帰れよ」

勿論これがどういう意味かはわかる。それは唯一僕等が素直に話したり喜んだり笑ったり泣いたり出来た場所を失うと言う事を。そしてそれはまだ見栄や外見ばかり気にしていた僕等にとって、別れに近い事だと言うことも。けれど僕はもう彼女を危険な目に合わす訳にはいかない。

彼女も始めはその言葉にためらっている様だったが、僕の「今度は助けられるどうか分からないから・・・」と言う呟いたセリフを聞いて、渋々彼女も「そうだね。そうする」と寂しそうに言った。

正直言って僕はまだ彼女を守れる程強くない自分が情けなかった。そしてそんな自分が悔しかった。けれど事実は変えられない。もしもまたあの三人組が現れたとしたら、今度も上手く行くとはいえない。ただ僕が大怪我をする位ならいい、けれど彼女の身にもしも何かあったとしたらと思うとそれは出来ない約束に似ていた。勿論今の僕なら本当の勇氣はみんなが思っている様な格好いいモノじゃない事は理解できる。もしも大切な人を守る為なら、土下座も出来る。人から馬鹿にされても無様にも成れるだろう。もしそれで大切な人を守れるのなら。けれど見栄や意地を張り、そして逆らい続けていなければ自分すら見失ってしまうこの頃の僕には、それは限りなく悔しい事だったのだ。ましてやこの時諦めてしまった自分自身の事が。

そして次の日から僕らの接し方は変わっていった。本当の愛の意味をまだ知らない僕らは、周りの目ばかり気にして、そこにある愛から目をそらしてしまう。そして本当の勇氣をまだ知らない僕は、自分を責める事しか出来やしなかった。今思えばそれは誰しもが通る道であり、今の僕があるのはその道を通って来たからだろう。人は始から手に入れられないモノがある、けれど何度かの失敗と後悔を繰り返し、いずれは手に出来る。そして人は何かを失う、そして一度失ったモノはもう二度と手に入れる事が出来ないモノがある。壊れてしまったガラス造りの彫刻の様に・・・。

それから理香と再び出会ったのは、僕が二十二歳の時だった。

中学の時は、結局あの日以来僕達は何となくぎこちなく成り、お互い廊下ですれ違っても目をそらす様に成った。勿論嫌いになった訳じゃない。むしろ前より好きになった。けれど、だからこそ変に意識しすぎて気楽に話し掛けられなくも成った。良く初恋は上手く行かないものなんだから人は言うけれど、その通りなのかもしれない。今でも時々僕は考えるんだ。僕の初恋って一体いつ頃の事なんだろうって。理香と出会うもっと前から人を好きに成った様な気もするし、理香と出会った後の様な気もする。正直言ってその答えは僕には分からない、けれどそんな僕でも一つだけハッキリしている事がある。理香と出会う前は初めて人を大切に思えた、人を守りたいと真剣に考えた。それなのに若すぎた僕は、そんな自分に素直に成れずにその大切なモノを失った。そして今、二十歳を過ぎた僕は少なからず素直に成れなかったあの頃の自分に後悔を覚えた。そして二十二歳の時、僕は偶然また理香と出会った。

僕は勿論、きっと彼女だってそうだと思うけれど、僕等の恋はあの時終わったと思っていた。僕は彼女と別れた後、彼女とは別々の人生を歩み、そして彼女の知らない人と何度かの恋を経験したし、彼女だって僕の知らない誰かと恋を経験した。その間僕の心の中に彼女が全く居なかったかと言えば嘘になるだろう。けれどそれは思い出の中のモノであり、恋だとか愛だとかそう言ったモノでは無かった。よく人は失恋をした時に今まで好きだった人を忘れようと努力をしようとする。けれど僕は違った。僕にとって好きだった人はいつまでも好きであり続けた。ただそれ以上に好きな人が出来、そしてその人の事を一番大切に思うだけの事なんだ。僕にとって好きだった人は、勿論過去の人になってしまうけれど、その人と学んだモノや、育んだモノはいつまでも僕の中にあり、そしてその積み重ねが今の僕でもあった。だから理香と学んだモノの答えは理香とは出せなかったけれど、新しい誰かとその答えを出すことが、僕が理香を愛していた証だった。僕は理香と学んだ幾つかの答えを出し、そして幾つかの答えを出せないまま、また理香と出会った。けれど僕の心の理香との恋は確かに終わっていたし、それに僕の心の中にはすでにその時、理香以上に大切に思える人が居た。

僕が理香と会ったのは中学を卒業して以来の事だった。それまでの間に僕は理香と全く会わなかった。家は確かに近かったけれど僕は僕で郊外の少し離れた私立高校に通っていたし、理香は理香で地元の公立高校に通っていたせいで、僕らは殆ど違う場所で高校生活を送っていた。勿論高校生活以外でも優等生だった理香と、劣等生だった僕とではやはり違う世界で生活をしていただろう。だから僕らはお互いの噂すら聞くことも無いまま高校の三年間を過ごした。そしてそれは高校を卒業しても変わることは無く、やはり僕らは別々の道を歩いて過ごした。けれどそれなら何故そんな別々の二人がまた出会ったのかと言うと、それは偶然にもそんな別々の二人が唯一共通出来た場所、そうあの暗闇だった。

その頃の僕は、夜仕事から帰ってくると家から三キロ位の所にある、近くの高校までランニングをしていたんだ。その高校は偶然にも理香が通っていた高校でもあり、また松井夏子が撮影でほんの少しではあったけれど使った場所でもあった。勿論僕がその高校をマラソンコースに選んだ理由は理香が通っていたからと言うことではなく、後者の松井夏子が撮影に来た事があった事が理由だった。ただたまたまそこに理香が通っていただけの事

であり、そしてそこがたまたま僕の家から例の川沿いの暗闇のサイクリングロードを抜けて行く場所に在っただけの事だった。そして僕がランニングを初めて一カ月が過ぎようとした頃だろうか、僕は偶然理香に出会った。

この頃の暗闇は昔の暗闇とは違い、建物の明かりが所々を照らし若い女性が一人でも気楽にランニングを楽しむ事すら出来そうなものだった。実際僕がランニングを初めて数多くの人とすれ違った。一人で走っている男性もいれば女性もいた。高校生位の少年もいれば、カップルで走っている二人組もいた。僕は毎日そんな人々とすれ違いながら、ただ黙々と走り続けた。それはまるで僕の人生そのものの様だった。目的地はハッキリわかる。目標もハッキリ見える。ただそこがいつも手の届かない場所なだけ。けれど僕は黙々と走り続ける、きっと僕が求めるその場所に確実に近づき、そしていつの日かその場所に僕はたどり付けると信じて。そして僕はそんな走り続けている途中で理香と再会した。

その日僕はいつもの様にChampion productsの上下の白のウエアーを身に纏い、NIKEのジョギングシューズを履き、タオルを首から掛けていつものコースを走っていた。そしていつもの川沿いのサイクリングコースを半分位過ぎた頃だろうか、一人の女性が反対側から小さなヨークシャテリアを連れて歩いて来るのが見えた。先も言った様にこの頃の暗闇は昔のものとは違い、それが昔より大人っぽく成った理香だと気が付く位の明るさがあった。一瞬僕は迷った。それが理香だと言うことは理解出来たが、声を掛けるべきかそれともそのまま通り過ぎた方がいいのか。勿論この頃の僕はあの頃とは違い、女の子と話しをすることに抵抗はもう無い。やあ久しぶり、元気だった？ 位の事は話し出せるだろう。けれどそれは昔の女友達にならと言うことであって、恋心のあった相手にでは無い。だけど真実はどうであれ僕と理香は恋人同士だったわけでも無ければ、口付けを交わした仲でも無い。他人が見てそうであったように、僕らの関係は歴とした友達同士であり、そこには誓いも存在しなければ裏切りも存在しない。だから僕が「やあ」と言えば理香も「やあ」と応えるだろうし、理香が「元気だった？」と言えば僕も「元気だったよ」と応えるだろう。僕らはそう言う仲だったし、もし仮にそれが違かったとしても、この七年と言う時間の中で僕は、強さと優しさを手に入れた代わりに理香への恋を失った。僕の理香への気持ちは愛情では無く友情なんだ、僕はそう自分に言い聞かせもう一度少し綺麗に成った理香を見て声を掛けた。「やあ、久しぶり」と。

始め理香は僕の言った事、そしてあの頃より少し大人に成った僕の事を理解出来ない様だったが、少し間を置いて「あれ、ひょっとして坂井君？」と聞き返して来た。

「そうだよ、俺だよ。覚えてた？」

「ええ覚えてたけど、でもすごく大人っぽく成ったから、全然気が付かなかったよ」

「そっか？ 俺なんか昔の友達にはお前は全然変わんねえな、なんて言われるけど」

「そお？ そんな事無いよ、なんかかっこよく成ったと言うか大人っぽく成ったと言うか」

「そっか？ 俺は昔っからかっこよかったけどな」

「はいはい」

僕等の再会はあの頃となんの変わりも無いものだった。理香の笑顔も薄く化粧がしてはあるものの、あの頃となんの変わりも無かった。会話だって僕がおどけて冗談を言えば、理香があきれて笑い出す。何一つ変わりはない。全てはあの時のまま氷ついてやがて七年と言う月日が経ち、それで今解凍された様にさえ感じる。けれど僕はわかっていったんだ。

今の僕の心の中に居る一番大切な人は理香じゃ無いことを。今思えば僕はこの時、自分の気持ちをハッキリ意志表示するべきだったのだろう。理香の心が僕に傾き始めた時も僕は気付かないふりをするべきでは無かったのだろう。そうすれば二人は傷つかずに済んだのかもしれない、少なくとも僕自身はともかく理香は無意味に苦しまなくて済んだはずだった。けれど僕はその時が来るまで言えなかったよ。今思えば卑怯だったのかもしれないね、それにわがままだったのかもしれないね、強く成れたなんて嘘かもしれないね、大人っぽく成ったねなんて言われる資格ないよね、きっと同情すらされないね、だってそれは誤解でもなければ仕方なかった事でもないのだから。ただ単に僕が彼女に言えなかった、ただそれだけだったんだから。

僕はあの日あの時彼女に本当の事を言うまで一人ぼっちだったのかもしれない。孤独の中で葛藤を繰り返していたのかもしれない。結果はどうであれ僕はもっと早く自分に素直になり、そんな自分を好きに成れば良かったのかもしれない。変態扱いされたとしても、胸を張り続ければ良かったのかもしれない。けれど僕が本当の事を口にしたのは、理香が再び僕に恋をした後の事だった。

僕らは再会したあの日から数カ月間に何回か遊びに出かけた。僕も彼女もその時付き合っている人が居なく、ここ最近僕は勿論の事、彼女もカップルが行くような所には行っていなかったから、動物園、遊園地、映画館に一緒に行ったりした。その間、時折僕に見せる彼女の笑顔はやはり昔と変わらなかった。そして彼女は本当に色々な事を僕に話してくれた。僕の知らない高校時代の事や、短大時代の事、そして今の仕事場の事を。その間僕はただ彼女のその楽しそうに話す姿を見つめていた。彼女が微笑み、僕がそれを優しく見つめる。きっとそんな二人の姿は本物のカップルにさえ見えただろう。彼女さえ間違えてしまう位に。正直言って理香がそれを望むのなら、僕は彼女の為にこのまま偽り続ける事も出来たのだろう。それが正しい事が間違った事はわからない。けれど今までの人生がそうであった様に真実の中に誤りがあり、誤りの中にもまた真実がある。僕が黙ってさえいればそれで済む事だってあるのかもしれない。始めは苦しいかもしれないけれど、そのうちそれが当たり前になって、成れて、だれて、今まで悩んでいた事が馬鹿らしくさえ思えて、そしてその偽りで固めたモノ自体が真実に成り、それ自体が幸せにさえ感じられる様に成れるのかもしれない。もしも理香がそれを望むのなら。けれど彼女の笑顔には偽りは無い。そこにあるのはささやかな小さな幸せを真剣に見つめる、まだほんの少しあどけなさが残った少女の純粋な笑顔だけだった。そんな里香の前で僕は偽れない、もうこれ以上自分や理香に嘘を付くことなんて出来やしない。誤解されたってかまわない、変態扱いされても仕方ない、僕は偽り無き理香の笑顔に全てを話そう。それで理香の笑顔が壊れてしまっても仕方ないんだ。だってそれが真実であり、それが僕自身であり、それが理香の為であり、そしてそれが僕が理香にしてあげられる最後の精一杯の勇気なのだから。

街はもうすっかり夜の闇に包まれていた。僕らはその夜の公園のブランコに座り今日見た映画、愛の風景について話しをしていた。彼女は出演女優のペルニラ・アウグストの演技に付いて僕に話し掛けていたけれど、僕の頭の中にあったものは愛の風景では無く、この暗闇の中で淡い月明かりに照らされた彼女のその笑顔を見れるのも、これが最後なのかなと言う寂しい風景だった。僕はもう一度自分に言い聞かせる様に、これでいいんだ、これで、と心の中で呟き、そしてフッと溜息を履き、そして前髪をかき上げ彼女の話を守る

様に言った。

「なあ理香、俺お前に隠していた事があるんだ。前から言おう言おうとしていたけれど結局今まで言えなかった。けれど今日はハッキリ言うよ」

「えっ、何？」

彼女は不思議そうに僕に聞き返して来た。

「お前、前に俺に好きな人いるの？ って聞いたことあったよな。そん時俺は居ないって答えたけれど、あれは嘘だったんだ」

「……」

「ごめん……」

「……」

僕が彼女の会話を遮って言った言葉は、僕と彼女の会話を遮っただけではなく、この暗闇と月の光をも遮り、やがて僕と彼女との心の仲をも遮っていった。

「何で謝るの？」

「何でって」

「だって私たち付き合っている訳じゃないし、私坂井君の事友達としか思っていないしそれに、それに……」

彼女は力無しに僕にそう言ったけれど、彼女の必死に涙をこらえている姿を見ればそれが嘘だと言うことはわかった。けれど彼女の付いた嘘は僕が今まで付いていた嘘とは違い、何の罪も持たないものだった。

「それはそうかもしれないけれど、なんかお前に嘘をつき通すのが悪いような気がしたんだ、だから……」

「悪くは無いけど、私はどうしたらいいの？ 急にそんなこと言われて私どうしたらいいの」

彼女は相変わらず平然を装っているけれど、涙は流れる寸前の所でどうすればいいのか迷っている様だった。

「お前がどうしたらいいのと聞くなら、どうもしなくていい、そのままでいればいい。ただ俺は本当の事を言うべきだと思っただけなんだ」

「本当のこと？」

「そう本当のこと。俺の好きな人のことを」

今思えば僕はずっと暗闇の階段の踊り場で何処にも行けずにさまよっていたような気がする。先に何があるのか見えない事が恐かったのかもしれない、見えないから階段から足を踏み間違え、また落ちる事が恐かったのかもしれない。誰かが助けに来るのをずっと待っていたのかもしれない。けれど誰も来るはずはなく、もし仮に来たとして僕は迎え入れる事は出来やしないんだ、こんな暗闇の中では。だから僕は歩くしかないんだ、今までの様に階段にすねをぶつけてしまうかもしれないし、足を踏み間違え足を挫いてしまうかもしれない、時には昔の様にまた転げ落ちてしまうかもしれない。確かに体は傷だらけでボロボロかもしれない、けれどまだ動く、まだまだ充分動くんだ。諦めてしまっている人もいる、けれど僕は諦めない。不安定な階段を一步一步確かめながら登るんだ。それは得るものもある変わりに失うものも多いかもしれない。幸せに成れる確率よりリスクの方が大きいかもしれない、それはわかっている、わかっているけれど僕は登るんだ。何故って聞くの

ならだって僕はまだ何処にも辿り着いてはいないのだから。

そして僕はその目の前にあるはずの階段に新しい第一歩を踏み出した。松井夏子。彼女の名前をもう一度心に呟きながら。

「俺の好きな人は、松井夏子なんだ」

「ま つ い な つ こ ?」

初め彼女は僕の言った言葉の意味を理解できなかった様だった。しかしそれは当然の事でありそれに対して彼女を責めることは出来ない。きっと僕だって同じ事を言われれば理解なんて、残りの人生の半分をも費やしたって出来やしないだろう。それもこんな形で言われればなおさらの事だ。けれど、もしここで理解してくれなければきっと僕にも理香にも本当の幸せはこないのだろう、僕にはそれがわかっていた。わかっていたから僕は真実を話したんだ。だからここで理香はそれを理解しなくてはいけないんだ、誰の為じゃなく自分の為に。僕は出来るだけわかりやすく説明をしようとした。

「松井夏子って、あの松井夏子？」

「そう、あの松井夏子」

「それってひょっとして冗談？」

「違う、冗談なんかじゃなくて、本気なんだ」

正確に言うと本気と言うのは当てはまらないのかもしれない。正直な所は僕にも良くわからなかった。ただ好きなのはわかるし、時々心がドキドキするのもわかる。いつでも心の支えであったし、今僕にとって一番大切に思いたい人でもあった。けれど本気と言う言葉の重さは彼女と一度も会った事のない僕には少し重すぎるような気がした。だけど僕は理香に理解してもらう為にあえて本気という言葉を使った。それにその言葉はあながち偽りと言う訳でも無かったのだから。

「本気なんだ。勿論お前が冗談だと思う気持ちはわかる。信じられない事もわかる。けれどとにかく俺は偽り無く松井夏子が好きなんだ」

「そんなこと真顔で言われたって、私分かんないよ。分かんないし何でそんな事急に言うの」

「何でって。それはもし違ったら謝るけれど、なんか理香が俺の事好きになり始めている様な気がして、だからもしそうならお前が傷つかないように、俺はその前にハッキリ言わなきゃいけないと思って」

「.....」

理香は下を向いたまま黙っていた。理香のその小刻みに小さく震えている小さな体では、その真実を真正面から受け止めるにはあまりにも過酷すぎる様にも思えた。僕は優しく抱き寄せ、ごめん、冗談だよと言えば良かったのだろうか。きっとこれは悪夢なんだ、だから僕の胸の中でゆっくり眠ればいい、そうすれば今度君が目覚めるときには悪夢は去って君が望む現実がそこにはあるはずだからとでも言えば良かったのだろうか。けれど僕にはそのどちらもしてあげる事は出来やしない、何故ならこの真実という冷たい風は僕が放ったものなのだから。

「ごめんな、俺が悪いのに・・・」

「.....」

きっと人は例えそれが真実であったにしろ、誰かを好きに成れば成る程、何処かの違う

誰かを傷つけてしまうものなのかもしれない。確かにそれは仕方ないことかもしれないし、誰のせいでも無いのかもしれない。けれど僕は苦しかった。今日の前で僕を好きに成ってくれた人が傷ついている、そしてその人に僕は何一つしてあげられることが出来ない。それどころかその人は僕のせいで傷ついているんだ。昔あるクルトリーヌと言う人が言っていた言葉がある。

～愛しているのに愛されないのは確かに辛いことであるが、もはや愛していないのに愛されているのにくらべたら物の数ではない～。

確かにその通りなのかもしれない。誰もその事に否定すら出来やしないだろう。ただ僕は理香の心の痛みがわかる。綺麗事と言われるかもしれないし、偽善と呼ばれるかもしれない。けれど僕はどうでもいいから、理香だけは幸せに成って欲しかった。僕は一生孤独でも構わない、その代わり理香には本当の幸せの意味を知って欲しかった。だって理香は幸せを手に入れる為に今まで本当に努力をしてきたんだし、幸せを手に入れる権利を持った数少ない女の子なのだから。

僕は下を向いて泣いている彼女の肩に手を当てて、そしてもう一度言ってみた。

「ごめんな、こんな思いさせて。けどなんの慰めにもなんねえかもしれないけれど、お前ならきっと俺なんかよりもっとお前を大切に思ってくれる人が現れると思うよ、だからそんなに落ちこま」

僕がそこまで言いかけた時、彼女はフッと顔を上げて言った。

「なんで？、どうしてそんな事ばかり言うの？ あの時だってそうよ。いつも坂井君は自分が悪いからみたいな事ばかり言って、人が傷つかないように気ばかり使って。けどね、そっちの方がよっぽど傷つくんだよ。ふられるのに優しくされたらもっともって傷つくんだよ。だからそんなアイドルが好きだなんて見えすぎた嘘言わないで、ハッキリ私のこと嫌いだって言って欲しかったよ！！」

そして彼女は立ち上がり僕の前から逃げ出す様に走り去って行った。これで全ては終わった。僕が嘘を口にした時から全ては始まり、僕が真実を口にした時に全ては終わった。何一つ答えを出せない僕一人を置き去りにして。

彼女の居なくなった夜の公園はもう月明かりでさえぼやけて見えた。そして僕の横の彼女が今居たブランコはまるで今の僕の複雑な心の様に、前に行いたり後ろに行ったり少し寂しそうに揺れていた。一体何故なんだろう。僕が偽ればどこかの誰かが傷つく、だから僕が真実を語ればまたどこかの誰かは傷ついてしまう。何故なんだ。何故人はこの広い世の中でたった一人の人しか愛せないんだ。それは例え僕がどんなにいい人に成ったとしても、例え僕がどんなに格好良く成れたとしても、僕が愛したい人、そして僕が愛されたい人はきつとたった一人なのだろう。それは仕方ない事かもしれない。僕だって今まで人並みに失恋をしてきたからそれはわかる。仕方のないことは。ただ理香、君が僕を忘れて他の誰かを好きに成るその前に聞いて欲しい事がある。僕はきつとこのとき自分の幸せを選んだ訳じゃないだよ、悔しいけれど僕はあまりにも現実を知りすぎているんだ。そりゃ夢見がちかもしれない、けれど僕は現実と言う名の眼鏡で可能性と言うレンズを通してしか夢の見れない悲しい男なのさ。だから僕は悲しい事だけれど知っている。例え僕がどん



なに松井夏子を大切に思おうが、例えどんなに彼女を好きに成ったとしても、僕が彼女の心の支えに成れる可能性は1パーセントすら残されてはいないことを。なのに何故僕がこの時、理香では無く松井夏子を選んだのかを知ってほしいんだ。それは綺麗事のように聞こえるかもしれないけれど理香の為を考えての事でもあったんだ。もしこの時僕が松井夏子じゃなくて理香を選んでいたら、きっとそれなりに僕らは楽しい思い出の一つや二つ出来たかもしれない。けれどこの時の僕が、この時の僕であり続ける以上、僕には理香を幸せにすると言う確信も無ければ自信も無いんだ。だって自分自身すら幸せに出来ない男が、一体どうして人を幸せに出来ると言うんだ。優しさや勇気だけでは人を幸せには出来ないんだ。優しさや勇気だけでは。格好悪いよね、情けないよね、けれどこれが自分自信すら幸せに出来ない男の本音なんだ。だから僕はどちらにせよ、まだやるべき事がある。そしてその事に対して僕が僕なりの答えを出せない限り、僕は何処にも行けやしないし何処にも辿り着けない。そして何処にも辿り着けないと言うことは今まで僕を愛してくれた人達、そして僕が愛した人達、そんなもの全てに意味が無くなり、僕がこの世に存在する理由すら無くなってしまふのだろう。だから僕は答えを出したい。例えそれが答えらしくない答えでも構わない。例えそれが僕なりの答えしか出せなくても構わない。今までに僕を好きになってくれた人達や理香、君が僕に教えてくれたその一つ一つに答えを出したい。そして僕が今までに好きになった人達や松井夏子、君に教わったその全てに答えを出したい。例えそれが僕なりだけのものでも構わない。だってそれが僕にしか出来ない事であり、それが僕がしてあげられる全てなのだから。だから理香ごめんな。そして許して欲しいんだ。あの時もそしてこの時も答えを出せなかった僕を。それは時代のせいでも無ければ君のせいでも無い。誰のせいでも無ければ誰のせいにもしたくは無い。その全ては僕にあり、僕の全てがそれなんだから。理香のことは好きだよ、きっといつまでも忘れる事はないだろう。けれど僕にはそんな理香以上に好きな人がいる。そしてその人と出会ったのがたまたまブラウン管越しだった。そして僕が好きになったその人がたまたま僕なんかじゃ幾ら背伸びをしても手の届かない人だった。そして僕がまだその人を好きになった事に対して答えを出せずにいた。ただそれだけの事なんだ。そう、ただそれだけの事だった・・・。

・・・ねえ、届かない愛って存在するの？　ねえ、叶わぬ恋って存在するの？

僕は君と出会い、君は僕と出会い、そして二人は恋に落ちた。遠い遠いおとぎばなしだね。ロミオとジュリエットにも成れなかった僕等は、いつでも真実の前では絶望させられてしまったね。遠い遠い昔の話さ。僕と君、そして君と僕。語られる事も無いのかもしれないね。だって僕等が出会ったのは

運命のちょっとしたいたずらだったのかもしれないのだから・・・

～夢の中の少女は僕に別れを告げた。

「もうこれから先は、あたしが居なくても大丈夫だね」と。

僕は突然の彼女のその言葉の意味が分からず聞き返した。

「えっ、どうして？何故これから先は君が居なくても大丈夫なんだい。だって今まで僕が困難を乗り越えてこれたのは、淋しい時や辛い時に君が僕を励ましてくれたからなんだ。だからこれからは僕には君が必要だし、それに例えこれから先、君が居なくても大丈夫だとしても、僕は君と会いたいしもっともっと色々な話をしたいんだ。それは勿論君がそれを望まないのなら仕方ない、けれどももしそうでないのならこれからは僕は君と会って行きたいんだ」

けれど僕のそんな問い掛けにも彼女はやはり首を振った。

「それは出来ないの。確かにそれはいい考えだと思うし、あたしも出来る事ならそうしたい。けどそれは出来ない事だしするべきではないの。それに・・・」

「それにこれはあなたが自分自身で決めたことなのよ」

「僕が自分自身で決めたこと？」

・・・ボクガジブンジンデキメタコト・・・

「そう、これはあなた自信が決めたことなの。だからあたしはそれに対してどうする事も出来ないし、それにあたしもそうする方がいいと思ったから」

けれど僕にはその事の意味がまだ良く理解出来なかった。

「ひとつ聞いてもいいかい。それは仮に僕が決めた事だとすると、もし僕がやめると言えればやめれる事でもあるのか？」

「勿論それはあなたが決める事よ。だってこれはあなたの夢なんだから。だけどあなたはきっとやめないわ。あたしにはそれが良く分かるの。だから今はとって淋しいけれど、やはりここでさよならしなければいけないの」

彼女は確かにそう言った。ボクガジブンジンデキメタコト、そしてキットヤメナイと。

「わかった。君がそう言うのなら、きっと僕はそれをやめないのだろう。それならば例えどんなに淋しくても僕は頑張れると思う。けれどももしここで別れるのならその前に一つだけ聞いておきたい事があるんだ。君は一体誰なんだ。そして僕が居なくなった後、君は一体どうなってしまおうんだ。僕は君が時々僕に見せたあの淋しそうな顔が忘れられない。君がとても心配なんだ。だからそれがハッキリするまで僕は何処にも行けないよ」

彼女は僕のその問い掛けに少しイタズラっぽく微笑んで答えた。

「ありがとう。でもあたしは大丈夫だよ。あたしは一人ポツンとここに取り残される訳ではないのよ。あたしはいつでもあなたの心の中に居るの、ただそれがあなたに見えないだけなの。だからあたしの事は心配しないでいいよ」

「僕の心の中に君はいつまでもいるの？」

「ええ、いるわ。だってあたしは、アナタジンナンダカラ」

彼女は確かに僕自身だと言った。そしていつまでも僕の心の中にいると・・・。

それから僕らはほんの少しのおしゃべりをした。けれどそのどれをとっても別れにするようなものではなく、ごく普通にするごく普通のおしゃべりだった。そして別れ際彼女は最後に僕に言った。

「絶対に負けないでね」と。

今思えば彼女は僕の弱い心だったのだろ。だからきっと彼女が泣いていたのは僕の涙だったんだろう。そして彼女が淋しそうにしていたのは、僕が誰かの温もりに触れたかった切なさだったのだろう。そして彼女が呟いたセリフのひとつひとは僕が漏らすやりの無い溜息だったのだろう。そして彼女が僕を励ましてくれたのは僕が負けたくないと言う気持ちを自分に言い聞かせていたのだろう。そしてその彼女が居なくなったと言うことは、例え永遠に一人ぼっちでも負けてはいけないと言うことなのかもしれない。そして彼女と最後のさようならをした僕は必然的にいつもの様に目を覚ました。

そして目覚めた僕の枕は僕の最後の涙で濡れていた・・・・～

## 最終章

### 『永遠の愛』

僕は一体何処まで来たのだろう。

振り返れば確かにそこには僕の軌跡があった。それはまるで不器用な僕が必死に手探りで歩いたとすぐにでも分かる様なアンバランスな足跡だったが、けれどそれはそこに五年近くの歳月を照らし合わせれば、僕にとってはとても大切な僕の掛け替えのない思い出と変わる足跡でもあった。

ボクハ イッタイ ドコマデキタノダロウ。僕はもう一度、自分の心に問い掛けてみた。一体二十代前半と言う時は僕に何を問い掛けたのだろう。勿論そこには一言では言い表されない位の様々な事があった。そこには仕事もあれば遊びもあった。そして喜びもあれば悲しみもあった。もし自立が僕を変えたとすれば甘えも僕を変えたのだろう。すべてのモノに意味があるのなら僕は僕なりの答えを出してきたつもりだった。仕事にしてもまだ二十代半ばだと言うのに会社の中の重要な仕事も任されるようにも成ったし、趣味も釣りやスポーツ、車にバイクとなんでも自分の好きな事をやってきた。そして私生活にいたっても一人暮らしを始めて二年が経ち、炊事洗濯も板につくようにも成った。勿論すべてが初めから上手く行ったわけではない。そこには失敗もあれば挫折もあった。悲し涙を流した事もあったし悔し涙をこらえた事もあった。何もかもが嫌になり自分をとことん嫌った事もあった。けれど僕はただそんな時も前を向いて歩いて来た。そこには確かなモノなど何一つとして存在していた訳ではなかったから不安や心配もあったけれど、あの頃信じていた夢や愛や希望、そして自分自身を信じて僕は歩き続けたよ。そして僕は今ここにいる。勿論この場所が僕にとって良い場所なのか、それとも悪い場所なのかは分からない。けれどそんな事はきっと誰にも分からない事だし、ましてや人生の半分も生きていない僕にとっては尚更分かるはずもなかった。だから僕はもう一度自分を見つめてみた。それはどちらかと言うと今居る場所の確認と言うものよりは、これから僕が歩いて行く道は本当にこれでいいのか？ 本当に僕は間違っていないのか？ と言う自分への再確認の様だった。一体この五年間の中で僕のこの小さな二つの手の中には何が残ったのだろう。けれどいくら目を凝らして見て見ても、そこには目に見えるモノは何一つ無かった。

勿論正確に言うと幾つかはあったかもしれない。例えば彼女が憂鬱そうに遠くを見つめているジャケットの彼女のCDだとか。幾つかの雑誌の切り抜きだとか。彼女の出ているドラマを録画したビデオテープ等。けれどそれは誰にでもお金を出せば買えるものであり、例えそれがいくらあったとしても、僕がこの愛の意味の答えを出すにはそれは余りにも無力なものだった。だから実質的には僕は目に見えるモノを何も手に入れていないのと同じ

事だった。

僕はこの五年間、たった一人の女の子だけを見つめてきた。それなのに僕は何一つ目に見えるモノを手には出来なかった。勿論見返りが欲しかったわけではない。それにそのこと自体が無駄だったとも思っていない。けれど僕が何も手に触れることが出来なかったと言うことは、そこには失敗や失望が無かった代わりに成功も希望も無かったということでもあった。

愛とは一体何なんだろう。愛とは叶えるものなのだろうか？ そしてそれはそれを求める二人によって生まれて行くべきものなのだろうか？ それとも例えそれがもし叶わぬものだとしても、信じ続けそして求め続けるべきものなのだろうか？ あるミュージシャンはこんな歌を歌っていたよ「もしそれが君じゃ無ければ、僕は一人の方がましさ」って。もしそれが真実であれば、僕は今までの様にこれからも彼女のことを例えひとりぼっちでも見続けて行けるのだろう。けれどある人は、人はひとりぼっちでは生きて行けないと言う。情けない事なのかもしれないけれどそれも決して間違いとは言えない。正直言ってこの五年間を振り返って見てもその事は実感出来た。

僕はこの二十代前半と言う恋い多き五年間を、文字どおり誰とも付き合わずにたった一人で過ごして来たんだ。そこにはひとりぼっちの誕生日が五回あった様にひとりぼっちのクリスマスもやはり五回あった。そしてそれは綺麗事だけでは語れない程の寂しさもあった。誕生日ならまだしも、クリスマスとも成れば嫌が応でも街の雰囲気が目に入って来る。イルミネーションで飾られた町並み、そして肩を寄せ合う恋人たち。勿論友達たちもこの日ばかりはみんな予定が埋まっているんだ。だから僕もあえてこの日は誰にも声は掛けない。そして恋人の居ない僕にはクリスマスが近づくと誰もクリスマスの話をしてしなかった。それは暗黙の了解の様に。けれど僕にとってもその方が気楽で良かった。変に気を使われても困ってしまうし、それに男だけで集まって無理矢理変に盛り上がったとしてもよけい空しく成ってしまうものなんだ。だから僕は大体そう言う時は一人で九十九里のシーさんの所までケーキと缶コーヒーを三人分買い込んで車を走らせた。何故三人分買うのかは言わなくても分かると思うけれど、一つは自分の分でもう一つはシーさんの分、そして三つ目はナッキーの分だった。そしてそんな僕の到来をシーさんも心から喜んでくれたし、僕も一人で過ごすよりシーさんと語り合った方が楽しかったから。だから僕は次の日の仕事が見つかる事は考えないで九十九里まで車を走らせた。

「シーさん遊びに来たよ」

「ヤア、キミカ。マタキョウハドウシタンダイ」

「今日はほらクリスマスイブだから、ケーキを持って遊びに来たんだよ」

「ソウカ、キョウハクリスマスイブカ」

「そうなんだ。本当は恋人でも居ればちょっとお洒落でもしながら洒落たレストランで食事をして、二人でクリスマスのお祝いでもするのもかもしれないけれど、残念な事に今の僕には恋人が居ないから、恋人の代わりと言う訳じゃ無いけれどシーさんとお祝いでもしようかなと思って」

「ソウカ、ダカラキョウハイツモヨリスコシヒトガオオインダネ」

実際シーさんの言うとおりの、冬の海にしては人が多かった。僕はシーズン関係なく九十九里には来ていたのでその変化は良く分かっていた。夏の海は言うまでもなく本当にいる

んな人達でごった返しているんだけど、その夏が過ぎる九月にとも成ると、そこには夏の間のあの人の多さが嘘のように静まり返った砂浜が存在し始める。それはまるで誰も居ない学校の教室の様に。そしてそんな誰も居なくなった九十九里の砂浜に一人佇んでいると、自分がその誰も居ない教室の机に書かれた意味のない落書きの様に思えてしまうんだ。誰の目にも止まることのない、そう存在していることさえ意味の持たない落書きの様に。そしてそんな淋しい雰囲気を持っているのが冬の海だった。そしてそんなシックな気持ちに成れる冬の海は、僕にとって色々な事を考えるには最適だった。けれどそんな淋しい冬の海でも年に二回だけにぎやかな時がある。それは一つは大晦日の夜、正確に言うと元旦の朝方と言った方がいいのかもしれないけれど、とにかく初日の出が昇る時には本当に渋滞が発生する位の人が押し寄せてくるんだ。勿論みんな海を見に来た訳では無いのかもしれない、そこに太陽と言う存在が無ければきっとその数は3分の1にも満たないのかもしれない。けれどとにかく大晦日の日には、それが冬の海だと言う事を忘れてしまう位の人が押し寄せて来る。そしてもう一つの日は十二月二十四日。そうクリスマスイブの日だった。

クリスマスイブの日に集まってくる人達は、大晦日とは違って変わって、家族連れや仲間同士と言う存在は無く、その99.9%が恋人同士だった。勿論僕のようにケーキを三人分も助手席に乗っけて、横浜から一人でやって来る様な人も居るはずもなく、そこが暗い夜の海だからまだ良かったものの、明るい場所だとしたら僕一人だけ浮いた存在に成ってしまう様な日だった。そして案の定この日もやっぱり恋人達でごった返していた。

僕の両サイドは当然の事だけれど車の列は駐車場からつながった海岸まで延びていた。そして目の前に広がる砂浜には肩を抱き合って座っているカップルや手をつないで波打ち際を歩くカップル。そして時には大胆に口付けを交わすカップルまで居た。普段ならそんな光景を目の前にされたら、目のやり場に困ったりもするのかもしれないのだけれど、この日ばかりは違った。

月明かりに照らされた九十九里の浜辺で手をつないで歩く恋人達を見ていると、なんだかほんの少し幸せの意味が分かったような気がしたんだ。

きっと人の愛や幸せってそんなに難しく、遠くにあるものじゃなくて、もっと単純でずっと近くにあるんじゃないかってね。

「何だかみんなとても幸せそうだね」

僕はシーさんに向かって呟いた。

「アア、ソウダネ。ホントウニシアワセソウダ。デモキミハナンダカ、スコシサミシソウダネ」

「僕が？」

「アア」

「そうかもしれないね」

「・・・」

シーさんの言う通り僕は淋しかったのかもしれない。

「ねえシーさん。きっと幸せって誰かがくれるものじゃなくて、自分で見付けるものなんだよね」

「アア、ソノトウリダヨ。シアワセハドコニデモアレバ、ダレニデモテニイレルコトガデ

キル。ケレドソレヲミツケテ、テニレルコトガデキルノハジブンダケナンダヨ」

「ねえ一つ聞いてもいいかな？」

「ナンダイ？」

「もし、もしも仮にとても叶えられそうもない幸せを追いかけている男が居たとしよう。それでもその男にとって、その叶わぬ幸せを必死に追いかける事が幸せなのかな？ それとも叶わないのならもっと違った幸せを探した方が、その男にとって幸せなのかな？」

「ソレハキミノコトヲイッテイルノカ？」

「いや違うよ。ある男の事を言ってるんだよ」

「カナワヌシアワセヲオイカケルオトコノハナシカ・・・」

「そう、叶わぬ幸せを追いかける男の話」

シーさんは僕の言った質問に少し時間を置いて答えた。

「ソレハホントウニムズカシイシツモンダ。ソモソモ、カナワヌシアワセカドウカハダレニモワカラナイシ、イッケンカナワヌソウニミエテモ、カナウモノモアル。ソレニタトエソレガカナワナクテモ、シアワセトイウカチカンハヒトニヨッテサマザマナモノナンダ。ダカラソレヲタニンガキメルコトハデキナイシ、カリニソレヲダレカガキメタトシテモ、キットソノオトコハ、シアワセニハナレナイヨウナキガスルヨ。タダイマハッキリエルコトハ、ソナオトコノコトヲ、ワタシハココロカラオウエンシテイルコトダケサ」

シーさんは知っているんだ。僕のことを。僕はとても嬉しかった。そしてそれと同時に僕の求める幸せが果てしなく遠くにあることがとても淋しかった。けれど涙なんか流しちゃいけないんだ。だってそれは自分が見付けた掛け替えのない大切な幸せなのだから。僕は今にも溢れだしそうな涙をこらえてシーさんに応えた。

「ねえ、それが一生片想いで終わっても、例えばそれが一生逢えない人だとしても、生涯たった一人の人を純粋に愛し続ける。そんな男がこの世の中に一人ぐらい居てもいいよね」って。

そしてシーさんはとても暖かく「アア、モチロンダトモ。ワタシハソナオトコガトテモスキダカラ」と言ってくれた。

僕はこの五年間のあいだ、本当に良くシーさんに会いに来た。元々僕は何かあった時は（良い事があった時も、悪い事があった時も）シーさんに会いに来ていたのだけれど、この五年間はその数が多かった。

この五年間は本当に僕の周りでいろんな事が変わった。子供から大人にも成ったし、一人暮らしも始めた。僕の乗り物の主体が車からオートバイに変われば、聴く音楽、見る映画まで変わっていった。けれどそんな様々なものが変わって行ったといのに、何も変わらないものがあつた。

僕はこの五年間ずっと一人ぼっちだった。それは誰にもふられる事が無かった代わりに、誰とも付き合う事も無かったと言う事だった。けれど僕には好きな人が居た。すごくすごく好きな人が居た。そしてそれもやはりこの五年間と言う間に何の変わらなかつたものだった。

それまで僕にとっての恋は、まるでつむじ風のように僕の周りを一回りして過ぎて行つた。その中には結婚まで考えた恋いもあれば、笑顔で始まり涙で終わった恋いもあり、そしてその逆の涙で始まり笑顔で終わった恋いもあつた。そしてその幾つかのつむじ風の様

な恋は、僕に思い出だけを残して過ぎ去っていった。けれど僕が五年前のあの夜出会ったつむじ風のような恋は、まるで二度と離れる事の無い知恵の輪の様にいつまでも僕の心の中に絡まったままあった。

確かに僕はこの五年間は、恋愛に関しては形として目に見えるものは何も無かった。誰とも愛を育む事も無ければ、誰一人として幸せにしてやる事は出来なかった。一度きりしか無い人生。そしてその二十代前半と言う恋い多き年頃の中で叶わぬ恋を追いかける事は、とても無駄な事なのかもしれない。少なくともある人達はそれをもったいないと言った。けれど僕は知りたかった。僕がこの世の中に生まれてきた意味、そして彼女がこの世の中に生まれてきた意味を。だから僕はゆっくり考えたんだ。僕が求めるその愛の本当の姿を。そして気が付いた時、五年という月日が経ち僕はこの場所に立っていった。けれど今振り返って見て見ても、その五年間と言う月日は決して綺麗事だけでは語れなかった。

五年前に僕はこの曖昧な世の中の片隅で咲く小さな花のような恋を見付けた。そしてその小さな花のような恋は僕に本当の優しさや勇気を教えてくれた代わりに、それはそれ以上に僕をたまらなく孤独にする事もあった。それは失望と戦った日々もあれば、絶望と戦った日々もあった。例え僕がどんな綺麗事を並べたところで、僕は自分で自分を慰めなければ成らない夜もあったし、何もかもを捨てて誰かの温もりに触れたかった夜もあった。僕は僕である前に一人の男であり、そして一人の男である前に一人の弱い人間だった。たとえどんなに格好いい事を言っても、どんなに強がって踏ん張っていたとしても、それは優しい言葉一つ掛ければ今にも崩れてしまいそうな程弱々しいものでもあったんだ。だから僕は何度も何度も挫けそうになった。それは遥か遠くにある本当の幸せじゃなくていい、今ここにある手に触れる事の出来る偽りの幸せでもって。それは本当に苦しくて淋しいモノだったんだ。誰もが手にしている幸せを僕は手に出来なかったし、そしてそれは努力をしたり、信じ続ければ報われると言うものでは無かったのだから。けれどそんなやり場のない僕の気持ちが僕自信を押し潰してしまいそうな時、僕は本当に色々な人達に助けられたんだ。それは時にはシーさんであり、友達であり、夢の中の少女であり、昔の恋人達だった。そして何より一番支えになったのがいつでも笑顔の写真の中のナッキーだった。

そして僕は今この場所に立つことが出来た。そしてそれが結果的に良かったのかどうかはまだ分からない。けれど今確かに言える事は、それは決して僕にとって無駄な時間では無かったと言う事だった。

確かに僕は人が言う幸せは手には出来なかったかもしれない。誕生日もクリスマスイブも誰かと愛を語り合い、そしてその愛を確かめ合う様な事も無かったよ。けれど僕はきっとひとりぼっちでは無かった。僕には胸を張って自慢出来る素晴らしい仲間が居たし、そして素晴らしく好きな人が居た。きっと僕は誰もが手に入れられる幸せの代わりに、誰もが手に入れる事の出来ない幸せを見付けられたのかもしれない。人一倍淋しい思いをした分、人に優しく成れた。そして人一倍悲しい思いをした分、僕は確実に強く成れた。きっと五年前の僕ならこんな時こんな事を言っていたのだろう。

もし僕がエルトン・ジョンなら *your song* の様な素敵な歌を君にプレゼントしてあげられるのに。もし僕がリチャード・ギアなら君をジュリア・ロバーツの様に素敵な世界へ導けるのだろう。そしてもし僕が王子様だとしたらガラスの靴を片手に君を必ず探し

出し、そして君を捕らわれたその不幸の世界から救い出してあげる事だって出来たはずなのに・・・、なんて事を。けれど僕はこの五年間本当にいろんな事を学んだ。成長もしたしほんの少し大人にもなった。本当にナッキーと出会ってからのこの五年間と言う月日は僕に様々な試練と疑問を投げかけてきたんだ。そして僕はその一つ一つを不器用ながらも僕なりに解決してきたつもりだった。そして五年経った今、僕はその答えを出せる。

僕はエルトン・ジョンなんかじゃない。勿論リチャード・ギアでもなければ王子様でもない。僕は僕であり、僕以外の何者でもないんだ。だから僕は今僕が出来る事の全てを世界で一番好きな君の為にしよう。もし君が挫折そうな時は僕は僕の出来る精一杯の応援をするよ。もし君が幸せに成れたとしたら僕は僕の出来る精一杯の気持ち込めて祝福をするよ。例えそれがブラウン管越しであったとしても、例えそれが君まで届かなかったとしても、僕は僕の出来る精一杯のエールを君に送り続けるだろう。だってそれが今の僕に出来る全てなのだから。

そして僕は松井夏子宛に長い長い一通のファンレターを書いた。だってそれが今の僕に出来る全てだったのだから。

Dear 松井夏子

突然の手紙で済みません。

たぶんすぐに分かってしまうと思うので、先に言っておきます。僕は今まで殆ど手紙と言うものを書いた事はありません。当然ファンレターなんて書くのはこれが初めてです。だからどの様な言い方(言葉使い)をすれば良いのか良く分かりません。ですからこれからの文面で読みづらい箇所や馴れ馴れしい箇所があるかもしれませんが、初めにその様な箇所があるだろう事をお詫びいたします。

それともう一つ途中で勘違いの様な事を書くかもしれません。そしてそれによって君が傷つく事があるかもしれません。けれど決してそれは悪気がある事や、今流行りのストーカーの様な事ではなく、その事自体で君を傷つけたり迷惑を掛けたいと言う気持ちは全く無い事を分かってください。そしてこれからも君に迷惑掛ける様な事はしない事を約束します。

僕は正直言ってこの様な手紙が君の励みに成るのか、それとも迷惑なのか分からずに書いています。ですからもし仮に迷惑だとしたら、その場で破り捨てて構いません。本当は迷惑だって言う事が僕の分かる様にしてもらえればいいのですが、けれどももしそれが迷惑なのなら、きっとそんな事を教える事自体も迷惑なんだろうね。ただこの手紙は先にも言った様に、君を傷つけたくて書いている訳では無いことを分かってください。この手紙は僕と言うファンの純粹で素直な気持ちを書くつもりです。ですからもし迷惑で無いのなら最後まで読んで欲しいと思っています。まず初めに僕の事を書きたいと思います。

僕は1971年に東京の世田谷区で生まれました。そして三歳の時横浜に引っ越してきました。場所は夏子さんも良く知っているMスタジオの方です。それから二十三歳までそこに住んでいました。ですから生まれは東京なのですが、横浜の方が僕にとって肌に合った街の様な気がします。

横浜という街は夏子さんも知っていると思いますが、とてもいい街です。僕は東京も好



きだけれど横浜も好きです。夏子さんが何処の街に住んでいるのかは分かりませんが、その街が夏子さんにとっていい街であればいいなあと思います。

そしてそれから二年間僕は東京の自由が丘の近くで一人暮らしをしました。初めのうちは色々分からない事が多かったのですが、今ではいろんな事が見えてきて少し余裕も出来ました。けれど未だにダメな事が一つあります。それは料理です。こればっかしは幾ら練習しても上手くなりません。初めのうちは美味しそうなものも、出来てみると辛すぎたり甘すぎたりと、とにかく美味しくないのです。夏子さんはどうですか？ 料理は好きですか？ きっと女の子だから美味しい料理を作れることでしょう。でも言い訳するわけではないのですが、一人分の料理は経済的に見ても作るより食べに行った方が安上がりだと、どこかの誰かが言っていました。ですので僕の食生活は殆ど外で済ませます。勿論経済的だからです(うそ)。

けれどそれ以外の掃除、洗濯なんかは結構まめにやっていて、一応生息じゃなく生活しているぞと言えると思います。

けれどそんな生活も早くも二年が経ち、初めは広すぎたこの部屋もいろいろ余裕が出来てくると狭く感じてくるものなんですね。ですので今度は横浜の方に少し広い部屋を借りようかと思っています。今のこの場所は凄くいいところです。駅も近いですしお洒落な店も多く、美味しいコーヒーショップや美味しいパン屋なんかもあります。けれど今住んでるワンルームマンションでは、部屋にベットとテレビ、そして本棚を置ともう何も置けません。ですので少し家賃が安くて広く、仕事場からも近い部屋のある横浜の方に引っ越そうかと思っています。

元々実家も仕事場も横浜なので、そっちの方が今より生活もしやすいんです。そして仕事場からも近く、そして今よりほんの少し広くなった部屋で僕のしたい事は、まず机を一つ買って置きたいことです。そしてその机の上で僕は今までまだ誰にも言ってはいないのですが夢を叶えたと思っているのです。僕はどちらかと言うと、今まで多くの夢を語ってきました。小さい頃はお医者さんに成りたいと言っていたし、学生の頃はミュージシャンに成りたいと思ってバンドを組んだりしていました。そして社会人になり、とにかく人に夢を与えられる人に成りたいと思っていました。けれど正直なところ僕はその夢の中の一つとしてまだ叶えてはいません。今まで僕は夢は見続けて行くものだと思っていました。けれど本当はそうじゃないんですね。勿論夢を見続ける事は大切だと思います。けれど本当に大切な事は夢を見る事ではなくて、自分が見るその夢に一体どうすれば今の自分が近づけるのか、そしていつの日かその夢を現実にかえられる様に努力する事が大切なんですね。だから僕は夢を叶えたいと真剣に考えました。そして僕はある一つの夢に出会った。それは今でに僕が出会ったどんな夢よりも地味なものであり、時間のかかりそうな夢なんです。けれど何故かその夢に出会った僕は、まるである日突然声を無くしたヒバリの様に人に夢を語れなく成りました。今までの僕なら、俺は将来ミュージシャンに成るよ。とか、絶対大物に成ってやる。とか良く仲間達と一晩中、語り合っていたのですが、何故かその夢に出会った瞬間、僕は何故か人に気軽に夢を語れなく成ってしまいました。何かその夢を口に出すことによって、その夢自体が軽くなってしまいそうな気がして。それにきっと本当の夢は口に出して語るものではなくて、心と体で語るものなんじゃないかって。だから僕はそれを今まで誰にも言っていません。これから多きを語る事も無いのでし

よう。そして今日ここで僕の夢を初めて口にします。こんなこと急に言われて困ってしまうかもしれませんね。けれど僕は君に伝えたいのです。僕が叶えたいその夢を。

僕の夢は詩人に成ることです。

正確に言うと色々な物語や、色々な事実を人の心に伝えて行きたいのです。それは時には童話であるかもしれません。そして時には詩かもしれません。とにかく僕は自分が今まで見つめてきたことや聞いたこと。そしてそんな人生の中で手に出来た大切なものや失ってしまった大切なもの。そんなもの全てを物語と言う風に乗せて、この何もかもが真実が誰もが気が付かないうちにすり替えられてしまう現実を、必死に真実を見つめて歩いていく人々に伝えたいんだ。僕が今まで挫けそうな時に会った心暖まる物語達のように。勿論僕はプロじゃない、だからそこには一切の営利目的はありません。それに例えプロだとしても僕が書く作品は営利目的はきつと無いでしょう。何故なら僕が物語を書きたい本当の理由は、僕の書いた作品を読んでくれた人が、ほんの少し今より強くなれて、そして強く成れた分ほんの少し人に優しく成れて、そしてそんな強く、そして優しく成れた自分を純粹にほんの少し今より好きに成れればと思って書きたいからです。けれどきつとこれは全て理想なのでしょう。世の中はそんなに甘くはないよと言う人もいるかもしれません。勿論僕もこの世の中がそんなに甘くないことや、努力が全てに答えを出せるわけでは無いことも知っています。けれど僕は頑張ってみたいんだ。だって夢を叶えられる人だつてきつといるのだから。

そして僕はほんの少し広くなった部屋できつと時間はかかるかもしれないが、僕の精一杯の気持ちを込めて一つ一つ物語を書いていくつもりです。けれどこの手紙を読んでいる君はきつと何故そんな事を私に言うの？ と思っているかもしれないね。だぶん僕が反対の立場だったらきつとそう思うでしょう。では何故僕が自分の夢を君に話したのかを書きたいと思います。

もしかしたら途中でこの手紙はまるで的を無くした矢の様に、行く宛の無いまま終わってしまうかもしれません。正直僕は本当に言いたい事が上手く話せるかどうか分かりません。もし仮に上手く話せたとしても君が途中でこの手紙を破り捨ててしまうかもしれません。そして例え君が最後まで読んだとしても、その後に残るものが果たして君にとって良いものなのか、それとも不快なものなのかは分かりません。ただ僕が夢への第一歩を踏み出す為には、ここから先を君に聞いて欲しいのです。迷惑なのかもしれませんが分かってください。そして僕はこれから書くことで君が傷付かなければ良いのですがと思って書きます。

そうそれは丁度今から五年位前に僕はある小さな恋に出会った事にあります。

その時のその恋はまるで都会の片隅に咲く小さな花の様に、僕が手をかざしてあげないと、それは今にも凍てついた都会の冷たい風に吹き飛ばされてしまいそうな程弱いものだった。その頃の僕は特に愛に飢えていたという事はなく、どちらかと言うと溢れる程の愛に本当の自分を捜していたのかもしれない。そしてそんな時に僕は一つの小さな恋に出会った。

それはブラウン管越しの恋だった。そして彼女の名はナッキーと言った。初めて僕がブラウン管越しに彼女を見た時、僕は正直こんな世の中にもこんなに素敵な人がいるんだなあと思った。けれどその時はきつとただの憧れに過ぎないと思っていたんだ、きつとそれ

はテレビのブラウン管を消せば僕のその憧れも、テレビの画面と同じように消えてしまうんじゃないかと。きっと誰もが夢見る憧れに過ぎないと。

けれど幾らテレビのスイッチを切っても、幾ら時が流れても僕の憧れに似た気持ちは消える事はなかった。そしてそれは消える事の無い代わりに、憧れからやがて恋に変わっていった。

それは初恋にとても良く似た恋だった。そしてその初恋に似た恋は一体どうすればいいのかも分からずにいる僕に、いつも期待と不安、喜びと悲しみを交互に運んできました。

僕は初めはナッキーを見ているだけで良かった。彼女の声を聞いているだけで良かった。そこに笑顔があれば僕はそれだけで幸せを感じることも出来た。見返りもいらない、何処にも辿り着けなくてもいい、ただそこに彼女の笑顔があり、ただそこに彼女の笑い声があればそれだけで良かった。そしてそれはまさに十二、三歳の時に経験した初恋だった。

けれどその頃の僕には、初恋を経験するには色々経験しすぎていたのかもしれない。男と女の愛の行方。愛の始まりと愛の終わり。そして愛のその本当の意味を知り過ぎていたのかもしれない。やがて僕の彼女に対しての気持ちは、彼女を大切に思いたい。彼女を守りたい。彼女を幸せにしたい。と幾つかの季節と共に変わっていった。

勿論分かっていたよ。彼女は僕なんかが幾ら背伸びをしても、幾ら手を伸ばして見ても、手の届かない存在だと言うことを。けれど人はきっとわがままな生き物なのかもしれないね。上ばかり見てしまうんです。自分の足下も見えていないのに。

夏子さんはそう言う経験ありますか？　とうてい叶わぬ恋を夢見る、そんなこと。

僕は実は初めてでした。今思えば僕の恋はいつだって手の届く所にありました。それはふられたり上手く行かない事が無かったと言う事ではなくて。いつでも手の届きそうなものばかり見て、手が届かないと分かればすぐにまた別の手の届きそうなものを探してしまうと言う、要するにすぐに諦めてしまっていたのかもしれない。きっと手は届かないんだろうって。もしかしたら頑張れば手が届いたかもしれないものまで。そしてそれは夢に対してもそうだったのかもしれない。僕は今まで多くの夢を語って来ましたが。けれどその中のどの夢も僕は叶えてはいなかったのかもしれない。きっと五年前その小さな恋に出会うまでの僕の人生は、ただ結果ばかりをあせって求めていたのかもしれない。けど本当に大切なものは違うんですね。手の届くものを幾ら集めたとしても、それは砂に書いた絵の様に、風が吹けばその後には何も残らないものでしかないんですね。だからそれまでの僕はきっといろんな事を人並みに経験したかもしれない。けれどそれは結局、言い換えればそれしかなかったと言う事でもあった。そして僕は五年前ある一つのドラマとその中に居た、ナッキーと言う一人の少女に出会って、その事に気が付いた。

ブラウン管の中のナッキーは叶わぬ恋を見つめながらも、普通の恋がしたいと言っていた。そしてブラウン管の外の僕も、やはり叶わぬ恋を見つめながらも、普通の恋がしたかった。

それは特別なモノじゃなくていい。そんなブラウン管越しじゃなくて、例えばそれは街角だったり、学校の教室だったり。そしてそこで偶然出会うんだ。初めは二人ともお互いの存在なんて全く意識なんてしてないんだ。けれど時が経つにつれてお互い少しずつ少しずつ気になり始める。そしてお互い共通しているモノや、相手の良いところ悪いところが見えてくる。そしてまた少しずつ少しずつお互いの距離が近づいて行く。出来る事なら僕

はそんな本当に何処にでもある様な恋をしたかった。

それは仮に恋人なんかじゃ無くていいんだ。そこには口付けも存在しなければ、愛という言葉も存在しなくても構わない。僕はただ彼女を幸せにしたただけなんだ。僕はただ僕の好きな九十九里の星降る夜空の下で、波の音楽に合わせてチークダンスを踊ったり、彼女の誕生日には彼女の好きなディズニーランドに行って、ミッキーやミニーやドナルドダック、そうそこに居る全ての人達と彼女の誕生日をお祝いしたりしたただけなんだ。すごくそばに居て欲しかった。そしてそばに居てあげたかった。色々な話を聞いてあげたかったし、色々な話を聞いてもらいたかった。僕はただ信じたかった。そして僕を信じてもらいたかった。ただそれだけで良かったんだ。

けれどそれは綺麗事なのかもしれないね。だって僕はもしかした彼女と出会ったら彼女のその可愛い頬にキスしたく成ってしまうかもしれないし、彼女が淋しそうにしていたらその小さな体を強く抱きしめていたく成ってしまうかもしれない。今まで僕が愛した人達と同じ様に。

けれど僕は五年前僕が出会ったのは、何処かの街角では無く、そしてそれは何処かの教室でも無く、それは僕の部屋の小さな14インチのブラウン管だった。

そして僕はそのブラウン管に映った一人の女の子に恋をした。けれどそんなのちっとも普通じゃ無いよね。きっと異常な事なのかもしれないね。僕だってその事は良く分かっている。けれどその時僕にはそれがたまたま普通の恋に見えてしまったんだ。誰もが会う普通の恋の様に。そしてそれは僕が諦めずに信じ続ければ、いつの日か手が届くかもしれないと言う恋の様に。

僕は初めてだった、こんなに長い間何かを見つめ続けたのは。それは本当に希望、欲望、失望、絶望の日々でした。ブラウン管越しの出会いが普通の恋に見えたと言ってもそれは初めのうちだけで、その恋を見続けようとすればするほど、普通の恋なんだと思えば思うほど、いくつもの現実と言う壁が僕に重くのしかかって来た。諦める事は簡単だった。今までの様にただ横を見ればいいんだ。きっと幾らでも別の恋を見付ける事は出来ただろう。だってこんなに広い世の中なのだから。

けれど僕は諦めたく無かった。それは僕にとってやっと出会えた恋だったのかもしれない。それは彼女の笑顔がとても暖かかったからかもしれない。そしてそれはもう何も諦めたくないと言う成長した僕だったのかもしれない。その答えは分からない。けれど僕がこの五年間、諦めずに信じてきて分かったことがある。それはきっとそれまでの僕は目に見えるモノや、その小さな手のひらに感じるモノだけを集めようとしてしまっていたのだろうと言う事だった。勿論それはそれでとても大切な事だと思う。理屈はどうであれ人はいつだって誰かの優しさや温もりに幸せを感じるものなのだから。けれどそれは例えどんなにこの世の中が広くても、例えどんなにこの世の中に愛が溢れていても、それは何処かの誰かとじゃ無く、たった一人の本当に大切に思える人じゃ無ければ意味が無かった事に。そして仮に例え目に見えるものや手に触れる事の出来るものがそこに無かったとしても、人は答えを出せるし幸せを感じる事も出来る事を。

そして五年間色々な壁にぶつかって、時には挫けそうに成りながらも歩いて来たこの道に僕は今答えを出せる。

ある生物学者は言っていたよ。リチャード・ドーキンスの利己的遺伝子の説が正しけれ

ば見返りの無い愛など存在しないと。そしてこの何もかもが誰もが気が付かないうちに、すり替えられてしまう現実では永遠に変わらない不変的なモノなど無いのかもしれない。けれど僕が傷つきながらも必死に見つめてきたこの大切な気持ちはきっと愛だよ。

きっと永遠に変わる事の無い愛だよ。

そしてこれを読んでいるナッキー、そう夏子さん君に僕は言うよ。

僕はきっとこんなに人を好きに成る事は二度と無いだろう。だからもう二度とこんな事は言いません。だから僕の気持ちを真面目に聞いてください。

僕は君が好きです。

もし誤解されたらそれは仕方ないかもしれませんが、僕のこの気持ちは決して汚らわしいモノや、歪んだモノではありません。本当に心から純粋に思っている気持ちです。だから見返りも要りません。

ただ僕は伝えただけなんだ。僕が見付けて全ての答えや僕の気持ちを。

ねえナッキー君は知らなかったと思うけれど。僕は君と出会って本当に色々な事を学んだ様な気がするんだ。愛や夢の大切さ。幸せの意味。そして目に見えるモノだけに意味がある訳じゃ無く、諦めてはいけないモノがあることを。

きっと幸せって言うモノはどっかの誰かじゃなくて、この世の中で一番大切な人を信じていられる事なんじゃないのかな。だからもし君が今誰かを愛していて、その愛が見えなく成りそうに成ったら、僕の言っていた事を思い出してください。そしてもし君が叶わぬ愛を求めて孤独を感じたら、僕と言う男を思い出してください。だって君は孤独じゃないんだ、この世の中にはもう一人叶わぬ愛を見つめている男がいるのだから。そしてもし君が夢や愛に迷った時は僕を呼んでください。その時もし君が僕を信じてくれるのなら、僕は地球の裏側に居てもミッキーを連れて君を励ましに来ますから。

勿論そこには愛なんて存在しなくたっていいんだ。僕はただ君の力に成ればそれだけでいいと思っているから。

そしてもし君がここまでこの手紙を読んでくれていたとしたら、僕は心かありがとうを送ります。そしてこの場で約束します。今までもそうであった様に、これからも君に迷惑がかかる様な事をしない事を。

そしてこれだけは許してください。それは陰ながら君が頑張っている時は心から応援させて欲しいことと、君が幸せを掴んだ時は心から祝福させて欲しいこと。それと例えどんな事があっても君を信じたい事と、そして最後に君をいつまでもずっと好きでいる事を許してください。

本当に勝手な事ばかり一方的に言ってすみませんでした。けれど自分勝手かもしれませんが、僕はやっと少し安らぎを覚えました。僕はやっとこれで先も言った様に、夢への第一歩が踏み出せそうです。もし仮に僕が将来小説家として成功した時は、私がいたからあなたは成功したのよって言われても、きっと僕は何も言えないんだろうね。

まあそう成れるかは別として、僕はこれからはしばらく夢を叶える事に頑張ってみよう

と思います。

だから夏子さんもお体に気を付けて、いつまでも僕らに素敵な夢を見せてください。  
そして最後に本当に色々どうもありがとう。そしてさようなら。

f r o m K A Z U Y U K I

---

僕は正直言って嬉しかった。やっと胸が張れた気がした。僕が求めたこの愛は、きっとみんなが求めるその愛と同じだよ。同じだったんだよ。人は嬉しい時も涙が出るだね。僕はナッキーに出会うまでその事を知らなかったよ。僕は正直この時初めて知ったんだ。そんな当たり前の事の全てが。

そして僕がナッキー宛に書いたファンレターと言う名のラブレターは、僕が彼女に伝えたかった事の全てを書いたつもりだったが、それはもしかしたら僕が伝えたかった事のほんの一握りだったのかもしれない。けれどそんな事はどうでも良かった。だって僕が彼女に伝えたい事の全ては、きっとこんな紙切れに何万枚書いたとしても伝え切れない程沢山あるのだから。

そして僕が彼女宛に書いたラブレターは、結局ポストの先の彼女の元には行かずに、今僕の目の前のテレビの上に置かれたままだった。

一体何故なんだろう？ 僕はその手紙を書いた事だけで満足してしまったのだろうか？ それとも彼女に出すにはまだ早過ぎると思ったのだろうか？ 僕は目をつぶってみた。そしてそこには今より少し幼い五年前の僕が居た。

今思えば僕はある意味あの時、一つの分岐点に居たのかもしれない。それはうんざりしながらも、その先にある夢や自由だけを握りしめながら過ごした高校生活が終わり、やっと夢や自由を手に出れると言う時だった。けれど僕はいざその権利を手に入れたと言うのに、何一つ手には出来なかった。それは現実が厳し過ぎたのかもしれないし、僕が甘過ぎたのかもしれない。いつも目先のやらなければいけない事に追われる日々だった。そしてそれは何か大切な事を忘れて、失う事は簡単な事だった。だって手を離せばそれだけで良かったんだから。

そうすればきっと僕の気付かないうちに、何処かの誰かが子供の頃に信じていた夢をすり替えて手渡してくれるんだから。本当にそんな時だった。五年前の僕が一人の少女と出会ったのは。そしてその少女は何一つ大切なものを忘れないで居られた僕の心の中に今もいた。

一体あと何年その少女は僕の中にいるのだろうか。もしかすると十年後の僕は今と違う誰かと恋に落ち、そして子供の一人でもいるのかもしれないし、今と全く変わらずにその少女を好きで居続けているまた少し成長した自分がいるのかもしれない。けれどそれは五年前の僕が今を想像出来なかった様に、今の僕には想像なんて出来なかった。ただ今僕が分かる事は、僕は彼女と出会って何処にも行けなくなった訳じゃない。それは行き場の無い袋小路では無く、僕は僕が僕である為の僕に行く場所に向かっていたんだ。そしてその先に道はある。

僕は目を開けてみた。そこには五年前よりほんの少し強く、そしてほんの少し優しく成

れた僕が居た。僕は十年後の自分に何一つ約束なんて出来やしない。けれど五年前の僕には言ってやれる事がある。僕はこの五年間、松井夏子を好きで居続けられて本当に良かったと。そして僕は僕なりの答えを出せたと。それは僕は諦めたく無い愛を見つけた事と、そして叶えたい夢に出会った事だった。だから僕はまた歩き出すよ。僕を支えてくれた全ての人達と、そしてナッキー君と。だって僕らはまだまだ知らない事や、やるべき事が沢山あるのだから・・・。

そしてもしこの先僕が何処かの街角で偶然ナッキー、君と出会う事があったとしたら、僕は僕の言葉で迷わず胸を張って伝えたい事があるんだ。

僕はずっと君の事が好きだったよ。そうI LOVE YOU・・・と。

~きっとこの世の中には色々な愛があるのだろう。それは男女の愛は勿論、親子の愛、兄弟愛、動物に対しての愛だってある。きっとそれはそのどれをとっても間違いなんて存在しないのだろう。例えそれがモノや、アニメの世界の人に対してだったとしても。けれどこの世の中には認めてはいけない愛もある。

それは思いやりの無い愛、そして相手の気持ちを無視した愛。きっと僕らは長い人生の中で色々迷ったり、悩んだりする事があるだろう。そして時には自分の弱さで誰かを傷つけてしまうかもしれないし、自分の事が嫌いに成ってしまう事もあるかもしれない。勿論頭で分かっているけども素直に成れない時だってあるだろう。けれどそんな時も、取り間違えてはいけないんだ。その真実を。

僕は時々思うことがあるんだ。愛は本当に地球を救えるんじゃないかって。

そしてそんな日もそう遠く無いんじゃないかって。

だって愛はきっとそんなに難しくなくて遠くにあるものじゃなくて、もっと単純でずっと近くにあるものなのだから・・・。~

・・・I LOVE YOU すごく切ない言葉だから

I LOVE YOU とても壊れやすいモノだから

だから僕等は優しく そして強く抱きしめ 口付けを交わしたね

若さも弱さも関係なくて 全てはそこにあった

ただ時の流れに上手く乗ることが出来ず 僕等は人混みの中で支え合った

君は君の夢 僕は僕の夢を重ね合わせてはそれを壊した

君の言葉 僕の言葉にはいつでも不確かなモノが多すぎたから

だから僕等はいつでも不安の中に居たね

I LOVE YOU 僕はもう一度言うよ

I LOVE YOU だって僕等が辿り着く所なんて

他には何処にも無いのだから・・・

~ THE END ~

1997'12.20

この作品は心から大切に想う君に捧げます。

そしてこの作品を読んでもくれた全ての人に、僕は心から感謝いたします。

本当にどうもありがとうございました。

KAZUHIKO SAITO